KOBUNSHA BUNKO

推理傑作集

第二の標的

セカンド・ターゲット

西村京太郎



光文社文庫

光文社文庫絶賛発売中！

文庫書下ろし

- ●青春の神話 ―― 森村誠一
- ●謀略の滑走路 ―― 大藪春彦
- ●鎌倉薪能殺人事件 ―― 斎藤栄
- ●暗黒の狩人 ―― 勝目梓
- ●卑弥呼塚殺人事件 ―― 島田一男
- ●妖魔陣 ―― 菊地秀行
- ●確率2/2の死 ―― 島田荘司
- ●死霊鉱山 ―― 草野唯雄
- ●007を追え孔雀警視 ―― 志茂田景樹
- ●帝王コブラ ―― 門田泰明
- ●天城峠殺人事件 ―― 内田康夫
- ●怒りのヘリック ―― 田中光二
- ●はるひワンダー愛 ―― 辻真先
- ●逃げ出した死体 ―― 山村正夫
- ●眠れぬ夜の悪魔 ―― 青柳友子
- ●CFガール ―― 喜多嶋隆
- ●あっちゃんの推理ポケット ―― 田中雅美
- ●H殺人事件 ―― 清水義範
- ●太陽の汗 ―― 神林長平
- ●ロンドン警視庁特派捜査官 ―― J・メルヴィル 高見浩・訳

オリジナル

- ●遅れて来た客 ―― 赤川次郎
- ●第二の標的 ―― 西村京太郎
- ●その子は目撃者 ―― 夏樹静子

カバーデザイン　亀海昌次
著者写真　大木茂

光文社文庫

推理傑作集・オリジナル

第二の標的（セカンド・ターゲット）

西村京太郎



光　文　社

目次

第二の標的（セカンド・ターゲット） 5
謎の組写真 63
アクシデンタル・ジャイブ 139
神話の殺人 179
危険なダイヤル 229

解説　中島河太郎 286

第二の標的（セカンド・ターゲット）

1

新宿から西へ伸びるN電鉄の終電車は、午前〇時四五分に、新宿を出る。

この電車はいつも満員である。

乗客の顔ぶれも、いつも似ている。

酔っ払ったサラリーマン。香水の香りをまき散らすホステス。疲れた顔で麻雀（マージャン）の話をしている若者は、時間になって、雀荘を追い出されたのだろう。

新宿を出る時は満員でも、一駅ごとに乗客は減っていく。

終電だけに、途中から乗る客はいないから、路線の中ほどまでくると、もう車内は、がらがらだった。

終電が、妙にわびしく見えてくるのは、この辺りからである。

酔っ払いが、げえげえと床に吐く。まさに、戦いすんで日が暮れての感じがする。他の乗客も、眼を閉じて舟を漕いでいて、気にもかけない。

その日も、N電鉄の終電の中は、同じようなものだった。

終点のK駅に着く頃には、六両連結のどの車輛にも、数人の乗客しかいなかった。

電車がホームに入ると、酔っ払いは、何か怒鳴りながら立ち上り、眠っていたサラリーマンは、眼をこすりながら、降りる準備をする。

ドアが開くと、ぞろぞろと降りていくが、車内で、いっこうに起きない乗客もいるし、ホームでまたぶっ倒れてしまう乗客もいる。それを起こしたり、介抱したりするのも、車掌や駅員の仕事である。

車掌の鈴木はいつものように、最後尾の車輛から見ていった。酔っ払いが吐いたところには、ひとまず新聞をかぶせていく。

(今日は、どうやら、寝込んでしまった客はいないらしい)

と、思いながら先頭の箱まで歩いて行った。が、

(やはり、いた)

鈴木は、がっかりしたような、ほっとしたような、妙な気分で、新聞を顔にかぶって動かない客の傍へ近づいていった。

(酔っていると、手こずるな)

と、思いながら声をかけようとして、鈴木は、急に足を止めた。

眼鏡の奥の眼が、これ以上開かれないというように大きく見開かれている。大きく広げた新聞紙の真ん中に、突き刺さったナイフの柄が見えたからだ。

首を強く振ってみた。が、ナイフの柄は、いっこうに消えてくれない。それどころか、新聞が、見る見る、赤く染まっていくのだ。

サラリーマン風のその男の両足の間に、ふいに、ぽたぽたと血が落ちはじめた。

血に染まった新聞が、その重味に耐えかねたように、ばさッと上半分が折れて、真っ青な男の顔が剝き出しになった。

死人の顔だった。

2

死体は、電車の床に横たえられた。

流れ出た血は、座席のビロードを赤く染め、床の板を、赤黒く汚している。その血は、急速に乾きつつあった。

四十歳前後の男だった。紺色の背広の襟には、誇らしげに、銀色の会社のバッジがついている。だが、死んでしまった今となっては、何の価値もあるまい。

十津川刑事は、死体の傍にしゃがみ込み、背広のポケットを探った。

一万六千円入りの皮財布と、定期入れが見つかった。

新宿乗りかえで、地下鉄大手町までの定期で、T物産社員の身分証明書が入っていた。
T物産は、中堅クラスの商事会社である。
そこにあった男の名前は、坂西宏（さかにしひろし）。年齢は三十八歳になっている。
現住所は、このK駅から三百メートルほど北の公団住宅だった。
「すぐ家族に知らせてやってくれ」
と、十津川は、同行した若い刑事の一人に、定期入れを渡した。
「新聞で返り血を防いで、ぐさりというわけか」
と、同僚の宮本刑事が、十津川に向って、舌打ちして見せた。
宮本は、めったに笑わない男である。陽焼けした黒い顔には、いつも深い縦じわが寄っている。だから、綽名（あだな）が、しぶうちわ。しかし十津川にとっては、かけがえのない相棒である。
「それは、犯人が、殺しに慣れているということかい？」
「そうはいっていない。ただ、要領のいいやつだとはいえるな。こういう殺しは、特に好きになれんね。多分、犯人は、上手（うま）くやったと笑っているだろうからね」
宮本刑事は、また、口をへの字に曲げた。
「まだですか？」
と、駅長が、車内に入って来て、十津川たちにいった。

「この車輛を早く車庫へ入れて、点検をしたいんですがね。死体を、外へ運び出して構いませんか？」

「もう少し待って下さい」

鑑識が写真を撮り終るのを待って、死体は、ホームに運び出された。

被害者の妻が、若い刑事に連れられて駈けつけたのは、その直後だった。

「坂西孝子さんです」

と、その刑事が、十津川にささやいた。

孝子は、呆然として、死体を見下ろしていたが、そのうちに、ホームに膝をついて、激しく嗚咽しはじめた。

年齢は三十五、六歳で、平凡な感じのする妻だった。

十津川は、間を置いて、彼女に声をかけた。

「お悲しみのところをなんですが、犯人逮捕のために、協力して頂きたいのです。ご主人に間違いありませんね？」

十津川は、口ごもったような調子できいた。こんな時の質問は、いつになってもぎごちなくしか出来ない。

「ええ。主人です。誰が、主人を？」

泣きはらした眼で、坂西孝子は、十津川を見た。
向い合ってみると、遠くで見たときよりも、大柄な女性だった。
「ご主人は、いつも、こんなに遅くお帰りなんですか？」
「ここ半月ばかりは、毎日、終電車で帰って来てました」
「仕事で？」
「ええ、主人は、そういっていました。半月前に、新しい仕事になって、それがとても忙しいと」
「どんな仕事か、ご主人は、あなたに話しましたか」
「いいえ。主人は、仕事のことは、あまり話さない方でしたから」
「ご主人が殺されるようなことに、何か心当りはありませんか？」
「全然。主人は、人に恨まれるような性格じゃありません。他人と喧嘩をしたこともありませんし、他人の悪口をいったこともない人なんです」
坂西孝子は、首を横にふり続けた。まるで、自分の大事なものが、十津川によって汚されてはならないとでもいうような、必死な否定の仕方だった。
まだ、死体が眼の前にある際だから、質問も、そう突っ込んだものは出来ない。
彼女を、いったん帰したあと宮本刑事は、

「どんな夫婦生活をしてたか、簡単に想像できるような女性だな」
と、十津川にいった。
「どんなだい？」
「典型的なサラリーマン夫婦さ。夫は、真面目な中堅社員で、仕事第一の男だ。バーやゴルフぐらいは行くだろうが、浮気なんてものは出来はしない。細君の方も、子供の成長だけが楽しみで、悪いことなんか出来ない女だ。面白味のない女なのを、自分では、貞淑と思い違いをしている。単調だが、破たんのない家庭生活だ。夫婦のあれも週一回ぐらいで、細君は不満でないこともないが、それを口にしたりはしない。貯金も、まあまあの額があって、いつかは、公団住宅を出て、一戸建の住宅に入りたいと思っている」
「面白い解説だがねえ」と、十津川は、笑った。
「それじゃあ、事件なんか起こりそうもないが、仏さんは、殺されたんだぜ。殺されるだけの理由を持っていたということだよ」
「おれのいいたいのは、どんなに退屈な生活だったかわからないが、殺される理由は、家庭内にあったんじゃなくて、外にあったんじゃないかということさ」
宮本刑事は、怒ったような声でいった。

3

宮本刑事の言葉は、外見的には当っていたようである。

殺された坂西宏と、妻の孝子は、十一年前に結婚していた。

典型的な職場結婚である。結婚後三年間は共働きをしたが、長男が生れると、孝子は家庭に入った。現在、八歳になる男の子と、五歳の女の子がいる。近所の評判では、まあ円満な夫婦だった。

「君のいう通りだったな」

と、十津川は、宮本刑事にいった。

二人は動機を求めて、翌日、被害者が働いていたT物産に足を運んだ。

上司の管理部長に会った。

髪に白いものが見える初老の管理部長は、明らかに、部下の死と、警察の訪問を迷惑がっていた。

「社内に原因があるとは思えませんな。何というんですか、流しの犯行なんじゃないですか？金めあての」

「違いますね。金も、腕時計も、盗られてはいませんよ」
宮本刑事は、相変らず、しかめ面をしていった。
「しかし、いくら考えても、坂西君が殺されるような心当りはありませんからねえ。まじめな社員で、誰からも好かれていましたからな」
「半月前に、新しい仕事についたそうですね」
と、十津川が、部長を見た。
「ええ。新しい仕事をやって貰いました」
「その仕事が忙しくて、毎日、終電車で帰宅していたと聞きましたが？」
「まあ、忙しかったかもしれませんね。しかし、仕事のために殺されたとは、とうてい思えませんよ」
「どんな仕事を、坂西さんはやっていたんですか？」
「まあ、経理の仕事です」
「会計の仕事ですね？」
「ええ」
「今は、決算期じゃないと思うんですが、なぜ、坂西さんは、毎日、そんなに忙しかったんですか？」

「いろいろと、ありますからねえ」

どうも、管理部長の答えは、あいまいだった。やたらに仕事が原因で殺されたとは思えないといいながら、その仕事の説明が、あいまいである。

(何かある)

と、十津川は、思った。

宮本刑事も、同じように感じたとみえて、

「坂西さんが、ここ半月間やっていた仕事の内容を、くわしく説明して頂きたいですな」

と、眉を寄せた。

「それが、実は臨時の仕事でしてね」

「構いませんよ。話して下さい」

「しかし、坂西君が殺されたことと、関係がないと思いますがねえ」

部長は、あくまでも、あいまいなままに逃げようとする。そうすれば、かえって疑惑を増すだけなのがわからないらしい。

十津川は、咳払いをしてから、

「話して頂けないと、こちらとしても、いやな手段に出ざるを得なくなりますがね」

と相手を脅した。

管理部長は、案の定、顔色を変えて、
「どうするとおっしゃるんですか？」
「ただ、あなたに、署まで来て頂くことになるだけのことです。Ｔ物産の社員が殺されたということで、新聞記者も来るでしょうな。そこで、証言して頂くことになるだけのことです」
「それは困る」
「じゃあ、話して下さい」
「秘密は守って頂けますか。会社の恥になることで、内聞にしておきたいので」
そんな断わりを言ってから、管理部長が話してくれたことは、次のようなものだった。
管理部会計課の仕事は、Ｔ物産で使う車や、事務用品を購入することである。大きな会社だから、事務用品といっても、年額にして二千万円を超す。また、車は、現在三十二台で、二年ごとに新車に買いかえる。
最近になって、会計課長が不正をしているらしいという噂が流れはじめた。業者となれ合いの不正である。会計課長は五十歳のベテラン社員で、すでに十年間も、会計の仕事をしていたから、帳簿を調べるとしても、十年前からの帳簿を当っていかなければならなかった。
その仕事を命ぜられたのが、被害者の坂西宏だった。なるべく早く、結論を出さなければということで、坂西は、毎日、遅くまで帳簿と格闘していた。帰りが終電車になっていたのは、

そのためである。

4

「それで、不正は発見されたんですか？」

と、十津川がきいた。

管理部長は、小さな溜息をついてから、

「帳簿上に、合わない数字が出て来たことは事実です。単なるつけ落しでは、通らん数字です。まだ、全部の帳簿を調べたわけじゃありませんが、会計課長が不正を働いていたことは、もう疑いがありません。まことに残念ですが」

「その会計課長は、今、どうしているんですか？」

「今は、休職処分にしてあります。いずれ、懲戒免職ということになるんでしょうが」

「名前と、住所を聞かせて頂けませんか？」

「新聞記者には、知られぬようにして頂けますね。もし、新聞や週刊誌に書き立てられたら、うちの会社にとって、大変なイメージダウンになりますから」

「新聞記者には話しませんよ」

と、十津川はいった。

現在、休職処分を受けている会計課長の名前は、田村晋太郎。住所は、中央線の三鷹市内と聞いた。十津川刑事の眼が光った。

事件の起きたK駅から、三鷹駅までは、車で十二、三分の距離だし、タクシーの便もあったからである。歩いても、一時間もあれば辿りつける距離だった。

「この田村晋太郎さんには、休職の理由を伝えてあるのかな？」

宮本刑事が、ぶっきら棒なきき方をした。

「はっきりとは、いいませんでしたが、あれだけ噂になっていたんですから、わからなかったことはない筈です。休職をいい渡したとき、田村君が理由をきかなかったのが、その証拠だと思いますね」

「坂西さんが、帳簿を調査していたことは、どうですか？　田村さんは知っていましたかね？」

「はっきりはわかりませんが、こういうことは、自然に耳に入りますからねえ」

と、管理部長は、いってから、あわてて、二人の刑事に向い、

「だからといって、田村君が、坂西君を殺したなんてことは、絶対にありませんよ。まさか、あなた方は、そんなことを考えていらっしゃるんじゃないでしょうな？」

「可能性があるものは、全部調査するのが、われわれの仕事でしてね」

と、宮本刑事がいった。

相変らず、無愛想なしゃべり方である。

二人の刑事は、その足で、三鷹へ廻ってみることにした。

「どうだい？　君の勘は？」

と、三鷹に向う電車の中で、十津川は、宮本刑事の意見を聞いた。

「わからんねえ」

「動機としては、弱い気もするがね」

「なぜ？」

「被害者は、個人的な恨みから、田村晋太郎のつけていた帳簿を調べていたわけじゃない。会社の命令でやっていたわけだろう。それを、田村が坂西を殺すというのは、ちょっとおかしい気もするんだがね」

「そりゃあ、理屈さ。だが、人間は、感情の動物だ。理屈で動かずに、感情で動く。だから、田村が被害者を恨んだことだって、十分に考えられるね」

わからないといったが、宮本は、これから訪ねて行く田村という男を、有力容疑者と考えているようだった。

田村の家は、三鷹駅から、K駅寄りに二百メートルほど歩いたところにあった。木造二階建だが、庭の狭い、小ぢんまりした家だった。

田村晋太郎の第一印象は、あまり良いとはいえなかった。もちろん、たいていの人間が、刑事の訪問を受けて嫌な顔をする。十津川にしても、笑顔で迎えられたという経験はあまりない。だが、それにしても、田村は、陰気で、非協力的だった。

会社での不正問題については、第三者に話す必要はないといい、坂西宏は知っているが、自分とは関係がないと突っぱねた。

「しかし、坂西さんが、昨夜、終電車の中で、殺されたことは、ご存じでしょうね」

と、十津川は、辛抱強くきいた。

「ああ、ニュースで知りましたよ」

田村は、血色の悪い顔を天井に向けるようにして、ぼそぼそと答えた。小太りで、眼の落ちくぼんだ顔は、どうにも親しめなかった。

「殺されたのは、午前一時十五分頃と思われるんですがね。その時刻に、何をしていたかおっしゃって頂けませんか？」

「寝ていましたねえ」

「それを証明できる人間は」

宮本刑事が、怒ったような声できいた。

田村は、不精ひげの生えた顎に手をやりながら、

「いませんよ。ひとりで寝てたんだから」

「家族は？」

「私が休職処分を受けたもんだから、家内は、子供と一緒に福島の実家に帰ってしまいましてね。今は、私ひとりですよ」

「本当に、坂西さんのことは、よく知らないといわれるんですか」

「そうですよ。あの人は、会計課の人間じゃありませんでしたからね」

「しかし、同じ管理部でしょう？」

「そりゃあ、そうですがねえ。わたしは、自分の課以外の人間には、興味がないから」

「N電鉄に乗ったことは？」

宮本刑事がきく。

十津川は、室内を見廻した。この応接間もなんとなく安っぽい。調度品も安ものである。不正といっても、金額は大したものではなく、多分、いじましく、十年にわたって、少しずつ、誤魔化していたのかもしれない。

訪問を終って、十津川たちは、外へ出た。

「ありゃあ、八割方クロだな」
と、宮本刑事は、舌打ちをして、
「だが、ああいうあいまいなアリバイほど、崩しにくい」
「問題は、目撃者だろう。昨夜、あの終電車に乗っていた人間が、田村も、同じ電車に乗っていたと証言してくれれば、彼を逮捕できる」
と、十津川はいったが、目撃者捜しが、決して、楽な仕事でないことは、彼にもわかっていた。
第一に、車掌が死体を発見したとき、終電車の客は、全部、降りてしまっていたことである。
第二は、終点のK駅から一つ手前のS駅まで、七百メートルの距離しかなく、電車でわずか四、五分だということだった。犯人は、K駅でおりたのかもしれないし、一つ手前のS駅でおりたのかもしれないのである。
二人は、終電車の常連を捜すことから始めた。
幸い、K駅の改札係が、よく終電車に乗って帰る二人の男女を覚えていてくれた。
「一人は、新宿でホステスをやっている女の人ですよ。二十七、八かな」
と二十代の駅員は、ニヤニヤ笑いながら、十津川と宮本刑事に話した。
「彼女が酔っ払って、改札口のところで倒れてしまったことがありましてね。僕が介抱したん

です。次の日、僕に外国煙草をくれましたよ」

「名前を知ってるかね？」

「ええ。一度、店に遊びに来てくれっていわれたから友だちと行きましたよ。新宿の『ナイトゲーム』というバーです。そこで、ユキって名前で働いているんです。なかなか美人ですよ。でも、ちょっと気が強そうでね。僕は苦手だな」

「男の方は？」

「僕の高校の同級生ですよ。こいつも新宿のバーで働いてるんです。バーテンです。車を持っていて、車で通ってたんだけど、事故を起こして、免許証を取りあげられてからは、終電車の常連になったんです。名前は、伊東功一。ちょっとおっちょこちょいだけど、いい奴ですよ」

「この方の店の名前は？」

「『マッハⅠ』。経営者が、自動車気違いなんだそうですよ。でも、伊東が犯人だなんて、信じられないな」

「こっちだって、別に犯人とは思っていないよ。捜してるのは、目撃者の方なんだ」

二人の刑事は、その夜、新宿の盛り場で、二軒のバーを訪ねてみた。

最初に入った「マッハⅠ」というバーでは、駅員のいった伊東功一というバーテンとは会えなかった。二日前から、店員全部が、保養に伊豆の温泉に出かけていたからである。

バー「ナイトゲーム」の方では、ユキというホステスに会うことが出来た。眼の大きい、勝ち気な感じの女だった。話すとき、相手の眼をじっと見つめるくせがあるのは自己主張が強いのだろう。

「まず、名前から聞かせてくれないかね」

とカウンターに並んで腰を下し、十津川がいった。

「堀本美也子。何か飲んでいいかしら？」

「あまり高いものは困るよ。何しろ、安月給でね」

と、十津川は笑ってから、

「よく、N電鉄の終電車を利用するそうだね？」

「ええ。電車の方が、楽でいいわ。あたし、ベルモットね」

「昨日も、終電車を利用したのかね？」

「ええ。それで、今日の新聞を見て、びっくりしたの。あの終電車で、人が殺されたんですってね」

「六輌連結の先頭の車輌で、サラリーマンが殺されてね」

「あたし、先頭の車輌に乗ってたのよ」

「それは、ありがたいね。君が見たことを全部、話してくれないか」

「何を話したらいいの？」
「何でもいい、君は、新宿から乗ったわけだね？」
「ええ。いつも、途中から空いて来て、坐れるのよ。昨日も、そうだったわね」
「君の坐っていた場所は？」
「運転席に近い方だったわ」
「じゃあ、反対側だな。終点の駅に近づいた時、乗客の数はどのくらいだった？」
「そうね。あの車輛は、五、六人じゃなかったかな。あたしは、終点近くで眼ををさましたのよ。そして、何となく見廻したら、パラッパラッとしかいなかったから」
「君が眼をさましたのは、S駅を過ぎてからかね？」
「そうねえ。ああ、S駅は通過していたわね」
「じゃあ、被害者は、もう殺されていたかもしれないね」
「ほんと？　もう一杯頂いていい？」
「どうぞ。思い出して欲しいんだ。君は、眼をさまして、周囲を見廻した。そうだね？」
「ええ。でも、意識して見廻したわけじゃないわ。もう一杯、ベルモットね。何となく、まわりを見るってことがあるじゃないの。あれよ」
「大きく広げた新聞紙で、顔を蔽っていた被害者に気がつかなかったかね？」

「覚えていないわ。ああ、もうじき終点だなって気持しかなかったから、注意して、車内を見なかったもの」

証人としたら、どうも頼りない証人だった。

「この男を見なかったかね？」

と、宮本刑事が、田村晋太郎の顔写真を、美也子の眼の前に突きつけた。

美也子は、その写真をすかすように見てから、

「さえない中年男ねえ。この人が犯人なの？」

「というわけでもない。ただ、われわれとしても、昨日の終電車の中に、この男が乗っていたかどうか、それを知りたいんだ。どうかね？　覚えていないかね？」

「さあ。いたかもしれないけど、覚えてないなあ。もっと若くて、スマートな男だったら、覚えてたかもしれないけどね」

美也子は、うふふと笑った。

どうも、頼りない目撃者だった。

十津川と、宮本刑事は、何か思い出したことがあったら、電話してくれるように頼んで、その店を出た。

5

美也子は、終電車がK駅に着く頃、問題の車輛には、五、六人の乗客がいたといった。ということは、被害者と、美也子の他にも、まだ、乗客はいたということである。

事件は、終電車の殺人ということで、普通の殺人事件以上に、大きく新聞にのった。

十津川は、終電車の乗客が、新聞記事を見て、連絡して来て欲しいと思った。ひょっとして、犯人を目撃しているかもしれないからである。

だが、二日たち、三日たっても、捜査本部には、何の連絡もなかった。

「面倒に巻き込まれるのが嫌なのさ」

と宮本刑事は、肩をすくめて、十津川にいった。

「しかし、このままじゃあ、動きが取れないな」

十津川は、舌打ちをした。

もちろん、被害者坂西宏の周辺は、念入りに捜査された。

調べていけばいくほど、坂西という男は、平凡で、きまじめな社員という印象が強くなっていった。

同僚は、まじめ過ぎて、面白味のない男だったといった。

「煙草は吸いますが、酒はやらないし、麻雀も競馬もだめでしたからね。ただ仕事はよくやりましたよ。だから、上役には信用があったかもしれませんね」

と、同じ時期に係長になった同僚が、十津川に証言した。

その割りに、専門学校だけしか出ていないので、出世は遅れていた。その面でも、人の恨みを買うことはなかったようである。

家庭も、宮本刑事が想像したように、平穏だが、面白味に欠けていたようだった。惰性の夫婦といえるかもしれないが、結婚して十年以上もたてば、たいていがそんなものであろう。誰にきいても、夫婦の間に、殺すような事態は起きていなかったという。

細君の孝子には、夫の坂西を殺さなければならない理由は、見当らない。

こう見てくると、やはり、残るのは、会計課長の田村晋太郎だけなのだ。

田村のことも、入念に調べられた。

九年前に、株で損をしたことがある。会計課長の地位を利用して不正を働くようになったのは、それが原因だろうと考えられる。

近所での評判は、あまりよくない。無愛想で、人づき合いがよくないと、誰もがいった。細君が、実家に帰っているというのは、事実だった。彼が、休職扱いになってから、夫婦の間に、

いさかいが絶えなかったらしい。そんなことも、坂西に対する憎しみに拍車をかける原因になったかもしれない。

十津川と宮本刑事は、K駅とS駅の駅員にも、田村の写真を見せ、事件の日、彼が終電車から降りなかったかどうかと聞いてみた。

しかしどちらの駅の駅員も、田村のことを覚えていなかった。

だが、それだからといって、田村がシロとはいえないと、十津川は、思った。

人間の顔など、サングラスをかけるだけで、別人のように変ってしまうことがあるからである。両駅の改札係なり、他の駅員に記憶がないからといって、田村が、終電車に乗らなかったとは断定できない。特に、S駅は小さな駅で、駅員はたった二人である。その上、駅の両側は空地になっているから、ホームから線路に飛びおりて姿を消すことも容易だった。犯人は、改札口を通らず、そうやって、逃げたかもしれないのである。

捜査本部全体の意見も、犯人は、田村晋太郎の線で、かたまりつつあった。

だが、目撃者が出てくれない限り、田村を逮捕することはできない。

「あの堀本美也子という女が、田村を見ていてくれたらねえ」

と、十津川は、何度も、舌打ちをしたが、事件から五日目の午後、その美也子から、捜査本部に電話がかかって来た。

「すぐ来て頂戴！」
と、いきなり、彼女は甲高い声でいった。
「何があったんだね？」
十津川がきくと、電話口の彼女は、ひどく取り乱した様子で、
「とにかく、早く来て頂戴！」
を、くり返すばかりだった。
宮本刑事が、T物産に電話していたので、十津川は、一人で、K駅の近くにあるマンションの五〇六号室に、美也子を訪ねていった。
2DKの部屋は、さすがに、若い女の子のそれらしく、きちんと片づき、鮮やかな色彩にあふれていた。十津川の部屋とは、たいした違いである。
入口の下駄箱に、男の靴があったり、三面鏡の上に、男のヘアトニックのびんが並んでいたりするのは、彼女に特定の男がいる証拠のようにも見えた。美也子ぐらいの年齢なら、男がいる方が自然でもある。
美也子は、ひどく堅い表情で、十津川を窓際の部屋に通してから、
「これを見て」
と、一通の封書を手渡した。

白い封筒の表に「堀本美也子殿」とだけ書いてある。住所も書いてないし、切手も貼ってなかった。誰かが、自分で、マンションの入口のところにある郵便受けに入れたのだろう。
裏を返したが、差出人の名前はない。
中身は、便箋一枚だった。

電車の中で見たことは、誰にもいうな。
もし、警察にいったら、お前を殺す

これだけである。

6

「今日、十二時頃起きて、下へおりていったら、郵便受けに、それが入ってたのよ」
美也子は、蒼い顔でいった。
「差出人に心当りは？」
「そんなもの、あるもんですか！」

美也子は、怒ったような声を出した。
「明らかに、終電車の犯人が書いたものだね」
「でも、あたしは、犯人の顔を見ていないのよ。殺されるところだって、見てないわ」
「しかし、犯人は、見られたと思っているんだ」
「なぜ？　あの終電車には、あたしの他に、五、六人乗っていたのよ。それなのに、なぜ、あたしだけに、こんな脅迫状を？」
「他の乗客にも、名前を調べて、これと同じものを出しているかもしれないね。もう一つ、君の姿が目立ったのかもしれない。君は確か、K駅の近くになって眼をさまし、周囲を見廻したといったね」
「ええ」
「或いは、その時、犯人と眼が合ったのかもしれないね」
「でも、あたしは、何にも見えなかったのに」
「犯人は、そう受け取らなかったのさ。見られたと思った」
「でも、それなら、なぜ今頃になって、こんな脅迫状を？」
「その時は、君が、どこの誰かわからなかったんだろう。犯人は、必死になって、君の身元を調べた。そして、ここに住んでいるのを突き止めて、この手紙を投げ込んだ。そんなところだ

ろうと思うがね」

「どうすればいいの。殺されるなんて、真っ平ごめんだわ」

美也子は、部屋の中を、いらいらと歩き廻りながら、

「何だって、こんなことに――」

と文句をいった。

十津川は、窓の外を見下した。K駅が見える。真下の道路を、タクシーが走り過ぎて言った。

「誰かいるの？」

と、美也子が、怯えた声できいた。

「いや。誰もいない。だが、犯人は、僕の顔を知っていて、ここに入るのを見ていたのかもわからんな」

「いやだわ。警察に何か話したと思われて、殺されるなんて、真っ平よ。電車の中で、あたしは何も見なかったのに」

「犯人は、そんなことは、信じないかもしれないね」

「じゃあ、あたしは、どうすればいいの？」

「一番いいのは、犯人を思い出してくれることだが、とにかく、警察は、君を守ることにするよ」

十津川は、電話を借りて、捜査本部に連絡し、警官に来て貰うことにした。
若い警官が来ると、十津川は、廊下で見張っているようにいい、彼自身は、問題の脅迫状を、捜査本部に持ち帰った。
壁にぶつかっていた捜査本部にとって、脅迫状は、一つの刺激になった。
筆跡は、明らかに定規を使用したもので、犯人割り出しには役立ちそうもなかったが、犯人の方から動き出したということは、収穫だった。
「堀本美也子というのは、気の強そうな女かね？」
と、捜査主任が、十津川にきいた。
「気丈な性格だとはいえますね。この脅迫状を受け取って、さすがに蒼い顔をしていましたが、ふるえてはいませんでした」
「芝居っ気はどうかね？」
「さあ。なぜですか？」
「犯人は、彼女に見られたと思っている。犯行そのものか、顔をかは、わからないがね。多分、顔だけだろう。殺すところを見られたと思っているのなら、こんな脅迫状を出さずにいきなり、彼女の口を封じた筈だ」
「私もそう思います。ということは、犯人を限定できることでもあると思いますね。あの終電

車の常連なら、顔を見られても、弁明のしようがある。ところが、あの夜だけ、あの終電車に乗っていたとすれば、顔を見られたことが、即、致命傷になりかねませんからね」

「例えば、田村晋太郎か？」

「そうです」

「そこでだ。堀本美也子には、あくまで、犯人の顔を見たことにさせておく。それだけでなく、警察にしゃべりそうだと、犯人に思わせたらどうかね」

「不安になった犯人が、堀本美也子を殺しに動くということですか？」

「そうする以外に、犯人を逮捕する方法は、今のところ、見つからないような気がするんだよ」

と、主任はいった。

7

犯人の眼の前に、餌をぶら下げようというのである。

餌は、堀本美也子。下手をすれば、彼女は、本当に殺されてしまうかもしれない。

十津川と、宮本刑事は、三鷹に行き、田村の家を見張ることになった。

三鷹に着いたのは、陽が落ちてからである。田村の家には、もう、明りがついていた。
こうしている間に、捜査本部は、主任が記者会見し、目撃者が見つかったこと、目撃者は、犯人について証言してくれる筈だと、発表することになっていた。
テレビは、ニュースの時間に、それを流すだろう。田村は、それを見て、堀本美也子を消すために、動き出すに違いない。
暗がりの中で、十津川は、腕時計を見た。
「あと三十分で、主任の記者会見だな」
と、十津川がいったとき、田村の家を見つめていた宮本刑事が、ふいに、
「どうも変だぞ」
「何が？」
「田村は、今、一人の筈だろう。それなのに一階も二階も、電気がついているぞ」
「暗いのが嫌いな人間もいるよ」
「しかし、湯殿の明りも、さっきからつきっ放しだ」
「まさか――」
と、十津川も、急に不安になった。
二人は、ほとんど同時に、田村の家に向って、駈け出した。

玄関に立って、ベルを鳴らしたが、返事はない。

（逃げたのか？）

十津川は、玄関のドアを開けた。

明りが、こうこうとついているが、家の中に、人の気配はなかった。

二人は、土足で、家の中に飛び込んだ。居間にも、浴室にも、二階にも、田村晋太郎の姿はなかった。

同じ頃、駅前のマンションで、堀本美也子の部屋の警護に当っていた警官は、どっと押し寄せた新聞記者やカメラマンに、たちまち、もみくちゃにされ、はじき飛ばされてしまった。

記者やカメラマンたちは、強引に、美也子の部屋に入り込み、パチパチと、フラッシュを焚き、事件について、やつぎばやに質問を浴びせかけた。

どうしようもなくなった警官は、捜査本部に、連絡した。

驚いた捜査主任は、自ら、パトカーに乗って、マンションに駈けつけた。

彼が着いた時、取材を終った記者たちが、どやどやと、マンションから出てくるところだった。その一人が、主任を見て、

「目撃者をかくしておくなんて、民主的じゃないですねえ」

と、嫌味をいった。

「いったい、誰から彼女のことを聞いたんだ？」
「誰からでもいいでしょう。しかし、彼女は、本当に、犯人を見ているんですか？」
「彼女は、君たちに、何といったんだ？」
「それが、警察にしか話せないの一点張りでしてねえ。ただし、脅迫状のことは話してくれたから、ニュースにしますよ。まずいですか？」
「記事にしていいよ」
と、記者たちにいって、主任は、エレベーターで五階へ上った。
廊下にいた警官が、汗を拭きながら、
「いきなり押しかけられたんで、どうしようもありませんでした」
と、主任に報告した。
「堀本美也子は、無事だろうね？」
「それは、大丈夫です」
と、警官はいったが、主任は、それだけでは不安で、五〇六号室をノックしてみた。
和服姿の美也子が、いくらか上気した顔を出した。彼女は、主任を部屋に通してから、
「びっくりしたわ。あんなに写真を撮られたのも、生れて初めて」
「ちょっと手違いがあってね。君が無事なので安心した」

「あたしは、いつまで、ここに閉じ籠っていなきゃならないの？　一日でもお店を休むのは辛いのよ」

「今日、明日中に、犯人は捕まると思うから、もう少しの間、辛抱して貰いたいんだ」

「早く捕えてくれないと、あたしが困るわ。警察は、あたしがお店を休んでいる間のお給料は払ってくれないんでしょう？」

「そこまでは、ちょっとねえ」

主任が、苦笑して廊下に出ると、そこへ、十津川と宮本刑事が上がって来るのに、ぶつかった。

「田村は、姿を消しました。高飛びしたのかもしれませんが、ここへやって来て、堀本美也子を殺すつもりかもしれません」

十津川は、堅い表情で、主任に報告した。

「こっちへ来てくれれば、ありがたいがね」

と、主任はいった。

十津川と宮本刑事は、管理人室に入れて貰い、田村普太郎を待ち伏せすることにした。その他、五階の廊下に警官一人。マンションの周囲にも、三人の刑事が張り込むことになった。

あとは、田村が現れるのを待つだけである。

夜半を過ぎた。

が、田村の姿は現れない。

時折、足音がして、そのたびに、十津川たちは緊張したが、いずれも、このマンションの住人だった。

午前二時、三時となった。が、同じだった。眠気ざましに吸った煙草の吸殻が、灰皿に山を作った。

夜が明けた。

駅に近いので、電車の音が聞こえてくる。

「どうやら、無駄骨だったようだな」

と、宮本刑事は、空になったセブンスターの箱を、丸めながら呟いた。

「すると、田村は、高飛びしたということかな」

十津川は、眼をこすった。

徹夜の張込みが無駄だったときほど虚しいものはない。疲れがどっと出てくるのも、こんな時である。そして、眠い。煙草の吸い過ぎで、のどがいがらっぽい。

「まさか、彼女は死んでないだろうな」

ふと、宮本刑事がいった。もちろん、彼自身も、冗談でいったのだが、十津川は、場合が場

合だけに、
「よせよ。縁起でもない」
と、いってから、
「そんなに心配なら、彼女に、朝のあいさつをしてこようじゃないか」
と、笑った。
二人は、五階へ上がった。廊下を見張っていた警察が近寄って来て、
「異常ありません」
「わかってるさ」
と、十津川はいい、五〇六号室のベルを押してみた。
内で鳴っているのだが、いっこうにドアが開かない。
「まだ寝てるんだろう。ああいう職業の女は、朝が遅いからな」
宮本刑事がいった。
「それはそうだが、昨日は店を休んだんだから、もう眼をさましたと思うがねえ。七時に近いんだ」
十津川は、もう一度、ベルを鳴らしてみた。だが、同じだった。
「おかしいぞ」

と、十津川はいい、宮本刑事の顔色も変った。まだ寝ているにしても、これだけベルを鳴らされたら、うるさくて、眼をさましてしまうのが普通だからだ。

ドアには、錠がおりていた。

十津川は、管理人にマスター・キーを持って来て貰った。

「怒られませんか？　この人の起きるのは、いつも、昼過ぎだそうですよ」

管理人は、キーを差し込みながら、十津川たちを見た。

「構わんさ。怒ったら、われわれが謝るさ」

と、十津川がいった。

ドアが開いた。

十津川が、まっ先に飛び込んだ。

寝室の、花模様のじゅうたんの上に、堀本美也子が、ネグリジェ姿で死んでいた。

8

十津川たちは、呆然と立ちすくんだ。

「青酸死だな」

と、宮本刑事が、ボソッと呟いた。

十津川もすぐわかった。青酸死特有の淡いピンク色に、皮膚が染まっていたからである。

苦悶の表情が、くの字に曲った指先や、ひん曲った口元に凍りついている。ネグリジェの襟元がはだけ、のどから胸にかけて、小さな引っかき傷がついているのは、苦しさに、かきむしったからに違いない。

枕元には、ジョニ黒の瓶があった。そして、転がっているグラス。

気を取り直した十津川は、ハンカチを取り出して、グラスを包み、中身が半分ほどになっているジョニ黒の瓶にふたをした。その間に、宮本刑事が、本部に連絡した。

鑑識が駈けつけ、主任もやって来た。

どの顔も蒼ざめていた。

「見事にやられたな」

と、主任は、十津川たちに向っていった。

ジョニ黒の瓶からも、グラスからも、青酸反応が出た。

「私が、彼女の部屋を初めて訪ねたとき、あのジョニ黒の瓶は、寝室の棚の上にのっていました。犯人は、忍び込んで、あの中に、青酸カリを投入したんです。そうしておけば、彼女が飲んで死ぬと考えたんでしょう」

と、十津川は、主任にいった。
「犯人は、田村だと思うかね？」
「他に考えられません」
「しかし、田村がどうやって、部屋に入ることが出来たんだろう？」
「新聞記者たちのせいですよ。どっと、新聞記者やカメラマンが堀本美也子の部屋になだれ込んだ時がありましたね。田村は、あの中にまぎれて、部屋に入ったんじゃないでしょうか。ハンチングをかぶり、ジャンパーを着て、カメラをぶら下げていれば、カメラマンに見えますからね。それに、夜で暗いときでしたからね」
と、十津川はいった。
さっそく、警察詰めの各記者たちに集まって貰った。
堀本美也子が殺されたということで、記者たちも、ニュース・ソースは、などといわず、
「電話があったんですよ」
と、教えてくれた。
「男の声で、あの事件の目撃者が見つかった。住所はK駅前のマンションの五〇六号室、名前は堀本美也子というもんだから、あわてて飛んで行ったんですよ」
「私のところもだ」

と、他の新聞社の記者も肯いた。

「いくつ位の男の声でしか？」

主任がきいた。

「わかりませんね。若い声みたいでもあったし、相当な年齢の男のようにも思えたし――」

「ところで、みなさんが、彼女の部屋に押しかけた時ですが、この男が、あなた方の中にもぐり込んでいませんでしたか？」

主任が渡した田村晋太郎の写真が、新聞記者たちの間に、ぐるぐる回された。

「いなかったと思いますけどねえ。とにかく彼女の談話を取るのに夢中だったから」

というのが、記者たちの返事だった。

堀本美也子の部屋に集まった記者とカメラマンは、二十三名。それが、どッと押しかけたのだから、一人ぐらい第三者が入り込んでいても、取材に夢中で、誰も気付かなかったかもしれない。

記者たちと別れたあと、主任は、

「罠をかけたつもりで、われわれの方が、罠にかけられたのかもしれないな」

と、十津川たちを見た。

どんなに弁明しようと、警戒していながら、まんまと、犯人に大事な証人を殺されてしまっ

たことは間違いなかった。いや、事態はもっと悪いかもしれない。堀本美也子を目撃者に仕立てあげたために、死ななくてもいい彼女を、殺してしまったかもしれないのだ。

十津川も、新聞で叩かれるのを覚悟した。

こうなったからには、何が何でも、田村晋太郎を逮捕しなければ、警察の面子が立たない。

田村晋太郎が、全国に指名手配された。

田村の郷里である長野と、彼の細君の実家がある福島の県警には、特別に、主任が電話で調査を依頼した。

しかし、田村は、見つからなかった。

9

そして、指名手配されてから十日目の朝になって、田村晋太郎もまた、死体で発見されたのである。

場所は、深大寺近くの雑木林の中だった。

晩秋の肌寒い朝、近くに住む画家が、犬と散歩に出て、急に犬が吠えながら雑木林の中に駈け込み、その後について入って行ったところ、落葉に埋もれるように、初老の男が死んでいた

のである。

画家は、驚いて、近くの派出所に知らせた。

その死体が、指名手配中の田村晋太郎とわかったのは、背広のポケットに、身分証明書が入っていたからである。

知らせを受けて、十津川と宮本刑事が、現場に急行した。

深大寺まで、K駅から車で十二、三分の距離である。

まだ、この辺りには、武蔵野の面影が残っている。深大寺の裏の雑木林に入って行くと、派出所の警官が二人を迎えて、案内してくれた。

落葉が深い。田村晋太郎の死体は、その落葉の上に、迎向けに寝かされていた。

「発見された時は、あの太い樹に寄りかかるような恰好だったそうです」

と、警官は、くぬぎの木を指さした。

「肩にも、落葉がつもっていたそうですから、死後、かなり経過していますな」

外傷はない。

「青酸死らしいな」

と、宮本刑事が呟いた。

落葉の中から、ビールの空罐が見つかった。ビールで、青酸カリを呑んだのか。

死体は、すぐ大学病院へ運ばれ、ビールの空罐は、鑑識に回された。
解剖の結果は、十津川たちの予期した通りだった。
死因は、青酸カリによる中毒死。
死亡推定時間は、凡そ十日前。つまり、指名手配が行われた頃である。
ビールの空罐の方からも、青酸反応が出た。
捜査本部に生れたのは、まず、自殺説である。
田村晋太郎は、N電鉄の終電車内で、坂西宏を刺殺した。動機は怨恨である。
そして、同じ終電車に乗っていた堀本美也子に、顔を見られたと思い込み、新聞記者たちを動かしておいて、それに乗じて、彼女を毒殺した。
しかし、自分が全国に指名手配されたのを知り、観念して、美也子を殺した青酸カリを呑んで自殺した。
筋は通っていた。それに、自殺と考えれば、今度の事件は、犯人の死によって解決するのである。
だが、十津川は、捜査本部を支配しようとしている自殺説に、どうしてもなじめなかった。
田村は、確かに指名手配された。だが、彼が犯人だという証拠は、なかったのだ。逃げ廻ることはなかったのである。それなのに、なぜ、田村は、雑木林の中で自殺したのだろうか。

それとも、田村は、会社を懲戒免職になることへの絶望感から自殺したのだろうか。殺人と、その両方が重なって、自殺したとも考えられる。

「しかし、やはり、何か納得できませんね」

と、十津川は、主任に向っていった。

「というと、田村も殺されたと、君は考えるのかね？」

主任は、微笑して、十津川を見た。

「そうです」

「しかし、そうだとすると、いったい誰が、田村を殺したというのかね？」

「それがわからずに困っているのです」

十津川が、頭をかいていると、宮本刑事が、彼を助けるように、

「私も、田村の自殺説には反対ですね」

「君も、何となく、しっくりしないというのかね？」

「いや。私には、確固とした理由があります。私は、田村が堀本美也子を殺したと思っていないのです」

「ほう」

「田村が、彼女を毒殺したとは、どうしても思えません」

「新聞記者にまぎれ込むのは無理だということかね？」
　主任がきいた。
「いや、そうじゃありません。記者さんは呑気者だから、一人ぐらい第三者がもぐり込んでいても、気がつかないと思いますね」
「じゃあ、どこがおかしいのかね？」
「殺しの方法です」
「毒殺は、不自然かね？」
「毒殺そのものは、不自然じゃありません。しかし、あの場合は納得できないのです。田村は、青酸カリを持って、マンションに出かけたことになります。しかし、田村は、どうして、飲みかけの洋酒が、あの部屋にあり、そこへ青酸カリを入れておけば、彼女がそれを飲んで死ぬと知っていたんでしょうか？」
「田村にしたら、部屋に入れば、何か青酸カリを混入するようなものがあると、考えていたんじゃないかな。そうは思えないかね？」
「思えませんな」
　宮本刑事は、頑固にいった。
　ちょっと気まずい沈黙が生れてしまった。

捜査主任は、しばらく腕を組んで考えていたが、
「君たち二人は、どうしても、田村晋太郎の自殺説には、賛成できないというわけだね？」
「そうです」
と、十津川。
「じゃあ、こうしよう。君たち二人に、四十八時間の時間を与えるから、その間に、もう一度、今度の事件を調べてみたまえ。田村が自殺ではないというのなら、彼を殺した犯人がいる筈だ。それを見つけたまえ。もし、四十八時間以内に出来なければ、捜査本部としては、田村は自殺したと考えて、今度の殺人事件は、解決したものと考えるよ。事件が終ったのに、いつまでも、捜査本部を設けているわけにはいかないからね」

10

十津川と、宮本刑事は、並んで捜査本部を出た。
「正直にいって、僕は、田村晋太郎の自殺説に反対したものの、それなら、誰が殺したかということになると、全く自信がないんだ」
と、十津川は、並んで歩きながら、宮本刑事にいった。

「おれもさ」
と、宮本も、肯いた。
「しかし、主任にはなかなか強気なことをいってたじゃないか？」
「行きがかりということもあったからね」
と、宮本は、この男にしては、珍しく笑ってから、
「君だって、自信がないというが、何か考えているんだろう？」
「ああ。今度の事件を、全く違った角度から考え直してみようかと思っている」
「というと？」
「出発点が違っていたんじゃないかと思うのさ。一人のサラリーマンが、終電車の中で殺された。そして、容疑者として田村晋太郎という男が浮んだ。これを押し進めていけば、どうしても、田村の自殺で完結してしまう。だから、坂西宏を殺したのは、田村じゃないと考えてみようと思うのだ」
「しかし、坂西を殺す動機の持主は、田村以外、考えられない筈だよ」
「問題は、そこなんだ」
二人の刑事は、N電鉄の線路が見える場所へ来ていた。
六輛連結の緑色の車体が、二人の前を轟音をひびかせて、通過して行った。

「僕は、事件を、自分のものとして考えてみた。自分の殺したい相手が、終電車の常連だとする。しかし、僕だったら、絶対に、終電車の中なんかで殺さないね。終点の近くなら、乗客は少ないだろうが、それだって、殺すところを見られる危険があるからだ。それに、動機を調べていけば、結局、動機のある自分が疑われるのだ。それなら、終電車の中で殺す理由は全くない筈だし馬鹿げているんだよ」

「でも、今度の犯人は、終電車の中で、殺したんだぜ。なぜかな？」

また、電車が、通過して行った。

その間に、十津川は、煙草を取り出して火をつけた。

「犯人は、終電車の中で殺すことに、利益があると考えたんだ。見つかるかもしれない危険を犯してでも」

「しかし、どんな利益が考えられる？」

「今、それを考えているんだ。まともに考えたら、何の利益もない。だから、どんな場合に利益があるだろうかと考えているんだが」

「たった一つだけ、考えられる場合があるよ」

宮本刑事は、鈍く光るレールを見ながらいった。

「どんな場合だい？」

「おかしないい方だが、動機のない奴が犯人の場合だ」
「動機がなければ、殺す必要もないことになってしまうだろう」
と、いってから、十津川の頭に、急に閃いたことがあった。
（何の恨みもない人間を、殺す場合が、一つあるのだ）
「わかったよ」
と、十津川は、宮本刑事に向って、ニヤッと笑って見せた。
「何が？」
「何もかもさ」
「説明してくれないか」
「時間は、十分にあるんだ。お茶でも飲みながら、説明するよ」

11

二人の刑事は、K駅に近い喫茶店に入った。
十津川は、コーヒーを二つ頼んでから、
「われわれは、動機を追って行った。真犯人は、その壁の中にかくれてしまっていたんだよ」

「君は、まさか、動機なき殺人なんてことをいうんじゃあるまいな」
「そんなことはいわんさ。犯人は、終電車に乗っていた坂西宏を刺殺した。だが、犯人は、坂西を憎んでいたわけじゃない。もっといえば、坂西でなくてもよかったんだ。あの車輛に乗っている人間ならばだ」
「ちょっと待てよ。おれにも、だんだんわかって来たぞ」
と、宮本刑事は、唇をなめてから、
「犯人が、本当に殺したかったのは、別の人間だったんだな。だが、その人間を殺したのでは、すぐ、自分に疑いがかかる。それで、自分に全く関係のない人間を殺したんだ」
「その通りだよ。だが、まず無関係の人間を殺し、次に殺したい人間を殺しただけでは、同じことになってしまう。そこで、狡猾な犯人は、上手に方法を考えたのさ。自分が殺したい人間が、N電鉄の終電車の常連だった」
「それが堀本美也子か」
「その通り。彼女をストレートに殺せば、自分が疑われる。だから、まず、全く関係のない坂西宏を殺す。彼女と一緒に終電車に乗っている乗客なら、誰でもよかったのだ。人間は、どんな奴でも、一人ぐらいは敵がいるものだ。警察は、まず、殺す動機の持主を捜す。今度も同じだった。田村晋太郎という恰好の男が見つかった。犯人の思う壺だったわけだよ。犯人は、次

に、本当に殺したい堀本美也子を狙ったが、ただ殺したんでは、自分に疑いがかかる。それで、上手い手を考えた。彼女を目撃者として殺すことだよ。終電車の中で、犯人を目撃したから殺されたということにすれば、自然に、田村が犯人にされる」

「すると、われわれは、知らず知らずのうちに、犯人に手を貸していたわけだな。彼女を目撃者に仕立てあげてしまったんだから」

宮本刑事の顔に、自嘲が浮んだ。

「残念だが、そうなるね」

と、十津川は、苦笑してから、

「真犯人は、堀本美也子の知り合いだ。そう考えれば、君が、毒殺について持った疑問も氷解する筈だ。真犯人は、記者団の中に、もぐり込む必要はなかったのさ。多分、いつでも、犯人は、彼女の部屋に入れたろうし、そんな関係なら、ウイスキーのことも知っていた筈だし、彼女が、寝る時に、そのウイスキーを飲む習慣のあることも知っていたんだと思うね」

「新聞記者に通報して、彼女の部屋に行かせたのは、われわれに、田村犯人説をより一層、強く信じさせるためだったわけだな」

「そうだ。田村が彼女の部屋に入れる状況を作っておかないと、われわれが、田村犯人説に疑問を持つからね。われわれは、まんまと、犯人の作った罠にはまっていたわけだよ」

「彼女が毒殺された頃には、犯人は、田村を誘い出して、どこかへ監禁していたわけだな」
「多分、そうだろうね。なかなか美味いコーヒーじゃないか」
二人は、コーヒーを飲み終ると、その店を出た。
行く先は、堀本美也子が住んでいたマンションである。
管理人にあけて貰って、中に入った。玄関の男物の靴、三面鏡の上のヘアトニック。
「犯人のものだよ」
と、十津川は、手に取った。
「どんな男かわからないが、靴の大きさは二五。そして、フランスのヘアトニックを愛用している奴だ」
十津川たちは、男の影を捜して、部屋中を調べはじめた。三面鏡の引出し、洋服ダンスの引出し、そして、押入れと、物が入っていそうな場所は、全部あけてみた。だが、なかなか、男の写真や、手紙は出て来ない。
「用心深い男のようだな」
と、宮本刑事が、机の引出しを引っかき回しながらいった。十津川は、そんな宮本に、
「恐らく、家族持ちだろうね。だから用心深いんだ」
「おい。あったぞ」

と、急に、宮本刑事が叫んだ。

机の引出しに入っていた料理の本。その本の中ほどに、写真が一枚、はさんであった。堀本美也子が、中年の男と並んで写っている写真だった。妙なことに、斜めに引きちぎられたのを、裏からセロテープで貼りつけてある。

「男と喧嘩して引きちぎってしまったが、やはり未練があって貼り合わせたということかね」

と、宮本刑事。

「それとも、男が、捨てろといったが、女の方が、かくしておいたということかもしれないよ」

十津川は、いった。どちらにしろ、堀本美也子と、この男の仲は、微妙なものだったに違いない。

男の年齢は四十歳くらいだろう。やや太り気味の、恰幅のいい男である。写真で見る限り、ダブルの背広がよく似合っている。

「この男も、背広の襟にバッジをつけているぜ」

と、宮本刑事が、写真を睨むように見てから、大声をあげた。

写真は、捜査本部に持ち帰られ、襟のバッジが調べられた。拡大された写真から、そのバッジが、日本で五指に入る大銀行のものだとわかった。

あとは、簡単だった。

男は、その銀行の新宿支店で、副支店長の柳沼明、四十歳だった。もちろん、妻もあれば子供もある。

十津川と、宮本刑事は、この柳沼明に、罠をかけることにした。

一通の匿名の手紙が、柳沼に出された。

おれは、新宿のバーで働いている。

家がN駅の近くにあって、いつも、N電鉄の終電車で帰ることにしているんだが、十月七日の夜、おれは、あの終電車の中で、乗客の一人が殺されるのを見ちまった。

警察は、田村という男を犯人と断定した。

だが、おれは、騙されない。おれは、あんたが、ナイフで刺すところを見たんだ。今まで、おれが警察に黙っていたのは、あんたが誰かわからなかったし、警察に知らせても、一銭にもならないからだ。

だが、昨日、K銀行新宿支店に行ったら、あんたがいた。副支店長とは驚いたね。これなら、五百万くらい軽いもんだろう。

もう一つ。おれは、あんたが、堀本美也子という女と、田村という男を毒殺したことも知っ

ている。

おれを黙らせたかったら、二十七日の午後十時に、K駅近くの八幡神社境内に、五百万持って来い。

正攻法とはいえなかったが、十津川たちは、今度の事件で、まんまと、柳沼のトリックに引っかかり、堀本美也子と、田村を死なせてしまったことに腹を立てていたのである。柳沼を、罠にかけてやらなければ、気がすまなかった。

二十七日の夜十時。

暗い八幡神社の境内に、十津川と宮本刑事は、息をひそめて張り込んだ。

もう、夜の空気は、肌寒かった。

指定した時間より、五、六分おくれて、石段を上がってくる足音が聞こえてきた。

月が雲の間から顔を出し、コートを着た男の姿が、浮彫りになった。

柳沼明だった。

まず、十津川が、彼の前に出て行った。

「柳沼さんだね？」

と、十津川が声をかけると、柳沼は、黙って、十津川の顔を見、それから、周囲を見廻した。

「君も一人か？」
柳沼が、低い声できいた。
「ああ。一人だ。五百万は、持って来てくれたんだろうな」
「ここに入っている」
柳沼は、手に持っていた黒い鞄を地面に置いた。
十津川が、屈み込んで、鞄を開ける。その時を狙っていたように、柳沼は、ポケットからスパナを取り出して、ふりかぶった。
それが、十津川の頭部に向ってふりおろされる直前、宮本刑事の大きな声が飛んだ。
「四人目は、スパナで殺す気か！」
立ちすくむ柳沼を、十津川が下から見上げて、ニヤッと笑った。
「これで終ったな」

一九七五年十一月「小説サンデー毎日」

謎の組写真

1

いくつかあるカメラ雑誌の中で、歴史の古い「カメラ・ジャパン」では、年一回、「カメラ・ジャパン賞」の作品を募集している。

賞金三十万円は、このインフレ時代には僅か過ぎるともいわれているが、それにも拘らずこの賞が注目され、毎年厖大な数の応募作品があるのは、プロカメラマンの登竜門とみられているからである。

特に、社会派カメラマンとして、現在第一線で活躍している中堅の大部分は、この「カメラ・ジャパン賞」の受賞者だった。ベトナム戦争に従軍し、生々しい報道写真を撮り続け、ピュリッツァ賞を得たKも、公害を追い続けているSも、受賞者の一人である。

今年の第三十回の募集には、カラー、白黒合せて、約二千点の作品が寄せられた。

例年以上に力作が多いのは、それだけ、大衆の中に、写真というものが定着した証拠だろう。

そんな中で、選者である三人の大家が、白黒写真の部で一致して押したのは、「白鬚橋・二十四時間」と題された五枚の組写真である。

隅田川にかかる白鬚橋の朝から夜までを、さめた眼で撮ったもので、よくある題材ながら、

橋を渡って行く人々の姿をとらえる手腕は、並々ではなかった。

作者の名前は、南原昌久（なんばらまさひさ）。二十九歳。

「この人は確か、過疎（かそ）で人のいなくなった島に一カ月近く腰をすえて、写真を撮った人じゃなかったかな」

と、選者の一人が、思い出しながらいった。

「廃墟の中で、飢えた野良犬が歩き廻っているあの写真も良かったが、今度のこの写真の方が、奥行きがあるな」

「写っている人物が、単なる橋の附属品になっていなくて、大げさにいえば、人生の重味を感じさせるねえ」

と、他の選者もいった。

「とにかく、久しぶりの大物新人だね。これからが楽しみだよ」

「カメラ・ジャパン」の編集長をしている田口にとっても、嬉しい新人の登場だった。去年、一昨年と、二年続けて「カメラ・ジャパン賞」が出ていなかったからである。

「どんな人物か、会うのが楽しみですね」

と、田口は、眼鏡を押しあげながら微笑した。

2

南原昌久は、まだ独身である。

動き廻ることの好きな南原は、まだ、家庭を持つ気になれずにいた。金もない。少しでも金が入れば、新しいカメラを買ってしまうか、その金で取材に出かけてしまう。

中古のカローラを改造し、屋根（ルーフ）が開くようになった車に寝袋を積み込んで、彼は、どこへでも出かけて行く。

「カメラ・ジャパン」から、受賞通知の電報が届いた時も、南原は、北海道から帰ったばかりだった。

受賞したのは嬉しかった。が、賞金の三十万円は、すぐ消えてしまうことだろう。南太平洋のコバルトブルーの海に魅せられていたから、三十万円がその旅費になってしまうのは、眼に見えている。

翌日、南原は、愛車に乗って、東京駅に近い「カメラ・ジャパン」社へ出かけた。どこへ行くにも、ジーパンにセーターというラフなスタイルである。別に気取っているわけではなく、一番楽な、金のかからない服装だからにすぎない。それに、背広は一着も持っていない。

「カメラ・ジャパン」では、すぐ応接室に通され、女の子が、コーヒーを持って来てくれたが、肝心の編集長は、なかなか現われなかった。

早く来すぎたのかなと思い、昨日の電報を読み返してみたが、そこには、「明日午後二時来社されたし」と書いてあり、今は、午後二時である。

三十分近く待たされてから、編集長の田口が、やっと、顔を出した。

「どうも、お待たせして。実は、ちょっとしたゴタゴタが起きましてね」

田口は、当惑した表情をかくさずに、南原にいった。

「それは、僕に関係があることですか？」

と、南原はきいた。

「そうです」

「すると、僕の受賞が取り消されたというようなことですか？」

「違います。実は、昨夜、この建物に泥棒が入りましてね」

「泥棒ですか――？」

それが、自分とどんな関係があるのだろうかと、首をかしげながら、南原がきくと、田口は、パイプを取り出して火をつけてから、

「妙なことに、その泥棒は、高価なカメラには眼もくれず、あなたの作品だけを盗んでいった

のですよ」
「僕の？　本当ですか？」
「本当です。応募された作品は、それぞれ、題名と作者名を書いて封筒に入れ、キャビネットにしまっておいたのですが、その中からあなたのものだけが失くなっているのです」
「僕の作品を何のために盗んでいったのでしょうか？」
「われわれにもわかりません。しいて考えれば、あなたの当選作品だけは、別にしてありましたから、貴重品が入っていると、泥棒が考えたのかもしれません。それで弱ってしまいましてね。警察には連絡しましたが、ネガも提出して頂いてありますので、もし、出て来ないとなると、困ったことになるなと思っているのです。白鬚橋は、あの五枚以外にも、撮られたわけでしょう？」
「もちろん、何枚も撮りましたが、同じものはありません」
「でしょうね。問題は、どうしてもあの作品が見つからなかった場合なのです。作品がなくても、あなたの才能は、選者の先生方が太鼓判を押されていますから、いささかも疑いは持ちませんが、雑誌に発表する時に困るのです。あれと同じものはないでしょうが、あなたが気に入ったものを出して頂いて、それを雑誌にのせたいと考えているのですが」
「突然、そういわれても――」

「もう一度、新しく白鬚橋を撮って下さっても結構です。全て、こちらのミスですから、そちらのよいようにして頂いて結構です」

田口の言葉に、南原は、すぐには返事ができなかった。応募した五枚のネガと写真が盗まれたという話が、あまりにも唐突だったこともあるが、良心的に考えて、代りのフィルムをすぐには提出できないこともあったからである。

南原は、去年の九月下旬に、白鬚橋を一週間にわたって撮り続けた。撮ったフィルムは、百本近い。しかし、その一週間の中、彼の気に入る光や影や人物があった日は、九月二十七日のたった一日でしかなかった。その日に撮った二百枚のフィルムの中から、まず五十枚を選び、それをどんどんしぼっていって五枚にしたのである。安易に、他の何枚かで間に合わせるわけにはいかなかった。

「できれば、もう一度、撮り直したいと思います」

と、南原はいった。

彼は、自分のアパートに戻ると、さっそく、二度目の白鬚橋撮影にとりかかった。

アパートのある世田谷から、白鬚橋の荒川区南千住まではかなりの距離がある。毎日往復していたのでは、大事なシャッターチャンスを逸してしまう。南原は、愛車に泊り込むことにして、車に寝袋を積んで出かけた。

白鬚橋は、ドヤ街で有名な山谷から、東京ガスのガスタンクに沿って明治通りを一キロほど歩いたところにかかっている。橋を渡ると、墨田区向島である。

南原が、白鬚橋に興味を持ったのは、そこに人生を感じたからである。もともと橋は好きだった。都会の名物になってしまった歩道橋は、ただ醜悪なだけだが、川にかかる橋には美しさがある。

特に白鬚橋の場合、橋のこちら側と向う側とでは、そこに住む人々の生き方が違って見えるところが面白い。白鬚橋のこちら側、南千住は労働者の町である。それに反して、川の向う側、向島は典型的な三業地。その対比が、橋の上を往来する人々の表情や服装に現われている。

南原は、白鬚橋に着くと、橋のたもとに腰を落ちつけ、カメラを構えた。五、六分前から、梅雨時特有の小雨が降り出し、橋全体が、雨の中に煙ったようになっていた。悪い景色ではない。番傘をさした女が通っていくのは、いかにも下町らしい。だが、なかなか気に入るような写真は撮れなかった。

その夜は、車の中で眠った。

翌日は、昨日の雨が嘘のようによく晴れたが、昼近くなって、田口が車でやってきた。

南原は、写真のさいそくかなと思って、

「まだ、気に入った写真が撮れていませんが――」
というと、田口は、微笑して、
「もう、撮り直しをして下さらなくて結構です。あの写真が見つかったんですよ」

3

「というと、泥棒が入ったというのは間違いだったんですか？」
「いや。泥棒に盗られたのは事実ですが、今朝、社の近くで、封筒に入ったまま、見つかったんですよ。ポリバケツの中に捨てられていました。写真もネガも無事です。恐らく泥棒は、何か高価なものが入っていると思って盗ったものの、調べてみたら橋の写真とネガしか入っていないので捨てたんでしょうな。優秀な写真も、泥棒には、豚に真珠だったわけですよ」
田口は、面白そうに笑った。
「私も、これで、ほっとしました」
「それで、僕の作品は？」
「すぐ印刷に廻しました。ご心配なく、五枚の写真、ネガとも、ちゃんとありましたから」
南原も、よかったと思った。たった五枚の写真でも、自信のある作品というのは、簡単には

撮れないからだ。

南原は、白鬚橋の撮影をやめると、その日の中に、行きたいと思っていた沖縄へ出発した。こんな行動力も、彼の若さである。

沖縄といっても、彼が関心を持っているのは、観光と開発の波に洗われる沖縄本島ではなく、もっとも開発が遅れているといわれている西表島（いりおもて）だった。原生林とイリオモテヤマネコで有名なこの島に、南原は半月近くとどまって、撮りまくった。

六月末、彼が、まっ黒に陽焼けして帰京したとき、「カメラ・ジャパン」の八月号は、もう本屋の店頭に並んでいた。

羽田空港内の売店で買い求め、南原は、バスの中で広げた。

第三十回「カメラ・ジャパン賞」発表と題された頁には、

〈大型新人の登場〉

という大きな活字が躍っていた。

南原は、照れながら、印刷された自分の作品を見た。

さすがに、歴史のあるカメラ雑誌だけに、いい印刷である。作者にすれば有難い。雑誌によっては、折角のいい写真を、絵ハガキのようにつまらなくしてしまうことがある。

見開きの二頁にわたって、五枚の写真が並び、南原が予期したとおりの効果を出していた。

思わず微笑したが、二、三度、見直しているうちに、
「おや？」
と、南原は呟いた。
どこかおかしい。
最初、五枚の写真のどこがおかしいのかわからなかった。全て、見覚えのある自分の写真と思ったのだが、よく見ると、一枚だけ違うのだ。
南原は、すぐ、「カメラ・ジャパン」社に、田口を訪ねた。
田口は、南原が、「カメラ・ジャパン」の八月号を手にしているのを見て、
「ごらんになって頂けましたか」
と、微笑して、
「組写真の並べ方は、あれでよかったですか？」
「ええ。ただ、あの五枚の中に、一枚だけ僕が写したんじゃないものが入っているんですよ」
「そんな馬鹿な」
田口は、手元にあった八月号をパラパラとめくって、
「この五枚のどれが違うというんです？」
「四枚目です」

と、南原は、その写真を指さした。

「午後四時」という副題のつけられた写真は、西陽の当る白鬚橋の景色である。橋のたもとには、夫婦者のたこ焼屋が屋台をひらく支度をしている。数人の男女が橋を渡ろうとしている。朝や夜の同じ橋の上の通行人と人種が違う面白さを狙って撮ったものだった。

「これはあなたのですよ。私も審査の時に立ち会って、何度も見ているから間違いありません」

と、田口がいった。南原は首をふって、

「確かに、僕のものによく似ています。僕も最初は気がつかなかったくらいです。しかし、よく見ると違うんですよ。僕のものにも、この屋台のたこ焼屋が写っていたし、橋の上の人物の配置もよく似ています。だが、タッチが違う。僕のタッチじゃない」

「ち、ちょっと待って下さいよ」

田口はあわてて、キャビネットから封筒を取り出して来た。

社名入りの封筒で、中には、南原が応募した五枚の写真と、ネガが入っている。ネガは一枚ずつ切り離してネガカバーにおさめてある。それを、田口は机の上に並べてから、

「全部、あなたのものだと思ったのですがねえ」

「一枚だけ違うのです」

南原は、その中の一枚をつまみあげた。

彼の眼から見ても、なかなかいい作品だ。構図もいいし、シャッターチャンスもいい。だが、彼の作品ではない。彼の撮った写真によく似せてあるが、違うのだ。

「これは、僕が撮ったものじゃありません。ネガも」

「しかしわからんなア」

と、田口は、当惑した顔で、その写真を見て、

「これが、あなたのでないとすると、一体、どうなったんですかねえ。誰が、こんな悪戯をしたんです？」

「僕にもわかりませんね」

「もう一度、確認しますが、本当に、この一枚は、あなたが応募したものとは違っているんですね？」

「ええ。違います」

「すると、誰かがすり変えたということになるんだが」

「僕も、そう思いますね。僕の他に、白鬚橋を撮って応募した人がいたとしたら、その人のものと一枚だけ間違って封筒に入れてしまったということも考えられるんじゃありませんか？」

「いや、白ひげ橋の写真は、あなた一人でしたよ」

「とすると、僕の作品を盗んだ泥棒が、一枚だけすり変えて、封筒に戻しておいたことになりますね」

「そうですね」と、田口は肯いたが、まだ、しきりに首をかしげていた。

「考えられるのは、それだけですが、泥棒は、何のために、そんな面倒くさいことをしたのかな。あなたの当選を嫉んで盗み出したのなら、焼き捨てるのが自然でしょう。それなのに、五枚の中、一枚だけをすり変えて返した理由がわからない。この封筒は、社の前に置いたポリバケツの中に入っていたんですが、当然、探す場所ですから、返してよこしたと考えてもいいと思うんですよ。それに、あなたにもおわかりと思いますが、このすり変えた写真も、悪い出来じゃありませんよ」

「ええ。いい写真です。僕とはタッチが違いますが、技術だけからいえば、僕より秀れているかもしれません」

「そうでしょう。だから、私も、すり変えられてるとは気がつかず、印刷に回してしまったんです。とにかく、気付かなかったのは、編集長の私の責任です。申しわけありません」

と、田口は頭を下げてから、

「ところで、今後のことなんですが、雑誌は出てしまって、もう回収するわけにはいかないのですよ。それに、審査をやって頂いた三人の先生のこともありましてね。今更、当選作とは違

った写真を発表してしまったともいえないし、困りました。来月号になら、訂正記事を出せますが」

当惑した顔で口ごもる田口に、南原は、笑って、

「そんなことは構いませんよ。僕は、ただ、妙だなと思ったんで、あなたにお話しただけです。もちろん、自分が撮ったものでない写真が、自分のものとして発表されているのは嫌なものですが、五枚の中の一枚だし、お話を聞けば、不可抗力みたいなものですから、抗議する気もないし、訂正記事をのせて頂かなくて、結構ですよ」

「それを聞いて、ほっとしました」

田口は、やっと、口元に微笑を浮べたが、

「しかし、誰が何のために、こんな面倒くさいことをやったんですかねえ」

「僕も、そのことの方に興味がありますね」

と、南原は、もう一度、問題のネガを見た。

彼の記憶にあるものと、構図もそっくりだし、ご丁寧なことに、使用しているフィルムまで、同じN社のものである。犯人は、なぜこんなにまでして、一枚の写真をすり変える必要があったのだろうか。

4

疑惑は残った。が、南原は、過去に拘わることの嫌いな性格である。

「カメラ・ジャパン」賞として貰った三十万円は、貰った翌日、親しい仲間十二、三人を呼んでドンチャン騒ぎをし、一日で使ってしまった。

そうした使い方をすることで、妙な事件は忘れてしまうことにしたい気持があったからである。

集ったのは、彼と同じように若い写真家と、モデルの女性たちだった。どちらも、無名な若者たちばかりだが、それだけに、元気があったし、怖いものなしでもあった。

「あれは、南ちゃんのものの中でも、出来のいい作品だな」

と、仲間は、「白鬚橋・二十四時間」をほめてくれた。もちろん、口の悪い連中のことだから、少女趣味だとか、情趣過多といったいつもの批判も出たが、悪意のあるものではない。また、あの五枚の中の一枚が、南原のものではなかったのに気付いた者もいなかった。

夜半過ぎまで、仲間の一人が借りているマンションで気勢をあげ、解散したのは、午前二時だった。

南原は、モデルの一人の江口朱子を、彼女のアパートまで送って行った。朱子は二十三歳。写真のモデルをやって二年になる。目立つ子ではないが、誰にも好かれる人のいいところがある。南原は、少しずつ、彼女に魅かれていくのを感じていた。ばくぜんと、彼女との結婚生活を考えたこともある。多分、彼女となら、上手くいくだろう。少なくとも、自分の重荷にはならない女性だと思うし、結婚生活には、それが一番大事なことだろうとも考えている。

「南ちゃんは、これから偉くなるわね」

と、未明の道を歩きながら朱子がいった。

「さあどうかな。なれればいいけどね」

南原が素直に応じたのは、相手が朱子だったからである。他の人間だったら、偉い、という言葉に拘わったろうと思う。

「きっと、偉くなる。カメラ・ジャパン賞を貰ったんだもの。きっと、いろんなところから、仕事の注文が舞い込むわ」

「その時には、できれば一緒にやりたいね」

南原は、笑顔でいい、取り合っていた手に力をこめた。そっと抱き寄せて、キスした。まだ、しばらくは結婚できないだろうが、結婚の相手としては、彼女以外の女を考えたことはない。

翌日、南原が、二日酔いが残って、ふとんの中でごろごろしているところへ、電話が掛った。

ふとんの上に寝たまま、受話器に腕を伸ばした。
「南原先生ですか？」
と、中年の男の声がした。
「先生なんて代物じゃありませんが、南原です」
南原は、苦笑しながら答えた。
「先生はご存じないかと思いますが、私は、東京クラブという会社のものです。実は、うちで、今度、月刊雑誌を出すことになったのです。グラビア頁の多い、若者向きの綜合雑誌が目標でして、まあ、それで、創刊号は先生の写真で、グラビアを飾りたいのです。お忙しいと思いますが、協力して頂けませんか」
「どんな写真が欲しいわけですか？」
「先生は、何かの雑誌に、南太平洋の海と島を撮りたいと書いておられましたね」
「ええ。書いたことがありますよ。何人ものカメラマンが撮っていますが、まだ、完全には、あの素晴らしい自然は撮り切れていないと思っているんですよ」
「私も、そう思いますねえ」と、相手の男は、電話の向うで、大きく肯いた。
「それでご相談ですが、先生に、南太平洋の海と島を撮りまくって頂きたいのですよ。若者たちの憧れは、今や、パリやロンドンよりも、自然の豊かな南太平洋に向けられていますからね。

私どもとしても、その写真で、グラビアを飾りたいわけです」
「そうですねえ」
南原は、受話器を持ったまま考えた。悪くない仕事だと思う。頼まれ仕事でなくても、南太平洋には行きたいと思っていたからである。
「僕は、わがままな人間ですよ」と、南原はいった。
「いろいろと条件をつけられると困るんですが」
「立派な芸術家に対して、そんな失礼なことはしませんよ。私どもとしては、いい写真が頂ければそれでいいんです。条件は一切つけません」
「それなら有難いですね」
「では、うちの林君に会って、くわしい打合せをして下さい」
相手は、もう南原が引き受けたものだというように、勝手に話をすすめてくる。南原は、苦笑しながらも、とにかく会ってみることにして、近くの喫茶店を指定した。

5

来たのは、パンタロン姿の若い女だった。白ずくめの服装が、理智的な顔によく似合ってい

た。南原は、朱子とは違った魅力をその女に感じた。
「東京クラブ社の林可奈子です」
彼女は、ハンドバッグから、名刺を取り出して南原にくれた。
〈ルック・東京〉編集部　林可奈子
と、印刷してあった。
「まだ決定していませんけど、雑誌の名前はそうなる予定になっているんです。それで、仕事のことですけど、私どもとしては、すぐにでも、かかって頂きたいんです。出来まして？」
「いいでしょう。しかし、飛行機やホテルの手配をしなければなりませんからね」
「それは、私が全部やります。パスポートはお持ちなんでしょう？」
「前にとりましたよ。いつでも海外へ出られるようにね」
「それなら問題はありませんわ。切符その他の手配は、二、三日中にすませますから、来週から仕事にかかって下さい」
林可奈子は、テキパキといい、南原があっけにとられていると、今度は、南太平洋の地図をテーブルの上に広げた。
「南太平洋の取材となると、私は、タヒチを根拠地にして、足を伸ばすのが一番いいと思うんですけど」

「かもしれませんね。ただし、何を撮るかは僕に委せて下さいよ」
「もちろんですわ。時間をかけて、いい写真を撮って頂きたいんです。取材の費用は全部、うちの社で持ち、写真が出来た段階で別に百万円お支払いするという条件でどうでしょうか？」
悪くない条件である。「いいでしょう」と、南原が承知すると、林可奈子は、ニッコリ笑ってから、
「決ったら、先生にお願いがあるんですけど」
「何です？」
「これから一緒にデパートへ行って、私の水着を選んで頂きたいんです」
「なぜ、君の？」
「今度の取材旅行には、私がお供することになっていますもの」
可奈子は、クスリと笑った。

6

七月二日。
南原は、羽田空港の国際線ロビーで、林可奈子と待合せて、タヒチ行のエア・フランス機に

乗った。

東京からタヒチまでの直通便である。

ジェット機で、約十二時間でタヒチの首都、パピエテに着く。ハワイからなら五時間である。

佐渡ケ島の約二倍の大きさのこのタヒチ島に、ゴーギャンが憧れた野生を求めて来る人が、今も絶えないが、実際に着いてみると、タヒチは、ポリネシア諸島の中で、ハワイについで文明の光の強い島だということがわかる。パピエテにはビルが建ち、港には豪華なヨットが並んでいる。ゴーギャンの絵にあるような、裸の娘もいない。道路には、日本製のオートバイやバイクが、騒音を立てて走り廻っている。

しかし、南原は別に落胆はしなかった。洋風化したタヒチは、それなりに面白い被写体だったし、ホテルが整備されているだけに、ベースとしては恰好だった。

南原は、タヒチの北東にあるツアツア諸島、或は、西南にあるクック諸島へと足を伸ばして、写真を撮りまくった。

飛行場も、これといった港もないこれらの島へ行くには、飛行艇をチャーターして行くか、さもなければ、コプラの採集船に便乗させて貰うしかない。

南原は、もっぱらスクーナーと呼ばれるコプラ採集船を利用した。南太平洋に散らばる小さな島々には、これといった産物も産業もない。ただ一つ、共通してあるのはココヤシである。

このココヤシの実の中身がコプラであり、マーガリンや石鹸の原料になる。そのため、コプラ採集船が、島をめぐって集めて廻るわけである。島の人たちにとって、コプラが唯一の現金収入である。

南原は、金をつかませ、この船に乗せて貰い、いまにも波にのまれそうな小さなサンゴ礁の島へも出かけて行った。コプラ特有の臭気に悩まされながらの船旅である。小さい船なので、沖に出ると猛烈にゆれる。驚いたことに、可奈子は、平気で同行してきた。

彼女をモデルにした写真も、何枚か撮った。

浅黒い細身の身体に、ビキニがよく似合って、モデルとしても上等だった。

「なかなかいいよ」

と、南原がほめると、可奈子は、

「先生のお気に入りの江口朱子さんには及ばないでしょう?」

と、いたずらっぽく笑った。

南原は、ファインダーの中の可奈子を見ながら、

「なぜ、そんなことまで知ってるの?」

と、きいた。

可奈子は、クスッと笑って、すきとおったサンゴ礁の海に、しなやかな身体を踊らせた。魚

のように、五、六メートルもぐってから、急に首を海面に出して、
「私は、先生のことなら何でも知っているんです。生年月日も、背の高さも、恋人のことも」
「それは不公平だな。僕の方は、君のことを何にも知らないんだから」
「知らない方がいいわ。先生」
「なぜ？」
「なぜって、このお仕事だけで、お別れするんですもの。私たちは」
と、可奈子は、海水に濡れた髪をなでながらいった。
七月十四日が近づくと、タヒチをはじめとするフランス領ポリネシアの島々では、祭りの準備がはじまった。南海のパリ祭である。
名前はパリ祭だが、南原が見ていると、むしろ、日本の祭りに似ていた。
街には、屋台が出て、縁台将棋に似た街頭バクチも出るからである。それに、パピエテの街で行われるダンスコンクールは、どこか日本の盆踊り大会に似ていた。タヒチ周辺の島々からやって来た踊り手たちが、踊りを競うのだが、そのタヒチアンダンスは圧倒的な迫力を持っていた。
祭りが終った七月二十日。南原は、タヒチから飛行機で四時間の東サモア諸島のツツイラ島へ出かけた。この島の町パゴパゴが、サマセット・モームの短篇「雨」の舞台になったところ

だったからである。

それまで、どこの島へも同行した可奈子だったが、この時に限って、気分が悪いといって、同行を断った。

南原は、彼女を、パピエテのホテルへ残して、一人で、パゴパゴへ出発した。

ポリネシア諸島の中では、雨の多いところである。彼が着いた日も雨で、撮影条件は悪かった。だが、小さなホテルで、じっと雨に降りこめられていると、モームの小説の中の主人公が、降り続く雨に理性を失ってしまう気持がわかるような気がした。雨に降りこめられると、都会と違って、ここではすることがないし、気をまぎらわせるものがないからである。そんな島の空気を撮りたくなって、南原は、雨の中を、カメラを持って歩き廻ったりもした。

パゴパゴには二日間滞在し、二十三日には、タヒチ島へ戻った。これで、凡そ、撮りたい島の写真は撮ったと思い、パピエテのホテルへ戻ったら、可奈子に、それをいおうと思ったのだが、彼女は、ホテルにいなかった。

驚いて、フロントに電話してきくと、フロントは、フランス訛りの英語で、

「ミス・ハヤシは、七月二十日にお発ちになりました。行先ですか？　日本へ帰るとおっしゃっていましたが」

7

南原は、狐につつまれたような気持だった。

東京に急用が出来、あわてて帰国したのかとも思った。だが、フロントは、東京から彼女に電話はなかったというし、南原へ何の伝言もなく、突然、帰国してしまうというのも変な話だった。

名刺を置いてきてしまったので、とにかく、日本へ帰って、「東京クラブ」という出版社へ連絡をとれば、事情がわかるだろう。そう考えたが、困ったのは、東京までの航空運賃だった。ホテル代は、可奈子が払ってくれて行ったが、飛行機の切符は置いて行ってくれなかった。

一五〇ドルほどの金は持っていたが、それでは足りない。仕方なしに、商売物のカメラを一台売り払い、それで、やっと、羽田までの切符を買うことが出来た。

七月二十四日の夕方、およそ一カ月ぶりに、南原は、日本に帰った。

鞄の中には、南の海と島と、そこに住む人々を撮りまくったフィルムが詰っている。それは、彼を満足させてくれるのだが、林可奈子の不可解な行動や、愛用していたカメラを失ったことが、彼の気持を不安定なものにしていた。

いったん、自分のアパートに帰ってから、可奈子に貰った名刺を取り出し電話を掛けてみた。

若い女の声が、電話口に出た。

「そちら、東京クラブですね？」

南原は、まっ黒く陽焼けした顔を片手でなでながらきいた。

「はい」

「林可奈子さんを呼んで貰いたいんだが」

「林といいますと、どこの課の林でしょうか？」

「そちらで今度、月刊雑誌を出すことになっているでしょう？「ルック・東京」という雑誌ですよ。その編集部の林可奈子さんですよ」

「ちょっとお待ち下さい」

電話の女は、急にあわてた声でいい、二、三分、間を置いてから、

「その雑誌とかいうのは、何のことでしょうか？」

と、きき返してきた。

「何って、おたくで、今度出す雑誌ですよ」

「番号間違いじゃございませんか？　こちらは、工芸品の売買をしている会社で、雑誌の出版など致しませんが」

「そちらは、二九六の――番じゃないんですか？」
南原は、名刺に刷られた電話番号をゆっくりといってみた。
「それは確かに、うちの電話番号ですけど、雑誌を出す計画などありませんし、今、調べましたところ、社員の中に、林可奈子という者もおりませんが」
「本当ですか？」
「はい」
「他に、東京クラブという会社はありませんか？」
「ない筈ですけれど」
「どうも――」
と、電話を切ってから、南原は、考え込んでしまった。まるで狐につつまれたようで、わけがわからない。
どうやら、最初に電話を掛けてきた男も、林可奈子という女も、架空の月刊雑誌の話で、南原を欺したとしか、考えられなくなった。実在の会社の名前を使ったのは、南原に調べられた時、困るからだろう。
まんまと欺された。
だが、相手が何のために、そんなことをしたのかわからなかった。

帰りの航空賃がなくて、カメラを一台売らなければならなかったとはいえ、約一カ月間の向うでの滞在費から、飛行機、船などの費用、それに何百本というフィルム代も、向うが払ってくれたのだ。細かくは計算していないが、南原の分だけで、百万円は軽く越している額である。何のために、そんな大金を使ったのだろうか？

欺されたと思いながら、あまり腹が立たないのは、損をしたという感じが、殆どないからである。ともかく、南原は、南太平洋の海と島と人間を撮りまくってきた。それは、彼にとって一つの財産である。

南原は、気を取り直して、撮ってきた写真の現像に取りかかった。２ＤＫの四畳半の部屋の半分を暗室に改造して使っていた。

現像をはじめると、写真家らしく、欺されたことを忘れて、仕事に熱中した。しかし、可奈子が写っているフィルムになると、また、考え込んでしまった。損害はカメラ一台で、得たものの方が大きかったとしても、欺されたシコリは残っている。

可奈子の写真だけ、先に、大きく引き伸ばして、部屋の壁にピンで留めた。

ビキニ姿で、ニッコリと笑っている写真である。バストはさほど大きくないが、しなやかな身体が、若さを誇っているように見える。バックが抜けるような青空のせいか、その笑顔に、少しも暗い影は感じられなかった。この女が、何のために、南原を欺したのだろうか？

写真を見ているうちに、彼女と交わした言葉が少しずつ思い出されてきた。彼女は、南原のことを何でも知っているといった。江口朱子のことまで知っていたのだから、嘘ではあるまい。ところが、こちらは、彼女のことを、何も知らないのだ。

イヤ、少しはわかっている。まず名前だ。パスポートも同じ名前だったから、林可奈子というのは本名だろう。もっとも、誰か友人のパスポートを使っていたのだとすれば、この限りではない。

フランス語が達者だった。タヒチでは、最初の一週間ぐらいは、彼女が通訳してくれたものだった。「上手いね」と、南原がほめたら、大学の仏文を出て、半年ばかりパリにいたことがあるといった。が、パリにいたというのも嘘かもしれないし、どこの大学の仏文かも聞き忘れた。

（やはり、何もわからないのと同じだな）

と、南原は苦笑し、畳の上にごろりと横になって、その恰好で、壁に貼りつけた可奈子の写真を眺めた。

8

それから三日間、南原は、厖大なフィルムの現像、引伸し、それと整理に追われた。嬉しい

ことに、「南太平洋の島と人」という題で、Sデパートで個展を開いてくれるという話も飛び込んできた。

四日目の午前中に、電話があった。近くのN銀行からだった。相手がN銀行とわかったとたんに、南原は、ひとりで恐縮した。その銀行に、普通預金口座を持っていたが、残高は、わずか二、三万円しかなかったからである。

「南原様ですね」

と、相手は、確認するようにいってから、

「本日、林様からお振込みがありました。金額は百万円でございます」

「本当ですか？」

「はい」

「相手の名前は、林可奈子――ですか？」

「はい。林可奈子様です」

「振込伝票は、そこにありますか？」

「写しがございますけど」

「住所はどうなっています？」

「住所は書いてございません。振り込まれたのは、T銀行の渋谷支店でございます」

また、南原は、首をかしげてしまった。

相手は、最初の約束どおり、百万円払ってきたのだ。

おかしないい方だが、相手は良心的に行動しているのだ。雑誌の話は嘘だったが、その他は嘘ではなかったのだ。

南原に、好きなだけ、南太平洋の写真を撮らせてくれたし、帰国すると、約束したとおり百万円の金を振り込んできた。

金のありあまっている人間が、南原をからかっているのだろうか。それとも、何か目的があって、南原を南太平洋の島々へ行かせたり、百万円を贈ってきたりしたのだろうか。考えてみたが、そのどちらも、馬鹿げてみえる。金持の遊びとすれば、南原をからかって楽しいとは思えないし、目的があったとしても、彼に利用価値があるとは思えないからである。

いくら考えても、結局、わからなくて、考えることを止めてしまったが、問題は、振り込まれた百万円だった。そのまま受け取るのも何だか薄気味が悪いし、かといって、返すには、相手の住所がわからない。念のために、彼女が振り込んだというT銀行の渋谷支店に問い合わせてみたが、林可奈子の口座はないという返事だった。

その日の夕方になって、今度は、「カメラ・ジャパン」編集長の田口から電話が掛ってきた。

「何度も電話したんですが、お留守でしたね」

と、田口は堅い声でいった。

「ちょっと、南太平洋の方へ、写真を撮りに出かけていたのです。何かご用ですか？」

「電話では話せないことなので、明日、会って貰えませんか？」

「いいですよ。どこでお会いします？　そちらへ伺いましょうか？」

「いや。社じゃない方がいい。新宿の伊勢丹の近くに、『エロイーズ』という喫茶店がありますから、そこへ、午後二時に来て下さい。頼みます」

「わかりました」

と、南原はいった。

翌日の七月三十日。彼は、十分ばかり前に新宿に着き、エロイーズという喫茶店を深した。小さな喫茶店だった。南原は、奥のテーブルに腰を下して、コーヒーを頼んだ。暑い陽差しの中を歩いて来たので、冷房が心地よかったが、それが、少し寒く感じるようになっても、田口は現われなかった。

南原は、二時半まで待ってみた。が、いぜんとして現われない。南原は、レジのところにある電話で、カメラ・ジャパン社に連絡してみようとして、今日が日曜日だったことを思い出して、やめた。

南原は、更に、三時まで、コーヒーのお代りをして待ってみたが、結果は同じだった。多分、

向うの都合が悪くなったのだろうと解釈して、南原は席を立った。また、アパートの方へ連絡してくるだろうし、連絡がなかったら、明日にでも、こちらから、カメラ・ジャパン社に連絡してもいい。

南原は、江口朱子を新宿まで呼び出し、二人で映画を見、食事をした。食事をしながら、妙な南太平洋旅行のことを、朱子に話して聞かせた。

「結果的には、ずい分トクをしたんだが、どうも薄気味悪くてね」

「林可奈子という人が、すごいお金持で、才能のあるあなたのパトロンになりたがっているんじゃないの？」

と、朱子は、いかにも女らしいことをいった。南原は笑って、

「違うねえ。パトロンだったら、僕に感謝させるよ。ところが、彼女は行方不明になっちまった」

「もう一度、彼女に会いたいと思うの？」

ちらりと、朱子の眼に、嫉妬の色が浮んだ。南原は、あわてて、「別に」と、首を横に振って見せた。

「また会って、また欺されるのはごめんだよ」

南原は、朱子を自宅まで送り、アパートへ帰ったのは、夜の十時を過ぎていた。ガタピシす

る階段をのぼり、二階にある自分の部屋の前に立ったとき、ふいに、廊下の奥にいた二人の男が、近寄って来た。

「警察の者ですが、南原昌久さんですね？」

と、背の高い方が、ジロリと南原を見た。

「ええ。南原ですが――？」

「カメラ・ジャパンの田口さんをご存じですね？」

「知っていますよ。田口さんがどうかしたんですか？」

「殺されました。十時間前にね」

9

南原は、一瞬、ポカンとして、二人の刑事を見つめた。

「何ですって？」

「田口さんは、今日の午後一時頃、自宅附近で、何者かに殺されたのです。背中を刺されて」

「いったい、誰が、何のために？」

「それを、われわれが調べているのです。ご足労ですが、これから同行願えませんか」

「なぜ、僕が？」
「今、田口さんを知っているといわれた筈ですよ」
「いいましたが、格別親しかったわけじゃありませんよ。会ったのも確か三度だけです」
「しかし、これは、あなたの名刺でしょう？」
刑事は、見覚えのある南原の名刺を取り出して、彼の眼の前に突きつけた。
「確かに僕の名刺ですが」
「殺された田口さんが、この名刺を、しっかりと右手に握りしめていたんです。だから、折れまがっているでしょう」
「それが、僕とどういう――？」
「田口さんのポケットには、他の人の名刺も六枚入っていました。その中から、あなたの名刺だけを握りしめていたということは、二つのことを示していると思うのですよ。犯人を示そうとしていたのか、それとも、あなたに何か知らせたいことがあったのか、どちらかでしょうね。心当りはありませんか？」
「心当りといわれても、田口さんはカメラ雑誌の編集責任者で、僕は、そこに写真をのせて貰っただけのことですから。ただ、昨日電話があって、今日、新宿で会うことになってはいましたが」

「それをくわしく話して貰えませんか。車の中がいいですな」
二人の刑事は、両側からはさむようにして、南原を下に待たせてある車に連れて行った。
「今日の午後二時に、新宿のエロイーズという喫茶店で会うことになっていたんです」
と、南原は、走り出した車の中で説明した。
「会いたいというのは、田口さんの方からいって来たんですか？」
刑事の一人が、直接南原を見ず、バックミラーの彼の顔に向ってきいた。
「そうです」
「その用事の内容はどんなことだったんですか？」
「わかりませんね。電話では話せないことだから、会って話したいということでしたから」
「どんなことか、想像もつきませんか？」
「全然、つきませんね。僕は一カ月ばかりタヒチやフィジーに写真を撮りに行っていて、帰国したばかりなんです。そこへ、急に、田口さんから電話があったんですからね。どんなことで会いたいのか、僕にわかる筈がありませんよ」
南原が車で連れて行かれたのは、多摩川署だった。確か、田口の家は、多摩川の近くだった筈である。
「多摩川堤殺人事件捜査本部」と貼紙のある部屋に入ると、南原は、田口の突然の死が、急に

実感となって迫って来た。

捜査本部というものを見るのは初めてだった。いくつかの机を寄せて並べ、その上に、四つばかり電話が置いてある。がらんとした殺風景な部屋だった。

「まあ、座って下さい」

と、南原を連れて来た刑事の一人が、椅子を彼にすすめ、自分で冷えた麦茶を入れてくれた。

だが、そうした表面上の優しい取扱いにも拘らず、南原は、自分が容疑者の一人にされているのを感じないわけにはいかなかった。

部屋にいた刑事たちの自分を見る眼に、それを感じるのだ。

「ところで」と、前に腰を下した刑事が、煙草に火をつけて南原を見た。

「今日の午後二時に、新宿の喫茶店に行かれたんですか？」

「ええ。行きましたよ」

「それで？」

「三時になっても田口さんが来ないので、あきらめて帰ったんです」

「それにしては、帰宅が遅かったですね」

「新宿に出たついでに、女の子を呼び出して、映画を見て食事をしたからです」

「名前は？」

「江口朱子。写真のモデルをやっている子ですよ」
「彼女に会ったのは、何時です？」
「三時を過ぎていましたね。三時半頃だったかな」
「すると、多摩川の川原で一時半に被害者を殺し、新宿に出て女に会ったとしても、時間的には、ゆっくり間に合ったわけですね」
「僕が、田口さんを殺したとでもいうんですか？」
「可能性をいっているだけですよ」
と、刑事は、冷たく突き放すようないい方をして、南原を睨んだ。

10

南原は、K大病院で、田口編集長の遺体と再会した。彼の遺体は、これから司法解剖に回されるのである。
田口の細君の美代子にも、ひんやりした地下の死体置場で会った。小柄で、おとなしい顔立ちの女性である。驚愕と悲しみで、彼女の細面の顔には、深いかげりができていた。
遺体が解剖に回されると、南原は、慰めるように、美代子に声をかけた。

「実は、今日の午後二時に、ご主人とお会いすることになっていたんです」
「存じていました」
と、美代子は、気を取り直したように、眼をあげて南原を見た。
「今日は、三つになる子供を連れて、遊園地に遊びに行く予定でしたの。それが、前日になって急に、写真家の南原さんと大事な用件で会わなければならなくなったといったんです」
「その内容をお聞きになりましたか？」
「いいえ」
「それがわかれば、犯人の目星がつくかもしれないんですがね。ご主人は、多摩川の川原で殺されていたそうですね？」
南原は、美代子を新たな悲しみに誘うかもしれないと思いながら、あえて質問したのは、犯人を知る糸口をつかみたかったからである。まだ、なぜ殺害されたのか理由はわからないが、もし、彼に会おうとしたことが原因ならば、責任は、彼にもある。
「はい」と、美代子は肯いた。
「うちから、私鉄のQ駅まで、多摩川の土手を歩いて行くんですけど、その土手からおりた川原で死んでいたんです。あの辺は、丈の高い雑草が生えていて、人が死んでいても、なかなかわからない所なんです」

「犯人は、そこへご主人を連れ込んだんですね。ご主人は抵抗されたんでしょうね？」
「それが、抵抗のあとはないと、警察の方はおっしゃっていました」
「すると、顔見知りの人間か、話せばわかる相手と思ったかのどちらかですね。盗られていたものがありましたか？」
「財布が盗られておりました。確か五万円近く入っていたと思います」
「腕時計は？」
「腕にはめたままでした。でも、主人は左ききで、腕時計はいつも右手にはめていましたから、犯人は左手を見ただけで、腕時計はしていないと早のみ込みしたのかもしれません」
「なるほど」
「主人は、あなたの名刺をにぎりしめて死んでいたそうですけど、なぜでしょうか？」
今度は、美代子がきいた。
「正直にいってわかりません。僕に何か伝えたいと考えられたのか、それとも、刺された原因が僕にあることをいおうとなさったのか、そのどちらかだろうと、今は考えているのですが」
もし、前者なら、犯人は、次に南原を狙ってくるかもしれない。そう考えた時、南原は、背筋に冷たいものが走るのを覚えたが、同時に、そうなれば、犯人に出会うことが出来るし、あわよくば捕えることが出来るかもしれないとも考えた。

遺体解剖が終り、美代子が再び地下におりて行ったあと、南原は、ひとりで病院の外の道路へ出てみた。すでに時間は午前四時に近かった。

煙草に火をつけ、疲れた頭で、今度の事件を考えてみようと思った。

田口は、南原と会う途中で何者かに殺された。彼が何を話そうとしたのか、今になっては、知るすべもない。だが、物盗りの犯行ではないとすれば、殺人の原因は、田口が南原に話そうとしたことの内容にありそうである。

南原は、田口と会ったのは三回だけでしかない。田口のプライベイトな面は全く知らなかった。彼が結婚していたことも、今日、細君に会って初めて知ったくらいだ。とすれば、田口が殺された原因は、彼のプライベイトな面ではない。

田口と南原の二人の間の問題が原因だとすると、南原の頭に浮ぶのは、カメラ・ジャパン賞のことだけである。あの五枚の写真の中一枚がすり変えられたことと、田口が殺されたこととの間に関係があるのだろうか。

夜が少しずつ明けてくる。向いのビルの壁が、白っぽく明らんでくるのを眺めていると、病院へ同行して来た藤本刑事が近づいて来て、

「田口さんが殺された原因について、何か思いつかれましたか？」

と、きいた。

11

猪首のがっちりした身体つきの藤本刑事は、南原から、五枚の組写真のことを聞くと、首をひねった。

「その他に被害者とあなたの間に問題はなかったのですか？」

「ありません」

「すると、その写真が原因で殺されたことになるのかな。あなたが考えて、一人の人間が殺されるほど、大事な写真だったと思いますか？」

「いや。ただの平凡な橋の写真です」

「とにかく、その写真を見たいですね」

と、藤本刑事はいい、南原は、彼を、自分のアパートに連れて行った。すでに、夜が明けていた。

南原は、彼の写真の載っている「カメラ・ジャパン」の八月号を、藤本刑事に見せた。

「これは、同じ日の朝から夜までを撮ったものですね？」

「そうです。去年の九月二十七日です。一週間にわたって撮りまくったんですが、光線や、人

物なんかの具合で、気に入ったのは、この日の写真だけでした」
「去年の九月ですか」
藤本刑事は、急に興味を失った眼になった。無理もない。去年の九月の写真が、今年の殺人事件に関係してくると考える方が無理なのだ。それでも、刑事は、
「すり変えられた写真ですが、それに、事件を匂わすようなものが、写っていましたか？」
と、きいた。
「いや。そんなものは、写っていませんでしたね。橋の上に人物が四、五人写っていただけです。時間は午後四時で、けだるい空気だけはよく出ていたと思っているんですが」
「スリが仕事をしているところが、バッチリと写っていたというようなことは？」
「全然ありませんね」
と、南原は、笑った。
「すると、その写真は関係ないのかもしれませんね。受賞後、田口さんから、何か撮ってくれと依頼されたことはありませんか？」
「いや。全然ありません」
「すると、田口さんが殺された原因は、これからあなたに頼もうとした、そのことだったのかもしれませんな」

藤本刑事は、勝手にそう決めてしまった。もちろん、その可能性もなくはないだろう。例えば、田口が、暴力組織の実体といった報道写真を雑誌にのせることを考えていたとする。それも、どこの県の暴力団といった具体的な目標を立てた。それを知った暴力団が田口を脅した。が、彼はその脅しに屈せず、南原に頼もうとして、殺されてしまった。あり得ないことではない。

だが、南原は、すり変った写真の線を調べてみることにした。今の彼には、他に手がかりとなるものがなかったからである。

藤本刑事が帰ったあと、南原は、しばらく眠り、午後になって眼をさますと、大きなケント紙を机の上に置いた。問題の写真を、思い出しながら、そこに描いてみようと考えたのである。

橋の袂に、たこ焼の屋台を出している中年の夫婦がいた。それに、橋を渡る人々。確か写真には、男が二人、女が二人写っていた。その中、アベックが一組。若いアベックだった。並んで、隅田川を見下ろしていたので顔はわからなかった。だが男の手が女の腰に回されていて、二人の間の親しさを示していた。あと、中年の男が、向島方向から渡って行くのと、逆の方向から、老婆が来るのが写っていた。老婆は残暑がきびしいのに、大きな風呂敷包みを背負っていたっけ。男は、確か帽子をかぶっていた。

南原は、少しずつ、人物に4Bの鉛筆で肉付けをしていった。中年の男には、ひげも書き加

えた。アベックは、男女ともブルーのジーパン姿だった。

デッサンが完成すると、それと、すり変った写真とを比べてみた。

その写真にも、たこ焼屋の夫婦の他に、四人の男女が写っている。構図もよく似ている。カメラに背を向けている若いアベックに、通り過ぎる中年男と老婆。よく似せたものだが、アベックの女の方は、ジーパンでなくビッグスカートだし、中年男や老婆も、明らかに違う人物である。毎日、店を出しているたこ焼屋の夫婦だけが同じだ。

南原は、デッサンと写真を前に置いて考え込んだ。

たこ焼屋の夫婦は、他の写真にも写っているのだから、問題の写真をすり変えたりはしないだろう。残る四人の中に、あの日のあの時刻に、写されては困る人間がいたのかもしれない。だから、すり変えた——。

背を向けたアベックは、顔が写っていないのだから、除外できるだろうか。いや、背恰好や、服装で知人が見れば誰それとわかるだろうから除外はできない。中年男と老婆は、顔がはっきりわかるのだから、なおさらである。

この四人の一人一人に当って調べてみたら、或は、何かつかめるかもしれないが、肝心の写真が失くなってしまった今では、四人の名前や、住所を調べるのも難しい。

南原は、その代りに、去年の九月二十七日に、白鬚橋の近くで、何か事件が起きなかったか

を調べてみることにした。

所轄署で聞けば一番いいのだろうが、地図で見ると、白鬚橋は、台東区、荒川区、墨田区の三つの区が接する地点にかかっているので、三つの所轄署から話を聞かなければならない。南原は、そうする代りに、国会図書館へ出かけて、去年九月二十七日に起きた事件を調べてみた。

新聞の縮刷版を引き出し、九月二十七日の夕刊と、二十八日の朝刊に眼を通した。

問題の九月二十七日には、他の日と同じように、さまざまな事件が起きていた。若い母親の嬰児殺し、泥酔運転、内ゲバ殺人、ひったくり、エトセトラである。

白鬚橋附近で、しかも、午後四時前後としぼると、一つの事件が浮びあがってきた。

〈向島で若い女性殺さる〉

二十七日午後六時頃、東京都墨田区向島×丁目にある「コーポ向島」四〇九号室のドアが開き放しになっているのを不審に思った管理人の佐藤市郎さんが中をのぞいたところ、六畳の居間で、小城泰子さん(二二五歳)が背中を刺されて死んでいるのを発見し、警察へ届け出た。警察の調べによると、泰子さんは、死後二時間は経過しており、物盗り、怨恨の二つの線で捜査を進めている。

この事件の他には、白鬚橋附近で、午後四時前後に何も起きていない。
殺された小城泰子の顔写真ものっていたが、なかなか美人である。
南原は、愛車のポンコツで、このマンションに出かけた。
浅草方向から白鬚橋を渡って五、六分のところに、コーポ向島は建っていた。３ＬＤＫ以上の部屋ばかりという豪華マンションである。
新聞に出ていた佐藤市郎という中年の管理人に会った。話好きとみえて、南原が去年九月二十七日の事件を口にすると、待っていましたというように、
「わたしが見つけたとき、ネグリジェの上に紫のガウンを羽おった恰好で、床に倒れていたんです。だから、犯人は、相当、小城さんと親しい人物だと思いましたね。そんな姿で、相手を部屋に入れたんだから」
「小城泰子さんというのは、どういう人だったんです？」
「大きな会社の社長さんのこれですよ」
と、管理人は、小指を立てて見せた。
「元はその会社のタイピストだったらしいんですがね。優雅な生活をしてましたわ」
「それで、犯人は見つかったんですか？」
「ええ。小城さんに若い恋人がいましてね。背の高いサラリーマンですが、完全に彼女を自分

のものにしようと思ったんでしょうね。だが、彼女が社長と別れんものだから、かっとして刺したんじゃありませんか」

「自供したんですか？」

「それが、裁判になっても否定してましたが、動機もあるし、証拠もあるしじゃ駄目ですよ」

「裁判があったんですか？」

「ええ。先月開かれましてね。わたしも、証人として出廷しましたよ。しかし、裁判というのは、もたもたしてるもんですねえ。一カ月近くかかったあげく、判決が下りるのは、今年の末だっていうんだから」

「動機といえば、その社長にもあるんじゃありませんか？　小城泰子さんに若い恋人が出来たのを知って嫉妬にかられたことも考えられるし――」

「警察も、社長さんを一応調べたようですよ。しかし、きちんとしたアリバイがあった上に、小城さんとの間が冷たくなっていたようで、警察は、それなら殺す筈はないと考えたそうです」

「その会社の名前を知っていますか？」

「ええ。銀座に本社がある中央興業という会社ですよ。なんでも、東南アジアの物産の輸入の仕事をしている会社だそうです」

「社長も、裁判に来ていたんじゃありませんか？」
「ええ。二度ばかり見ましたよ。ここにお出でになる時にも、何回か顔を合わせましたが、いい方でしてね。小城さんのことをよろしくといって、いろいろな物を頂きました」
「ここに来る時は、車で来ていたんですか？」
「それが面白いことに、橋の向うまでタクシーで来て、そこから歩いていらっしゃるんですよ。車を乗りつけたりして、目立つのが嫌だったんでしょうね」
「その人は、年齢は四十五、六歳で、鼻の下にひげを生やしていませんか？」
「あなたも、社長さんをご存じなんですか」
と、管理人は笑った。
「ええ。一度だけ、お会いしたことがありましてね」
と、南原はいった。

12

少しずつ、パズルが解けていくような気が、南原はした。
去年の九月二十七日、小城泰子という若い女が、向島のマンションで刺殺された。容疑者の

一人、中央興業社長には、アリバイがあることになっているが、同じ日、白鬚橋で写真を撮っていた南原のカメラに入ってしまった。彼にとっては、命取りになる写真である。だから、あの一枚をすり変えたのだ。

警察にいうべきだろうか？

だが、これは、あくまでも南原の推測でしかない。肝心の写真はなくなってしまっているのだし、すり変えられたことを知っているもう一人の人間、田口編集長は、殺されてしまっている。こんな状態では、警察は、南原の話を信用してくれまい。

といって、このまま黙ってしまったのでは、無実に違いない若者を刑務所に送ることになりそうだし、田口を殺した犯人も見つけられなくなる。

南原は、銀座に出て、問題の中央興業を訪ねてみた。

マンションの管理人は、大会社といったが、商社としては小さい方だろう。ビルの一階から三階までが、中央興業本社になっていた。入口を入ると、受付があったが、南原は、それを通さずに、社長室のある三階へあがって行った。彼の推理が当っていれば、受付を通して会ってくれる相手とは考えられなかったからである。

三階の奥に社長室と書いたドアが見えた。南原は、そのドアの前で一瞬、迷ってから、ドアを押しあけた。

すぐのところが秘書室になっていて、そこにいた若い女が、咎めるような眼で南原を睨んだ。
その理知的な顔に、南原は見覚えがあった。
「やあ」と、南原は、彼女に笑いかけた。
「こんなところで会えるとは奇遇だね」
「――――」
林可奈子は、黙っていた。が、その顔が蒼ざめていた。
「君が振り込んでくれた百万円は、明日にでも返すとして、社長に会わせてくれないかな」
「社長はお留守です」
「じゃあ、部屋だけでものぞかせて貰うよ」
「駄目です。お帰りになって下さい！」
と、可奈子が叫ぶのを無視して、南原は、奥の部屋に入って行った。
大きな部屋の豪華なソファに、中年の男がひとりで腰を下していた。その顔にも見覚えがあった。間違いなく、南原の撮った写真に写っていた中年男である。
「僕を知っていますね？」
と、南原がいうと、こちらは、林可奈子のように狼狽したりはせず、落着いた声で、
「まあ、座りなさい。立っていたら話も出来ん」

と、いった。

南原は、向い合って腰を下した。テーブルの上には、高級カメラが三台置いてある。

「カメラいじりが、私の趣味でね」

と、社長がいった。南原は、笑って、

「あなたのその声にも聞き覚えがありますよ。東京クラブの人間で、創刊する雑誌に僕の写真が欲しいといって来た人だ」

「そんなものは、私は知らん。私は、この会社をやっている橋本だ」

「そして、小城泰子という女性を殺した犯人でもある。違いますか？」

「馬鹿なことをいっちゃ困る。あの女を殺したのは、三根春彦という若いサラリーマンだよ。私ではない。警察で聞いてみたまえ」

「違いますね。犯人はあなただ」

「私には、ちゃんとアリバイがある。彼女が殺された時間には、私は、ここで仕事をしていた」

「証人は、秘書の林可奈子さんですか？」

「彼女じゃいけないのかね？」

「いけませんね。あなたが、犯行のあった、九月二十七日の午後四時頃、白鬚橋を渡るところ

を、僕が写真に撮ったからですよ。僕は何も知らずに、それをカメラ・ジャパン賞に応募したんだが、それを知ったあなたは、盗み出し、肝心の写真をすり変えた。その上、あの事件の裁判が開かれている間、念のために、僕を南太平洋に追っ払っておいた。違いますか？」

「証拠はあるのかね？」

「僕が知っていますよ」

「それは、君の勝手な想像だろう。確信があるのなら、警察にいったらどうかね？」

橋本は、自信満々に笑った。

南原は、唇を噛んだ。確かに、橋本のいう通り、証拠はない。

「それにだ」と、橋本は、かさにかかって、

「君は、私が、君がカメラ・ジャパン賞とかに応募した写真をすり変えたといっているが、君が応募したと、私がなぜ知っていたのかね？」

「――――」

南原は、黙るより仕方がなかった。確かに、どうして、この橋本がそれを知ったか、彼にも不思議なのだ。南原は、白髪橋の写真を応募したことは、恋人の江口朱子にさえ話してなかったのだから。

南原は、ひとまず退散した。

自分のアパートへ戻ってから、南原は、考え込んだ。

橋本が、小城泰子という女を殺したことは、まず間違いない。南原の写真をすり変えたのも橋本だろう。

だが、橋本は、どうやって、カメラ・ジャパン賞の受賞作に、自分が写っているのを知ったのだろうか？

田口編集長が話したのだろうか？　いや、彼が橋本に話したのなら、南原が、すり変えられたと話したとき、あんなに驚きはしまい。あれは芝居ではなかった。

残るのは、審査員の三人の大家だ。多分、三人の中の一人が、カメラを通じて橋本を知っていて、今度の当選作に君が写っていたぞと、彼に話したに違いない。それで、橋本はあわてて、カメラ・ジャパン社に忍び込み、自分が写っている写真をすり変えたのだ。

一つだけ、疑問に対する答が見つかったが、田口が殺された理由が、いぜんとしてわからない。多分、田口を殺したのも、橋本だろうと想像しても、動機がわからないのだ。

南原は、考えあぐねた末、未亡人の美代子に電話を掛けた。

「田口さんが、橋本という人のことを口にしていたことはありませんか？　中央興業という中堅商社の社長です」

「覚えがございませんけれど」

と、美代子は、小さな声でいった。
「それでは、小城泰子という名前はいかがですか？　或は、三根春彦という名前でも」
「ちょっと覚えがありませんけど、最近の手紙を調べてみます」
美代子は、しばらく、間を置いてから、
「ございました」
「どちらがですか？」
「三根利夫という方から手紙が来ております。今、あなたがおっしゃった三根春彦さんのお兄さんのようですわ」
「手紙の内容はどんなことですか？」
「自分の弟が、人殺しの容疑で捕まり、裁判になるので助けて欲しい。自分は今病気で、札幌から動けないので、北大時代の友人の君に頼むというものです。七月に入ってから、主人は、そのことで、いろいろと走り廻っていたんだと思います」
「ありがとうございます。おかげでいろいろとわかりました」
「主人を殺した犯人に心当りでも？」
「必ず僕が見つけ出します」
約束して電話を切ると、南原は、車で、捜査本部が置かれている多摩川に出かけ、前に会っ

た藤本刑事に面会を求めた。

藤本刑事は、この前よりも、明らかに焦らだっていた。

「犯人の手掛りは、まだつかめませんか？」

という南原の質問に対して、

「全然だ。動機が見つからないんだ」

「じゃあ、僕の考えを聞いてくれませんか」

南原は、白鬚橋の組写真をカメラ・ジャパンに応募したところから話を切り出した。

藤本刑事は、四角い顔をまっすぐに南原に向け、興味があるのかないのかわからない無表情さで、黙って聞いていたが、南原が話し終ると、ただ一言、

「橋本という男のこと、調べてみよう」

と、いった。

13

翌日は、何の連絡もなかった。

二日目の午後二時頃になって、藤本刑事から電話が入った。調査の結果は一言もいわず、た

だ、会いたいとだけいった。
　南原は、新宿駅近くの喫茶店で、藤本刑事に会った。
「君のいう通り、橋本社長には、怪しいところもあるが、田口さんは殺していないよ」
　藤本刑事は、ゆっくりした口調でいった。
「なぜ、そうだと断定できるんですか？」
「彼にはアリバイがある」
「林可奈子という女秘書が証言したんじゃありませんか？　田口さんが殺された七月三十日の午後一時には、一緒に会社にいたと」
「いや。違うんだ。他のアリバイだよ」
「どんなアリバイです？」
「それが写真なんだよ。それで、写真にくわしい君に相談したいと思ってね」
　藤本刑事は、一枚の写真を取り出して南原の前に置いた。
　白黒で、キャビネ判の大きさである。
　どこかの駅前広場の写真のようだ。
　橋本が立って笑っている。その背後を、ライトバンが一台走っている。
「これがアリバイですか？」

南原は、写真に眼をやったまま聞いた。
「それは、伊豆のK駅前だ」
「そうですか。しかし、なぜ、これが、橋本のアリバイの証明になるんですか？　ただの白黒写真ですが」
「その写真は、君のいった林可奈子という秘書が撮ったものだと、橋本はいっている。七月三十日の日曜日に、二人で伊豆へ遊んだ時のものだそうだ」
「やはり、あの二人は、そんな仲だったんですね」
「橋本は、彼女との仲をかくしたりはしていないよ。ところで、よくバックを見てくれ。ビルの電光時計が写っているだろう」
「0・58と読めますね」
「そうだ。つまり、昼間の〇時五十八分ということだよ。伊豆のK駅前に、十二時五十八分にいたのでは、午後一時に、東京の多摩川の川原で、田口さんを殺すことは不可能だ」
「しかし、この写真を撮ったのが、七月三十日とどうしてわかるんですか？」
「私も、それを橋本社長に聞いたさ。答はこうだ。ライトバンが一台走っているだろう。そのライトバンが、もうもうと黒煙を出している。エンジンの不完全燃焼だ。広場を通り過ぎたところで、警察に捕まって、油をしぼられた。それが七月三十日だというんだ。もちろん、私は

すぐ、問い合わせてみた。事実だったよ。七月三十日にK駅前で、一台のライトバンが、エンジンの整備不良で捕まっている。七月三十日の午後一時五分。つまり、この写真が撮られた直後だ」

「橋本が細工をしたんじゃありませんか？　そのくらいのことはする男ですよ」

「例えば、どんなだね？」

「写真のライトバンは、中古のカローラ・バンです。かなりありふれた車です。別の日に、同じ型のライトバンを誰かに運転させ、わざと、エンジン不調にして黒煙をあげて走らせることも出来る筈です。十二時五十八分に走らせ、その前で写真を撮れば、これと同じものが出来ますよ」

南原がいうと、藤本刑事は笑って、

「私だって、そのくらいのことは考えたよ。そして調べてみた。だが違うね」

「どうして、違うとわかりました？」

「K駅前の広場で、車がエンジン不整備で捕まったのは、七月三十日だけなんだよ。駅前の派出所の警官もそういっていたし、この辺りの商店で聞いても、同じ返事だった。他の日に細工して、同じ型の車に黒煙をあげさせたら、すぐわかってしまう筈だ。だから、この写真は、七月三十日以外に撮ったものじゃないんだ」

「じゃあ、橋本のアリバイは、完全だというわけですか？」
「そうだが、ただ――」
「ただ、何です？」
「この写真のネガが欲しいといったら、失くしてしまったというんだよ」

14

南原の眼がキラリと光った。
「ネガを失くしたといったんですか」
「そうだよ。なんでも、橋本は、林可奈子をつれて、一泊二日の旅行をしたそうだ。そして、五本ばかり写真を撮ったが、肝心のこの写真がとれているネガだけ紛失してしまったといっているんだ」
「他の写真も見せて貰いましたか？」
「ああ、見せて貰ったよ。彼女が温泉に入っているヌード写真もあったよ」
「カラー写真はなかったですか？」
「全部、白黒だったね」

「おかしいですね。レジャー写真といえば、誰でもカラー写真にするものですが」
「それも聞いてみたさ。橋本の答はこうだ。カラーは、まだ完全じゃないから嫌いだというんだよ。映画監督でも、白黒が一番すばらしいといっている人がいるともいっていたね」
と、藤本刑事は、苦笑してから、
「君は、写真家だから聞くんだが、それがトリック写真だと思うかね？」
「さあ、今のところは、何ともいえません。ネガでもあればわかるかもしれませんが、それがないとなると」
「しかし、ネガがないということは、細工した可能性も出てくるわけだろう？」
「その通りです。肝心の写真だけ、ネガを失くしたというのは、どう考えてもおかしいですよ。ですから、この写真には、細工がしてあるに違いありません」
「しかし、トリックでこういう写真が出来ることが証明されないと、ネガはなくとも、この写真で、立派に橋本のアリバイが成立してしまうんだがね」
「きっと、トリック写真だと思います」
「あれじゃないのかね。先に人物だけ撮っておいて、あとで、ライトバンの写真にはめこむというやつだが」
「ああ、二重露出ですか」と、南原は、うなずいた。

「僕も、まっ先にそれを考えましたよ。一番ありふれた方法ですからね。最初に、レンズの半分か三分の一ぐらいを黒い紙でかくしておいて、シャッターを押す。それには、人物を写しておくわけです。次に、黒紙を反対側に移し、前にかくしておいた部分に、ライトバンを写す。これが、刑事さんのいう方法です。中心線をしっかり確認しておき、左右のズレがないようにするのと、左右の露出を一致させることにさえ気をつければ、案外簡単に出来あがります」

「では、その方法で撮った写真だと思うかね？」

「残念ながら違いますね。問題のライトバンと、橋本との間が空いていれば、二重露出のトリック写真だと思いますが、ライトバンは、橋本の背後を走っています。重なって写っている。二重露出では、こういう写真は出来ません。車は動いているんですから。それに、二重露出で、上手く写真が出来あがっていれば、ネガを平気で見せる筈です」

「すると、アリバイは完全か？」

「いや。僕は、橋本が犯人だと信じていますし、そうである以上、これは、トリック写真です。僕が、必ず、トリックの方法を見つけてみせます。あと二日待って下さい」

「そうだな。いいだろう」

「その二日間に、あなたに調べて頂きたいことがあります」

「何だね？」

「K駅前でエンジン不調で捕まったライトバンの運転手の身元です」
「その運転手が、橋本と関係があるかどうかということだろう。わかった。調べておこう」
と、藤本刑事は約束し、先に、喫茶店を出て行った。
南原は、問題の写真を持って、自分の車に戻ると、恋人の江口朱子のアパートに向けて走らせた。
朱子に会うと、南原は、「君に頼みがある」と、いった。
「古賀三造、堂本謙次、金子隆という三人の写真家を知っているだろう？」
「知ってるわ。三人とも大家ね」
朱子は、大きな眼で南原を見てうなずいた。
「カメラ・ジャパン賞の審査員だよ。君は、この三人のモデルになったことがあるかい？」
「ええ。あるわ」
「それなら都合がいい。この三人の中に、中央興業という中堅商社の社長橋本という人物と親しくつき合っている人がいる筈なんだ。三人の中の誰なのか調べて貰いたいんだ」
「橋本さんね」
「カメラいじりが好きな男だから、その線でつながっているんだと思う」
「大事なことなの？」

「殺人事件の解決がかかっている」
「へえ」
と、朱子は、大きな眼を一層大きくしてから、
「上手くやれたら、お願いがあるんだけど」
「何だい？」
「今度は、タヒチへあたしを一緒に連れてって欲しいの」

15

南原は、問題の写真を前に置いて考え込んだ。
田口編集長を殺したのは、間違いなく橋本だ。とすれば、この写真は、トリック写真なのだ。七月三十日の午後一時頃、伊豆のK駅前を、エンジン不調で、黒煙を吐き出しながらライトバンが走ったことは事実である。警察に逮捕されたのだから。
しかし、この写真は、その時に撮ったものではない。もし、そうなら、橋本のアリバイは成立するのだから。
とすれば、この写真は、別の日の十二時五十八分に撮ったものの筈である。しかし、一方、

七月三十日以外に、K駅前広場を、黒煙を吐き出して走ったライトバンはないともいう。

（すると、実際には、この写真に写っているライトバンは、黒煙を吐いてないのではあるまいか）

そして、印画紙に引き伸ばす段階で、いかにも、煙を吐き出して走っているように細工したのかもしれない。

問題は、そんな写真が作れるかどうかである。

南原は、アパートを出ると、大通りを走る車を写し、すぐ、それを現像した。

まず考えられることは、ネガに細工することである。

南原は、カミソリの刃を取り出し、その角で、ネガを細かくこすってみた。ネガの膜を削りとると、印画紙に露光させたとき、そこが黒く感光して黒煙のように見えるからである。

こうして、キャビネ判に引き伸ばしてみた。なんとか、車から黒煙が出ているようには見えるが、じっと見ると、バレてしまうのだ。問題の写真のように上手くはいかなかった。

次は、印画紙に、筆で、黒煙を書き込む方法である。この方が、カミソリでネガをこするのよりも上手くいったが、これも、よく見れば、描き込んだことがわかってしまうのだ。

問題の写真は、この二つの方法で作られたものではなさそうである。

写真のトリックがわからない中に、藤本刑事から先に電話が入った。

「どうやら、君の考えが正しかったらしい。例のライトバンを運転していた男は、中央興業の橋本社長と関係があるようだ」
「どんな関係ですか？」
「運転手の名前は、伊豆K市の鈴木直治という三十二歳の男でね。鈴木物産という会社を経営している。一応、有限会社になっているが、従業員五名という小さな会社だ。興味があるのは、この鈴木物産が、中央興業と取引きがあることだよ」
「いわば、下請けというわけですね」
「その通りだ。下請けの社長なら、親会社の社長のいうことは、たいてい聞くだろうと思うね」
「それで、鈴木直治という男は、橋本に頼まれて、七月三十日にK駅前でライトバンを走らせたことを認めましたか？」
「それが、この男は、今、家族と一緒にハワイに行っていて、あと三日しなければ帰って来ないんだ。君の方はどうだね？　写真のトリックはわかったかね？」
「残念ながら、まだです。しかし、橋本が犯人である以上、あの写真はトリッキイなものであるに決っています。必ず、どんなトリックで撮られたのか解明してみせますよ」
「頼むよ。私のこの手で殺人犯人を逮捕したいからね」

藤本刑事が電話を切ってから二時間ほどして、今度は、朱子から電話が入った。彼女の若い声は、はずんでいた。

「見つけたわ。金子先生よ」

「僕のいったことを認めたのか？」

「ええ。でも、別に悪いことをしたとは思ってないみたいよ。たまたま、当選作に知り合いの人間が写っていたんで知らせたんだっていってるわ」

「金子さんと橋本との関係は、どんなものなんだ？」

「東京カメラ愛好会というのがあるんですって。カメラ好きが集っている会だそうよ。橋本さんは、その会の会長で、金子先生は、その会の顧問だそうよ」

「なるほどね。ところで、金子さんは、自分の選んだ組写真の一枚がすり変っていることに気がつかなかったのかな？『カメラ・ジャパン』の八月号を見れば、わかったと思うんだがね。自分の知り合いが写っていた写真がなくなったんだから」

「それが、八月号が出た時、ヨーロッパに行ってたんですって。あたしの話を聞いて、八月号を見て、びっくりしてたわ。のんきなお爺さんよ」

朱子は、電話の向うでクスクス笑った。その楽しげな笑い方が、南原を励ましてくれた。

彼は、朱子に礼をいって電話を切ると、また、トリック写真の謎解きに取りかかった。

合成写真だろうか？

南原は、こんな話を聞いたことがあった。

新米の新聞記者が、ぜがひでも、特ダネをものにしようと、毎日走り廻っていた。だが、事件の現場には、いつも遅れて着いてしまう。あるビルの火事の時にも、彼が駆けつけた時は、すでに火は消えてしまっていた。それで彼は、焼ける前のそのビルの写真に、煙の写真をくっつけて、煙が出たとたんの記事を書いたという話である。ずい分昔の話だが、それと同じことを、橋本はやったのではあるまいか。

南原は試してみた。

走る車だけを撮った写真と、黒煙だけを撮った写真とを合成するのである。

前の二つの方法よりも、自然に見える写真が出来た。しかし、やはり、合成写真らしい境目が出来てしまうのだ。ぱっと見たのではわからないが、仔細に見ると、合成写真特有の不自然さがわかってしまうのである。問題の写真は、合成写真でもないのだ。

16

藤本刑事と約束した時間ぎりぎりになって、南原は、ようやく、彼の方から電話をかけるこ

とができた。
「どうにか、あの写真のトリックがわかりました」
と、南原は、電話でいった。
「どうやって撮ったのか、説明してくれないか」
「言葉で説明するよりも、こちらに来て下さい。具体的にお見せしますよ」
南原の言葉に、藤本刑事が、彼のアパートに飛んで来た。
「まず、これを見て下さい」
南原は、一枚の写真を藤本刑事に見せた。
キャビネ判の写真で、黒煙を吐き出しながら走っている車が写っている。
「そして、これが、そのネガです」
と、南原は、その写真の横に、白黒のネガを置いた。
藤本刑事は、ネガを眼の前にかざして眺めていたが、「ほう」と、声を出した。
「ネガの方には、煙が出てないね」
「橋本が撮った写真にも、煙は写っていなかったと思いますよ。橋本は、まず、七月三十日の午後一時頃、鈴木直治に頼んで、エンジン不調で黒煙を吐き出しているライトバンを、K駅前に走らせたんです。そんな車が走れば、嫌でも眼につくし、排ガス規制のやかましい時だから、

警察は逮捕するに決っている。そうやって、七月三十日の午後一時頃、伊豆のK駅広場を、黒煙を吐いたライトバンが走ったという実績を作る一方、同じ時刻に、橋本は、多摩川の川原で、田口さんを刺し殺したんです。田口さんは、友人の弟が去年九月二十七日の殺人事件の犯人として逮捕され、裁判にかけられようとしているのを、何とかして、助けようとしていたんです。だから、橋本が、その件で話があるといえば、どこへでも、ついて行ったと思いますね」

「そうだな。話しながら、油断を見すまして、背中から刺したんだ」

「橋本は、そのあと、別の日に、林可奈子を連れて伊豆のK駅に行き、同じ午後一時頃、写真を撮ったのです。七月三十日と同じように、鈴木直治に頼んで、ライトバンを走らさせ、それがバックに入るように立ってですよ。違っているのは、鈴木直治の運転するライトバンが、七月三十日とは違って、煙を吐き出していなかったことだけです。僕の撮った、その写真と同じようにですよ。同じライトバンが、二度、同じ場所を走ったことなど、誰も覚えていないでしょう。二度目のときは、ただ走っただけですからね」

「早く、写真のトリックを教えてくれないかね」

藤本刑事が南原をせかせた。

「いいですとも」と、南原はいった。

「合成写真かもしれないし、印画紙にあとから筆で書き加えたのかもしれないし、或は、ネガ

を引っかいたのかもしれないと、いろいろと考えてみましたよ。試してもみました。だが、全部違っていました。橋本の写真のようにはならないんです。そして、悩んだ末やっと見つけました。ひどく簡単な方法ですが効果的です。実験をして見せますから、現像室へ来て下さい」

南原は、走る車を写しただけのネガを持ち、藤本刑事を四畳半の現像室へ案内した。

「道具は懐中電灯だけです」

と、暗がりの中で、南原は説明した。

「この懐中電灯を、黒い紙で包み、光が洩れないようにします。そして、黒い紙には、針で穴を一つだけあけておきます。そうしておいて、スイッチを入れると、細い光が飛び出すわけです」

「それを何に使うのかね？」

「筆ですよ。光の筆です」

と、南原は微笑してから、印画紙を取り出した。

「最初、普通の場合と同じく、このネガを印画紙に露光し、現像液に入れます」

南原は、露光した印画紙を、しゃべりながら現像液に入れた。

「普通の場合なら、このまま、完全に絵が出るまで待つんですが、今度の場合は、絵が少し出てきたところで、現像液から出して、水に浸すのです」

「そんなことをしたら、現像が停止してしまうだろう？」
「そのためにやるんです。現像を止めると、ぼんやりですが、車のりんかくはわかります。見て下さい。こうしておいて、この光の筆を使うんです。車の尻っ尾のところから、光を当てて流し、もう一度現像する。ご覧なさい、光を当てた部分が黒くなって、黒煙に見えるでしょう。懐中電灯を近づければ黒煙は濃くなるし、遠ざければ薄くなり、自由自在です。橋本は、この方法で、アリバイ用のトリック写真を作ったに間違いありません」
南原が明りをつけると、じっと腕組みをして、彼の説明を聞いていた藤本刑事が、
「これで、田口編集長殺しの犯人として、橋本を逮捕できる」
と、ほっとした顔でいった。
「同時に、彼は、去年の九月二十七日に、向島で女を殺した犯人だということも忘れないで下さい。無実の若い男が、もうじき、有罪判決を受けるかもしれないんですから」
と、南原は、いいそえた。
翌日遅く、藤本刑事の方から南原のところへ、事件の報告に来てくれた。
「橋本は、観念して全て話したよ。君のいった通り、事件の始まりは去年だった。橋本は、それまでつき合っていた小城泰子と別れようと考えた。理由は簡単だ。新しい女が出来たからだ。そうだ。林可奈子だよ。橋本としては、向島のマンションをやれば、小城泰子は簡単に別れて

くれるだろうと、タカをくくっていたらしい。しかし、女の方は法外な手切金を要求して、嫌だといえば、橋本が脱税したことをバクロすると脅かしたんだよ。それで、橋本は、彼女を殺してしまった。林可奈子にアリバイを証言させてね。ところが殺した帰りを、君に写されてしまったんだ」

「橋本は、僕に写されたのを気がつかなかったんですか？」

「逃げるのに夢中で、気がつかなかったといっていたよ。事件は、三根春彦という若いサラリーマンが逮捕され、橋本は、首尾よく容疑圏外に逃げてしまった。一方、何も知らん君は、撮った写真を、カメラ・ジャパン賞に応募した」

「そして、今年になってから金子隆に、君が写っていると知らされて、橋本はびっくりして、写真をすり変えたんですね？」

「そうだ。小城泰子殺しの裁判が始まったので、念のために君を南太平洋に追い払っておいたともいっていたよ」

「田口編集長は、なぜ、橋本の存在に気がついたんですか？　気がつかなければ、殺されずにすんだのに」

「君も知ってのように、彼は、北海道の友人から、弟の三根春彦を助けてくれと頼まれた。小城泰子殺しの事件で、三根春彦が犯人でなければ、残るのは、橋本一人なんだ。そして、田口

編集長は、橋本が犯人なら、九月二十七日の午後四時頃、白鬚橋附近にいたに違いないとも考えた。ここまで来れば、いやでも、すり変えられた君の写真のことが頭に浮ぶ筈だ。その写真は、白鬚橋を九月二十七日の午後四時に撮ったものなんだからね。それで、田口編集長は、橋本に電話をかけてきたそうだ。去年の九月二十七日の午後四時に、白鬚橋を渡っている君を見たとね。橋本が、田口編集長を殺す気になったのは、そのためだ」

「例の写真のトリックは、僕が考えた通りでしたか？」

「ああ。私が、君のいった懐中電灯の話をしたら、橋本は、ニヤッと笑って、よくわかりましたねといったものさ。鈴木直治にライトバンを運転してくれと頼んだことも認めたよ」

「林可奈子は、全てを知って橋本に協力していたんですか？」

「ああ。そうだ。あんなに若くて美しいのに、女は怖いね」

藤本刑事は、肩をすくめていい、帰りかけたが、また、南原をふり返って、

「橋本が、君のことを、妙な男だといっていたぞ」

「なぜですか？」

「百万円も口止料をやったのに、それを送り返した上に、事件をほじくり返したからだとさ」

一九七五年七月「カメラ毎日」

アクシデンタル・ジャイブ

○アクシデンタル・ジャイブ（Accidental gybe）とは、
ヨットの急激で危険な方向転換のことをいう。

1

大島をスタートして四時間、水平線に夏の太陽が昇り始めたが、その頃になって、やっと風が吹きだした。

南西の風で、風速は約十五メートル。ほとんど横から吹いてくる風だが、微風にうんざりしていた私たちは、とたんに元気を取り戻した。うねりも強くなり、キャビンの丸窓が、時々水族館に早変りするようになったが、私たちには、風よもっと強くなれ、だった。船齢六年のわれらのポンコツヨット「ダックスフント号」も、ムチの入った競走馬みたいに走り出した。

艇長（スキッパー）の横山は、さっきまでレースを諦めたような顔をしていたのに、急に生き生きした眼になり、「行こうぜ、ベイビイ」と大声で叫んだ。「行こうぜ、ベイビイ」というのは、横山の気分のいい時の口癖だった。

スキッパーなどというと、スマートな若者が想像されそうだが、横山という男は、ずんぐりむっくりした身体つきで、おまけにまっ黒な顔をしている。スマートさとはおよそ無縁な男である。だから、クルーの私たちも、彼をスキッパーと呼ぶことはあまりない。たいていは「漁労長」だ。この漁労長は魚が嫌いだった。変な漁労長だ。

もっとも、漁労長の横山を入れて私たち四人の仲間は、誰も彼もスマートとはいえなかった。売れそうもない海の絵ばかり描いている画家の鈴木。彼はもう四十歳で、頭はだいぶ禿げてきている。海がおれの恋人だといって、いまだに独身でいる変な男である。

銀行員の田中だって、まるで銀行員に見えない。二十五歳と四人の中で一番若く、ゴツゴツした顔で、がに股である。こんな男が銀行の窓口に坐っていたら客が逃げ出してしまうかもしれない。幸い外廻りをやっているが、一年二週間の有給休暇は全てヨットの上で過ごしている。

そして私。私の職業は一応フリーのカメラマンとなっているが、カメラを構えている時より「ダックスフント号」に乗っている時の方が生き甲斐を感じる。

私たち四人は、職業も性格も違うが、海とヨットが好きという点で一致していた。この「ダックスフント号」も、四人で金を出して買った。木製の不恰好な艇で、頑丈さだけが取り柄みたいな艇だが、私たちは、ヨットは丈夫で安全性第一という信条を持っていたから、十分満足していた。

毎年七月十六日に、大島、葉山間で行なわれる外洋艇Vクラス（一二～一六フィート）のこのレースに、私たちはこれで五度目の参加だった。

最初は、五、六隻が参加する小さなレースだったが、ヨットブームを反映して年々規模が大きくなり、今年はとうとう「全日本ヨットレース」という大袈裟な名称がついてしまった。参

加艇も三十隻を越えている。

年々レースが盛んになるのは、私たちも嬉しかったが、その半面、勝つために手段を選ばぬ風潮が出て来たのは、困ったものだとも思っていた。

例えば、早く走るためには艇を軽くしなければということで、補助機関（エンジン）を積まずに参加したクルーもある。積まなければいけないという規則はないが、万一を考えれば、積むのがヨットマンとしての常識である。この艇は運悪く無風地帯に入り込んでしまい、他の艇に引っ張って貰って、やっと帰港するという醜態を演じてしまった。

補助機関（エンジン）を積まないなどというのは、まだいい方で、少しでも艇を軽くしようと、ライフ・ジャケットを積まずにレースに出た艇さえある。

また、三人以上のグループが乗らなければならないという規則があるのだが、三人いればいいのだろうと、その中の一人を小学生にして重量軽減をはかった艇もある。

木製のヨットが減って軽いＦＲＰ（強化プラスチック）の艇が増えたのも、最近の傾向だった。風が弱いと、どうしても軽くスマートなＦＲＰ製のヨットの方が有利だった。

この日も、夜十二時ジャストに大島をスタートしてから暫くの間微風が続き、重い木製の「ダックスフント号」は、次々に他の艇に抜かれてしまった。

だが、風が強くなれば話は別だった。横風（アビーム）となれば猶更である。軽くスマートな艇は、どう

しても風下に流されてしまうし、うねりに押されてしまうからである。

私たちは、他の艇をゴボウ抜きにしていった。軽い艇は、私たちの予想どおり、風に流されて、ゴールの葉山マリーナーへ艇を向けるのに苦心惨憺していた。

いつの間にか、私たちは二位にまで上っていた。先頭を切っているのは、確か、「アサカゼⅠ世号」だった。「朝風ヨット製作所」が発表した新造艇である。FRP製で、乗っているクルーも、レース経験豊かなベテランばかりと聞いている。

「アサカゼⅠ世号」の姿はまだ見えない。が、強風がこのまま続けば、ゴールの葉山までの間に追いつける自信が、私たちにはあった。

真夏のギラギラする太陽が高く昇った。海も空も真っ青だ。艇が波頭に突っ込むたびに、しぶきがまともにぶつかってくる。キャビンの中の炊事道具や釣具が棚から転がり落ちてくる。だが、みんなニコニコ笑っていた。爽快だった。

「もうすぐ追いつくぞ」

と、スキッパーの横山が、ご機嫌な顔でいったとき、鈴木が、

「あッ」と、

大声をあげた。

「人間だッ。人が浮んでるぞッ」

2

彼の指さす方向に、私たちはいっせいに眼をやった。

波間に、黒い人間の頭が見え、手を振っているのが見えた。が、次の瞬間には、波間にかくれてしまった。周囲に、後続艇の姿はなかった。この強風でバラバラに散らばってしまったのだろう。

スキッパーの決断は早かった。横山が「助けよう」といったとき、私たちはすぐ賛成した。レースより人命だ。

急激な方向転換（タッキング）に、ポンコツの船体が悲鳴をあげ、帆（セール）があやうく海面に触れるくらいまで傾く。私たちは、足をふんばり、身体を海に投げ出してバランスをとる。背中をしぶきが洗う。冷たくはないが一寸痛い。

艇の姿勢をたて直すと、私たちは、必死で人の姿を探した。波が邪魔をして、なかなか見つからない。それに、帆走（セーリング）ではどうしても小刻みな走り方はできない。だが、補助機関（エンジン）を使えば、それはレース失格を意味している。

スキッパーが決断に迷っているのを見て、私は、「レースはもうやめようじゃないか」と、

いってやった。鈴木と田中も、同意だというようにうなずいた。

横山は、ニヤッと笑って、「O・K」と怒鳴った。

「ポールを外せ。エンジンをかけろッ」

それから暫くして、やっと、波間に漂っている人間を見つけることができた。

三十歳くらいの男だった。ライフ・ジャケットをつけていたが、ぐったりしていて、艇を近づけても泳ぎ寄る気力は失ってしまっているように見えた。私たちの中で、水泳の一番上手い田中が、海に飛び込んで、その男を艇に引き揚げた。

男は意識を失っていた。どこの誰で、何故、あんなところに流されていたのかもわからなかった。とにかく狭いキャビンに寝かせて、毛布でくるんでやった。

あとは、男を一刻も早く病院へ運ぶことだった。

「ここからなら、葉山より伊豆半島の下田の方が近い」

と、スキッパーの横山がいった。

「だから、下田へ行くぞ」

今度も、誰も反対しなかった。私は、勝てそうだったレースを棄権するのは残念だったが、私がスキッパーだとしても、横山と同じことを考えたろう。海が好きな人間なら、誰だって、レースより人間を助ける道を選ぶだろう。それに、レースは来年だってあるのだ。

下田に入ると、私たちは、すぐ男を病院に運び、それから、「ダックスフント号」を、葉山マリーナーへ向けた。

夕暮になって、やっと葉山マリーナーに入ったが、勿論、他の艇はとっくに片付けられていて、クルーの姿もなかった。ポツンと一隻だけで入港というのは、変に寂しいものである。

「一杯やろうか？」

と、スキッパーの横山が誘い、私たちは一も二もなく賛成した。

クラブハウスのバーで、私たちは、ビールで自分たちだけのひそかな乾杯をした。人命救助成功の乾杯でもあり、もし、あのまま走っていたら、「アサカゼⅠ世号」を押さえて優勝していたであろうことへの乾杯でもあった。

「本日のわがクルーの働きは、海の男の模範である」

と、スキッパーが、おどけていったとき、

「やけ酒かね？」

と、私たちは、声をかけられた。

「亀の子号」のスキッパーの白石さんだった。白石さんの「亀の子号」は、クラスVレースの常連で、同時に、名物クルーでもあった。白石さんは、この近くの病院の院長で年齢は五十六歳。クルーもみんな医者で平均年齢五十歳だった。「亀の子号」は、いつもドン尻を走ってい

たが、白石さんたちは結構楽しそうである。

白石さんも、私たちのテーブルに加わってビールを注文した。

「ずい分遅いフィニッシュだねえ」

と、白石さんは、不思議そうに私たちの顔を見廻した。

「君たちのダックスフント号は、だいぶ調子がいいように見たんだがねえ」

「途中までは、調子がよかったんですがねえ」

鈴木が、あいまいないい方をした。彼が、わざと人命救助のことを口にしなかった気持は、私にもわかった。何か人助けをひけらかすようで嫌なのだ。私が答えるにしても、同じようなあいまいないい方をしただろう。

「そうすると、途中で人魚（マーメイド）にでも会って、一緒に遊んでいたというわけかね」

白石さんは、下手な冗談をいって、クスクス笑った。

「それで、結局、どの艇が優勝したんですか？」

私がきくと、白石さんは、パイプを取り出して火をつけてから、

「新艇のアサカゼⅠ世号だよ。あの艇は、よく走る。勿論、ドン尻は、わたしの亀の子号さ」

と、笑った。

「やっぱり、アサカゼⅠ世号ですか」

スキッパーの横山が、一寸残念そうな顔をした。私も残念な気がした。優勝のチャンスだったからだが、クラブハウスを出る頃には、そんな感情は消えていた。

私たちは、来週、三宅島までのクルージングを約束して別れた。

3

一週間、私は、本業のカメラマンの仕事に精を出した。

新聞には、「全日本ヨットレースにアサカゼI世号優勝」の記事は載ったが、私たちが助けた男のことは、一行も載らなかった。勿論、私たちの行動を書き立ててもらいたいわけではなかったが、どの新聞も触れていないのが、少し変な気もした。あの男が、助けられたことを話せば、記事になっている筈だからである。だが、このことは、すぐ忘れてしまった。

一週間後の七月二十三日に、私は、カメラと釣竿をかついで、葉山マリーナーに出かけた。快晴で、カンカン照りの天気だった。約束の午前十一時より十分も前に着いたのだが、スキッパーの横山も、銀行員の田中も、もう来ていた。みんな海へ出るというと、ニコニコして、約束の時間より必ず早く集ってくる。画家の鈴木だけがまだ顔を見せていないが、十一時までには現われるだろう。珍しく絵に買い手がついた時でさえ、その買い手を放ったらかして、葉

山マリーナーに駈けつけてきた男なのである。

私たちは、三人で艇を水におろした。が、まだ、鈴木は現われない。私たちは、少しずつ気になってきた。

十一時半になると、横山が、電話をかけてみようと、クラブハウスへ駈け込んで行った。すぐ出て来たが、頭を小さく横にふっている。

「アパートの管理人が電話に出たんだが、鈴木はいないというんだ」

と、横山は、私たちにいった。

「じゃあ、こっちへ向ってる途中なんだろう」

田中がいうと、横山は、また頭をふって、

「それならいいんだが、三日前に外出したまま戻っていないというんだ」

「行先は？」

「管理人の言葉だと、カンバスをぶら下げて出かけたそうだ」

「じゃあ、何処かの海を描きに行ったんだ。だが、今日のことは知っているのに、何故、切り上げて、ここへ来ないんだろう？」

私が疑問を提出すると、スキッパーの横山も、田中も考え込んでしまった。

「行った先の海が、よっぽど気に入っちまったんだろう」

と、横山はいったが、自分でも説得力がないとわかったとみえて、頭をかいた。鈴木は、海を描くのが好きな画家だが、それ以上に、ヨットで帆走（セーリング）するのが好きな男であることは、みんな知っていたからである。

とにかく、午後になっても、鈴木は現われなかった。それでも、私たちは、予定どおり、三宅島に向って出発した。

快晴で、風力は五。海は穏やかだった。レースならもう少し風力が欲しいが、のんびりと帆走（セーリング）を楽しむには、絶好の気象だった。

葉山と大島の中間あたりまで進んだとき、私たちは、期せずして一斉に、男が漂っていたあたりの海面に眼をやった。

「あの男は、一体、どうしてあんなところを流されていたのかなあ」

と、田中が自問自答みたいな調子でいった。

「大島航路の汽船から落ちたんじゃないのかな？」

スキッパーの横山がいう。「違うな」と、私がいった。

「乗客がライフ・ジャケットをつけて甲板を歩いている筈がないぜ」

「じゃあトローリング中に落ちたのかな。あれはライフ・ジャケットをつけて釣るんだろう？」

「そうだが、もし、トローリング中に落ちたんなら、どうしてその船が助けようとしなかった

んだ？」

「大方、落ちたのに気がつかなかったんだろう」

横山が、乱暴な結論の仕方をしたが、いった当人が、自分の言葉に疑問を感じているような顔をしていた。

夜半近くに大島の岡田港に着いた。港内に投錨（アンカーリング）し、三宅島への出発は明朝と決めて、私たちは上陸した。宿屋へ泊って鋭気を養うためだったが、上陸したとたんに、桟橋の近くで人が騒いでいるのにぶつかった。

小さな人垣ができていて、その中には、制服の巡査も混っている。横山と田中は、海とヨット以外のことは興味がないという顔で行き過ぎてしまったが、私は、カメラマンという職業意識が働いて、ひょいと、人垣の中に首を突っ込んだ。

薄ぼんやりした明りの下に、最初はムシロだけが見えた。

「何です？」

と、隣りにいた中年の男にきくと、漁船が、水死人を拾って来たのだという。拾った場所が、大島と下田の中間地点ときいて、とっさに、私は、一週間前に助けた男のことを思い浮べた。

巡査が、ムシロを持ち上げた。死体は、あの男ではなかった。もっと私の親しい人間だった。画家で、私たちの仲間の鈴木だった。

4

横山の顔色も、田中の顔色も変っていた。私たち三人は呆然として、鈴木の遺体を見下ろした。

遺体はライフ・ジャケットをつけていたが、そのライフ・ジャケットは、ところどころ裂けていた。無残だった。海しか描かなかったあいつが、今、眼の前に死体となって横たわっていることが、どうしても信じられなかった。

「何故、鈴木の奴は、ここで死んでいるんだ？」

横山が、ボソボソした声で呟いた。それは、疑問の調子というよりも、悲嘆の調子に近かった。

田中は黙っていたが、その陽焼けした頬に涙が流れていた。黙って泣いているのだ。

私も悲しかった。が、二人に比べて、いくらか疑惑が先行したのは、マスコミの世界に足を突っ込んでいるせいかもしれなかった。

私は、鈴木の遺体を運んできた漁船の船長に会って、見つけた時の事情をきいた。私は、水面に浮んでいるのを発見したのだろうと考えていたのだが、そうではなくて、網を入れたら、

魚と一緒に引っかかってきたという返事だった。裂けたライフ・ジャケットに水が入り、沈みかけていたのだろう。場所は、一週間前に私たちが男を助けた地点と殆ど同じだった。

何故、鈴木は、そんなところで死んでいたのだろうか。誰が、そこまで運んだのだろうか。疑問はいくらでも湧いて来たが、答は見つかりそうになかった。

三宅島行は、当然中止になった。私たちは、鈴木の遺体を受けとり、「ダックスフント号」に積んで、翌朝、葉山に向って出港した。

三人とも、昨夜は一睡もできず、まっ赤に充血した眼をしていた。

「アパートの管理人は、絵を描きに出かけたといったんだろう?」

私は、確認するように、スキッパーの横山にきいた。

海は相変らず穏やかだった。横山は、キャビンに横たえられた鈴木の遺体に眼をやった。

「カンバスを持って出かけたといったんだ」

「彼は海の絵しか描かない。何処(どこ)の海を描きに出かけたと思う?」

「そんなことがわかる筈がないだろう」

横山が、怒ったような声でいった。悲しみが、彼の気持を刺々(とげとげ)しくさせているようだった。

「君にはわかるのか?」

と、横から田中が、私にきいた。

「一つだけ心当りがある」
「何処だ？」
「下田だよ。さっきから考えていたんだが、一週間前のレースのとき、僕たちは、助けた男を下田へ運んだ。あの時、鈴木が、ここを描きたいなと、いってたじゃないか」
「そうだった」
スキッパーの横山が、大声をあげた。
「確かに、鈴木は、下田港の景色を描きたいといっていたな。だが、彼が下田へ絵を描きに行ったとしてだ、何故、ライフ・ジャケットをつけて死んでいたんだ？」
「僕にもわからんさ。だが、手がかりになりそうなことが一つある。僕たちは、昨日、大島への途中で、助けた男のことを考えた。何故あんなところを流されていたのだろうかとね。鈴木も、きっとその疑問を持っていたと思うんだ。下田に行った鈴木は、その疑問に対する答えを見つけようとしたのかもしれない」
「つまり、下田の病院に入院している男を訪ねたということか？」
「可能性はあると思う」
「よし、これから下田へ直行して、確かめてみよう」
横山は、スキッパーらしく決断した。

下田へつくと、私だけが艇をおり、横山と田中の二人は、鈴木の遺体を葉山マリーナーへ運ぶためにすぐ出港した。

下田の街には、夕暮が近づいていた。私はまっ直ぐに病院へ足を運んだ。受付にいた看護婦は、私の顔を覚えていた。

「あの病人なら、もう退院されましたよ」

と、彼女は、私の質問に答えた。病院では、退院する時、住所と名前を聞いたが、それに対して、男は、東京池袋に住む会社員で、小川礼一（おがわれいいち）と名乗ったという。私は、その時、男が書いたメモを見せてもらった。会社の名前は、同じ池袋の城北観光株式会社となっている。

「それで、退院する前に、僕の仲間が見舞いに来ませんでしたか？　画家で鈴木という名前ですが」

私は、一番大事なことをきいた。私が、鈴木の顔立ちを説明すると、看護婦は大きく肯いて、

「確かにお見えになりました。丁度、小川さんが退院なさった日です。四日前の夕方でしたわ」

「それで、二人はどうしました？」

「小川さんは、しきりにお礼をおっしゃっていましたわ。それから、お二人揃って、病院を出て行かれたんですけど」

「二人揃ってですか――」
「ええ。ああ、小川さんが、これからお礼に一杯つき合ってくれませんかと、笑いながら誘っていたのを覚えています」
「あの男は、何故溺れかけたか、話していませんでしたか？」
「いいえ。連れていらっしゃった皆さんがよくご存じだと思って、わたしの方からは、別にお聞きしませんでしたけど」
　看護婦は、不審そうに私を見上げた。確かに、連れて来た私たちが知っていると考えるのが当然だった。私は、質問を変えた。
「ここの支払いはどうなっています？」
「今日、支払って頂きました」
「誰が払ったんです？」
「小川さんが、現金書留で送って来られたんです」
「その書留の住所は、このメモの住所と同じですか」
「ええ」
　看護婦から聞けたのはそれだけだった。
　私は、病院を出た。鈴木は、あの男と一緒に病院を出たという。本当に一杯つき合ったのだ

ろうか？　鈴木の人の好い笑顔が、ちらついて離れない。海とヨットと酒を愛していた鈴木。いい奴だった。酔っ払うと、必ず、

「妻をめとらば才たけて――」と唄った。下手くそな歌だったが、もう一度聞きたかった――。

私は、葉山へ向った。警察なら、下田の旅館や料理屋、バーをしらみ潰しに調べてみるだろうが、私一人でそんなことの出来る筈がなかったからである。

葉山マリーナーには、「ダックスフント号」が、私を待っていた。スキッパーの横山と田中は、キャビンで私を待っていたが、鈴木の遺体は、既に火葬され、小さな骨壺に納ってしまっていた。

「人間一人が灰になるのは簡単だ」

田中が、ボソッといった。

骨壺の前には、鈴木が身につけていたものが置いてあった。その中には、裂けたライフ・ジャケットもある。裂け方は、まるでナイフで切ったみたいにみえる。

「警察には一応話したんだが、調査する気配はないよ。殺されたという証拠がないんだから当然だが」

と、スキッパーの横山は、重い調子でいった。漁労長のこれほど暗い顔を見るのは初めてだった。

私は、下田の病院で聞いたことを二人に話した。
その結果、明日、池袋に行き、小川礼一に会って鈴木のことを聞いてみることにして、私たちは、その夜、鈴木のためにキャビンで通夜をした。火葬の後の通夜というのは変則だが、鈴木は許してくれるだろう。
私たちは、酒好きだった鈴木のために、グラスをあけ、あの歌を合唱した。
妻をめとらば才たけて
顔うるはしく情あり
……（与謝野鉄幹『人を恋ふる歌』）
「そんな歌が好きだと、お年が知れますとからかったことがあったっけなあ」
漁労長が、かすれた声でいい、ふいに、
「畜生ッ」と、怒鳴った。

5

翌朝、スキッパーの横山だけが、艇に残り、私と田中の二人が、池袋に出かけた。
「君は、その小川礼一という男が、鈴木を殺したとでも思っているのかい？」

途中の電車の中で、田中がきいた。
「殺したかどうかはわからないが、鈴木の死んだことに関係があることだけは確かだよ」
「だが、小川というのは、僕たちが助けてやった男だぜ」
「ああ。だが、鈴木が病院に行ったのは事実だし、小川礼一と一緒だったのも事実なんだ」
城北観光という会社は、実在した。が、その社員の中に、小川礼一という男はいないといわれた。
私と田中は、仕方なく、メモにあった住所に廻ってみた。メモには、「翠明荘」とアパートの名前が書いてあったが、そのアパートも実際にあった。だが、管理人は、小川礼一という男は住んでいないといった。
私は、男の人相を話してみた。「翠明荘」と、実在のアパートの名前を書いたことは、何等かの関係があるからだろうと考えたからである。私の予感は当った。管理人は、しばらく考えてから、
「それなら、小川じゃなくて、早川さんじゃないかな」
と、いった。
「その早川さんは、今もここに住んでるんですか？」
「いや。もう半年も前に引っ越しましたよ。行先は知りません」

「どんな男でした？」
「ひどく無口な人でしたねえ。船に乗る人って、みんなあんな風に無愛想なんですかねえ」
「船員だったんですか？」
「いや。そんなんじゃありません。職業じゃなくて、好きで乗ってるんだといってました。でも、ヒマさえあれば海へ出かけていましたよ。冬でもなんだから、よっぽど好きだったんですねえ」
「どんな船に乗っていたんですか？」
「何ていいましたっけ？　小さな船に帆をくっつけた西洋式の――」
「ヨットですか？」
田中が笑いながらきくと、管理人は、「それですよ」と、肯いた。
「ヨットって、そんなに面白いもんですかねえ」
「面白いですよ」
と、私はいった。が、礼をいってアパートを出てから、私と田中は、顔を見合せてしまった。田中の陽焼けした顔からも、笑いが消えてしまっていた。
いわゆる「潮っけ」のするヨットマンに悪人はいないという素朴な信条を私は持っていた。今まで、この信条が裏切られたことはなかった。スキッパーの横山も、銀行員の田中も、死ん

でしまった画家の鈴木も、みんないい奴だった。いい奴ということは、いつも和気あいあいとやっていたということではない。ヨットの上では、むしろ、喧嘩腰で怒鳴り合うことが多かった。

それは、海の上では、一人のヘマが全員の死につながるからである。「板子一枚下は地獄」という言葉は、ヨットマンの私たちには、今でも実感だった。だからこそ、私たちの間には、作りものではない本当の連帯感が生れているのだ。

早川というあの男がヨットマンだとすれば、私たちの仲間なのだ。そして、彼は、病院に訪ねて行った鈴木を同じヨットマンと知っていた筈である。ヨットマンがヨットマンを殺したと疑わなければならないのは、やり切れなかった。この気持は、普通の人にはわからないだろう。だが、ここで調査を打ち切るわけにもいかなかった。そんなことをしたら、今度は、鈴木の霊が浮ばれないだろう。

「とにかく、早川というあの男に会ってみることだな」

と、田中もいった。

ヨットマンなら、たいていは、日本ヨット協会に所属している筈である。私と田中は、協会のある東京渋谷の岸記念体育館に行き、会員の名簿を見せて貰った。

早川礼一という名前はのっていた。年齢の三十歳もだいたい想像したとおりだった。だが、

その名前には赤線が引かれ、備考欄には、「退会」というゴム印が押してあった。退会の日付は半年前になっていたし、そこに書かれた住所は、「翠明荘」というあのアパートだった。

私たちは念のために、早川の出した退会届を見せて貰ったが、それには、一身上の都合によりとしか書かれていなかった。

手繰っていった糸が、そこでプツンと切れてしまった感じだが、私たちは、さほど失望はしなかった。

一度ヨットの魅力にとりつかれた者は、絶対に離れられないものだ。それほど、ヨットは魅力がある。転覆して九死に一生を得た男が、二、三日すると、ケロリとした顔でヨットハーバーに現われるのを、私は何度となく見ている。

この早川礼一にしても、日本ヨット協会を退会しても、ヨットからは離れていない筈だ。それなら、探し出すのは、そう骨の折れる仕事ではない。ヨットマンの集る場所に行けば、何とか消息を聞けるだろう。

私たちは、その日の中に、葉山マリーナーに戻った。

スキッパーの横山は、鈴木の骨壺の前で、眠っていたが、起き上がると、ショボリとした眼で私と田中を見て、

「鈴木の奴、夢の中でも海の絵を描いてやがった」

と、いった。

翌朝、マリーナーの中のクラブハウスで朝食をとっていると、「亀の子号」のクルーが姿を見せた。スキッパーの白石さんに、「早川礼一というヨットマンを知りませんか？」と、私がきくと、「早川礼一ねえ」と、口の中で繰り返してから、

「何処かで、その名前を聞いたなあ」

と、白石さんはいった。

「何処でです？」

「一寸(ちょっと)待ってくれよ」

と、白石さんは、くびをかしげてから、急にニッコリして、「これだ、これだ」と、ポケットから一枚のパンフレットを取り出して、私たちの前に置いた。

「朝風ヨット製作所営業案内」と、大きな活字が並んでいた。そして、最後のところに、「わが社の専属クルー」とあって、四人の名前がのっていた。早川礼一は、四人の最後に書いてあった。

6

私を襲ったのは、発見の喜びよりも、驚愕だった。それも不快な驚きだった。スキッパーの横山も、田中も、同じ気持だったに違いない。その証拠に、横山は、むっつりした顔で、「艇へ戻ろう」と、私と田中にいった。

「ダックスフント号」に戻ると、横山は、

「すぐ出港だ」と、怒鳴った。

「何処へ？」

私がきくと、横山は、怒ったような顔で、

「決っているじゃないか。鈴木の死んでいた場所へ、奴の骨を沈めてやりに行くんだ」

「何故、急ぐんだ？」

「おれは今、ムカムカしてるんだ。だから、怒り出す前に、鈴木を海に戻してやりたいんだ」

「O・K」

と、私と田中は肯いた。

あの海面に着くまで、私たちは、殆ど口をきかなかった。

海は凪いでいた。横山が、白布に包まれた鈴木の骨壺を海面に落すと、それは、ゆっくりと揺れながら、青い海に消えて行った。

「さあ、もう怒っていいぞ」

横山が、顔を上げていった。私は、唇をかんだ。

「早川礼一は、七月十六日のレースで優勝した『アサカゼⅠ世号』のクルーだったんだ」

と、私は、吐き出すようにいった。

「もっとハッキリいえば、あの時、彼は、『アサカゼⅠ世号』に乗っていたんだ」

「そうさ」

横山は、肯いた。田中は、暗い眼で海面を見つめたまま、「そうすると――」と、呟くようにいった。

「早川礼一は、レースの途中で艇から落ちたということか。それなのに、あのクルーは、レースに勝ちたいために、彼を見捨てて、ゴールに走ったということか――」

「それならまだいいが、おれは、もっと卑劣なことを彼等がやったんじゃないかと思っているんだ」

と、横山が大きな声でいった。

「おれたちは、もう少しで、『アサカゼⅠ世号』を抜けそうだった。向こうでも知っていただろう。だが、あの風では、軽い奴等の艇がおれたちに抜かれるのは、時間の問題だった。奴等が勝つ道は一つしかなかった。それは、おれたちの『ダックスフント号』を、止めてしまうことだ」

「そのために、早川礼一が、自分で海に飛び込んだというのか？」

田中が、蒼ざめた顔できく。横山は、「ああ」と肯いた。

「本当のヨットマンなら、誰だって、レースを放棄して人を助ける。奴等は、それを利用したんだ。そんな卑劣な手を使ったからこそ、病院に会いに行った鈴木を、秘密を嗅ぎつけられたと思って、殺したんだ」

「しかし、そんなことまでして、何故、早川たちは、あのレースに勝ちたかったんだろう？僕には、それがわからんな。優勝しても、貰えるのはカップだけだし」

田中が、くびをかしげると、横山は、「おれにもわからんさ」と、怒ったような声でいった。私には、わからないというより、わかりたくないといっているように聞こえた。

だが、葉山マリーナーに戻り、クラブハウスでその日の夕刊を手にしたとき、いやおうなしに、私たちは、その理由を知らされた。

夕刊の一頁を使った全面広告に、「アサカゼⅠ世号」の写真が大きくのっていたからである。

アサカゼⅠ世号、全日本ヨットレースに堂々優勝

そして、朝風ヨット製作所は、同型艇を明日から市販する予定だとも書いてあった。

「商業主義か」

と、横山が、吐き捨てるようにいった。明日から市販ということは、既に大量の在庫があるということだろう。それは、あのレースの前に、既に大量生産に入っていたことも意味している。ヨットの場合、自動車以上に性能が売れゆきを左右する。レースでの優勝は、性能の良さの証明になる。こう考えれば、あのレースでの優勝は、市販を控えて、会社としては至上命令に近かったと考えられないこともない。

私は、「アサカゼⅠ世号」の写真に眼をやった。写真の説明には、「ゆうゆう大差でゴールインするアサカゼⅠ世号」とある。バックに葉山マリーナーが見え、艇の上では、三人のクルーが、笑顔で手をふっている。その三人の中に、勿論、早川礼一の顔はなかった。だが、大島をスタートする時、早川を入れて四人のクルーが乗っていたに違いない。

私たちは、茅ケ崎にある朝風ヨット製作所に押しかけることにした。

海岸沿いに作られた工場は、かなり大きかった。窓越しに工場の中をのぞくと、出来あがったFRP製のヨットが、ポールを外した姿でズラリと並んでいた。全部、「アサカゼⅠ世号」と同じタイプだった。

工場の入口には、物々しく「無用の者入るべからず」の立札が立っている。私たちは、その立札を横眼で睨んで、工場の横にある事務所に入って行った。

受付の女に、専属クルーの早川礼一に会いたいと告げると、相手は、警戒するように、私たちの顔をジロジロ眺め廻してから、

「クルーの人たちのことなら、江の島マリーナーへ行って下さい。ここじゃわかりません」

「江の島マリーナー？」

「向うで、新造艇のテストをしてるんです」

江の島マリーナーは、東京オリンピックのレースに使用されたところである。私たちは、茅ケ崎から江の島へ足を運んだ。

江の島の沖には、ヨットのセールが重なり合うようにひしめいていた。まるでラッシュ並みだが、眼のいい田中が、その中からアサカゼ型のヨットを見つけ出した。その艇は、小刻みにタッキングしながら、マリーナーに戻ってくるところだった。早川礼一への怒りは別にして、彼等の艇の繰作は、流石に見事だった。メイン・セールを下し、ジブ・セール（マストの前方にある小さな三角帆）だけでブイに近づき、簡単に着艇した。

「上手いもんだ」

と、横山が呟いた。

艇からおりて来たのは、三人だけで、その中に、レースの時に助けた早川礼一の顔はなかった。彼等は、私たちと同じように陽焼けして、逞しい身体つきをしていた。少くとも外見だけ

は立派なヨットマンだ。

「やあ」

と、スキッパーの横山が、彼等に声をかけた。

「早川さんに会いたいんだけど何処かな？」

「君たちは？」

彼等の中の一人が、鋭い眼で私たちを見廻して、きき返した。スキッパーをやっていた中年の男だった。横山が、小さく笑って、

「この間のレースで、溺れかけていた早川さんを助けた艇のクルーだよ」

「――――」

彼等は、黙って顔を見合せた。

「彼は何処にいるんだ？」

田中が、詰問する調子できいた。

「早川はいないよ」

さっきの男が、固い声でいった。

「かくしたのか？」

「かくす？　何故、おれたちが早川をかくさなきゃならない？」

「あのレースで、勝つために卑劣な真似をしたからさ。それに、おれたちの仲間の一人を殺した疑いもある」
「彼は死んだよ」
「死んだ？」
「三日前に、急に会社を辞めて郷里に帰ったんだが、今朝、自殺したという知らせがあったんだ。理由は知らん。生真面目な男だったから、ノイローゼかもしれない。嘘だと思うなら、電報を見せてやる」
「自殺か」
横山は、小さな溜息をついた。
「信じないのか？」
「いや、信じるさ。人間一人を殺せば、ノイローゼぐらいにはなるだろうからな。それで君たちは、早川礼一に罪を押しかぶせて知らん顔というわけか？」
「何のことかわからんな」
「勝つために、早川礼一に溺れる真似をさせたことさ。君たちが本当のヨットマンなら、あんなことは出来ない筈だ」
「おれたちは、全日本ヨットレースに勝った。知っているのはそれだけだ」

「勝てばいいというわけか？」

「そうだ。おれたちはプロだ。君たちみたいなアマチュアが、遊びで、ただ楽しんでいればいいのとはわけが違う。おれたちは、勝つために、会社から給料を貰っているんだ。文句があるなら、次のレースでおれたちに勝ってみろ。来週、この間と同じコースで、うちの会社主催のレースがある」

「よし。その挑戦を受けてやる」

スキッパーの横山が、怒鳴るようにいった。

7

その日は、朝から台風の前ぶれのような強い風が吹いていた。

スタート地点の大島の岡田港には、「アサカゼⅠ世号優勝記念レース」という麗々しい横幕が、風にはためいていた。

私たちには、「アサカゼⅠ世号」に勝てるという自信はなかった。唯一の頼みは、風の強さだけである。向い風なら一番有難いのだが、岡田港の近くは追い風のようだった。

スタート五分前の信号旗が上がると、各艇が、有利な位置を占めようといっせいに動き出す。

隣りに「亀の子号」がいて、スキッパーの白石さんが、いつもの屈託のない顔で、「今度は頑張れよッ」と怒鳴った。本当にレースを楽しんでいる白石さんたちのクルーが、先日のレースの真相を知ったら、頭を抱えてしまうだろう。だから、私たちも知らせる気はなく、横山が、「そっちも、たまにはビリから脱け出して下さい」と、いい返しただけだった。

スタートの号砲が鳴った。一隻だけが、号砲が鳴ったときスタートラインを越えてしまっていて、リコール（もう一度スタートライン後方に戻って、スタートをやり直す）が命ぜられたが、他の艇は、いっせいに葉山マリーナーに向けて走り出した。

「アサカゼⅠ世号」が、軽い艇の利点をきかせて飛び出し、他の艇がダンゴになってその後に続く。「亀の子号」は、相変らず、悠々とビリを走っている。

追い風（クオータリー）の時は、スピンネーカー（追い風を有効に利用するための袋状の帆）を張る。スピンネーカーは、さまざまな色がついているので、各艇がそれをあげると、急に花が咲いたようになる。スピンネーカーの用意がしてなかったり、あわてて海に落してしまったりした艇は、あッという間に後方に置き去りにされていく。

私たちも、フランス国旗みたいに、赤白青の三色に塗りわけたスピンネーカーをあげた。

「アサカゼⅠ世号」は、相変らず飛ばしている。豆粒に見えるほど引き離され、夜が明けかかる頃には、視界から消えてしまった。

「ダックスフント号」は、四位につけていたが、このままでいけば、勝ち目はなさそうだった。だが、葉山マリーナーまであと五キロのところまで来て、風が、追い風から横風（クオーターリー）（アビーム）に変り始めた。風速も増した。例によって、キャビンの丸窓はまた水族館に早変りだ。

他の艇が、次々にスピンネーカーをおろす。私たちもおろしたが、おろし終った時には二位に上っていた。

「追いつけるぞ」

と、横山が、威勢のいい声で叫んだ。「アサカゼⅠ世号」は、軽いだけに、横風に流される。その点、重い私たちの「ダックスフント号」は有利だ。

やがて、「アサカゼⅠ世号」の帆（セール）が見えてきた。メイン・セールをリーフ（セールを巻いて面積を小さくする）して、風下に流されるのを必死で防いでいるのがよく見えた。当然、スピードは鈍ってくる。私たちも、リーフしていたが、重い艇のため、それほどスピードは落ちない。

二艇の間隔が、みるみるうちに縮まっていき、相手のクルーの顔が見えるまでになった。私たちが、横に並んで抜こうとすると、「アサカゼⅠ世号」は、いきなり方向転換（タッキング）して、私たちの真ん前に入ってきた。上手い駈引きだった。風上の「アサカゼⅠ世号」が受けた風が、曲線を描いて風下にいる私たちの艇に流れてきて、セールがシバー（風でバタバタする）して

スピードが落ちるからである。私たちが、タッキングして、その風の流れの外に出ようとすると、「アサカゼⅠ世号」も、同じようにタッキングして、あくまで、「ダックスフント号」を風下に置こうとする。このままでは、「アサカゼⅠ世号」を抜くことができない。完全なホープレス・ポジションだ。

同じ駈引きが、二回、三回と繰り返された。が、「アサカゼⅠ世号」は、ガッチリと私たちの頭を押さえつけて、抜かせない。

「敵ながら天晴れだ」

と、横山が、苦笑した。

だが、私たちは、このまま最後まで押さえられ放しになるとは考えていなかった。

葉山沖に、定置網が入れてある場所があるからである。勿論、参加艇の全クルーに、定置網の場所は知らされている。だから、定置網の近くに来たら、きわどいレースの駈引きは出来なくなるし、葉山マリーナーを根拠地にしている私たちの方が、江の島マリーナーでトレーニングしている彼等よりも、網のかわし方を心得ているという自信があった。

しかし、「アサカゼⅠ世号」は、一向に駈引きをやめなかった。それどころか、規則違反になるような急激なタッキングをして、私たちの頭を押さえつけてくる。

「止めろッ」

と、スキッパーの横山が、「アサカゼⅠ世号」に向って怒鳴った。

「定置網に引っかけるぞッ」

だが、横山の声は、風に吹き飛ばされて聞こえなかったらしい。聞こえたとしても、これほど勝敗にこだわっていては、追い抜くための策略としか、彼等は考えなかったかもしれない。

ふいに、前方にいた「アサカゼⅠ世号」が横倒しになった。

「やったッ」

と、田中が叫んだ。定置網に引っかけたのだ。傾いて走っていたヨットは、ひとたまりもない。三人のクルーが、海に投げ出されるのが見えた。

「ダックスフント号」は、その横をすり抜けて、トップに立った。

私たちは、いっせいにふり向いた。「アサカゼⅠ世号」は、完全に転覆している。このクラスの艇では、小型艇のように、クルーの力で起こすことは難しい。

急に、横山が、苦しそうな顔つきになった。

トップに立ったスキッパーの顔ではなかった。まるで規則違反を犯して、失格させられた艇のスキッパーだ。

「この強風じゃあ、彼等は、遭難しちまうかもしれないなあ」

横山が、ボソボソした声でいった。彼は、「アサカゼⅠ世号」のクルーを助ける気になって

いるのだ。それで、私と田中の了解を、暗黙のうちに求めているのだ。それを察して私は、いってやった。

「ここに鈴木がいたら、きっと助けに向ったろうな。あいつは、気のいい男だったからなあ」

「それに、僕たちは、勝敗はどうでもいい、アマチュアだからね。アマチュアがプロを助けるのも面白いぜ」

と、田中も、私に調子を合せるようにいった。

スキッパーの横山が、ニヤッと笑った。

「タッキングだ。タッキングしたらポールを外せ。エンジンをかけろ」

それから、ひと声張り上げて、私と田中に向って怒鳴った。

「行こうぜ。ベイビイ」

一九七〇年九月「小説サンデー毎日」

神話の殺人

1

田辺が、『テレビ時代（エイジ）』という小雑誌を始めたのは、二年前である。社員、というよりも、仲間五人で始めたのだが、何度か廃刊の危機に見舞われながら、八方破れの批判精神が、現代に受けたのか、最近では、どうにか採算がとれるようになった。

田辺が、この雑誌をやってわかったのは、大衆が、多くの不満や疑問をテレビにもっているということだった。田辺は、それをとりあげて、徹底的に調べ、誌上に発表することにした。「神話への挑戦」という、いささかオーバーなタイトルをつけた投書欄は、編集長の田辺が担当した。テレビに映されるものは、事実と錯覚してしまう神話への挑戦のつもりであった。

勿論、投書の中には、グチに近い詰（つま）らないものもあったが、そうしたものでも、田辺は極力取りあげて調べ、回答することにしていた。

その日に、田辺が取りあげた匿名の投書は、最初読んだときには、大きな問題なのか、小さな問題なのか、わからなかった。

〈中央テレビ（ＣＨＴＶ）の四月二十三日午後八時放映の『日本一の変り者』について、疑問

があります。あの中に、女だてらに車引きをしていた人が出ていましたが、あれは、インチキです。あそこに出てきた早川八重子さんは、車引きなんかしたことのない人です。中央テレビには、抗議の手紙を送ったのですが、何の反応もありません。天下の公器が嘘の放送をしていいものでしょうか？　この件について、貴誌で、徹底的に調査して、告発して頂けませんか。

〈F県S市の一読者〉

田辺は、二度、読み返した。

最近、いくつかのテレビ局に、秘密を持った人間を登場させ、それをゲストに当てさせる番組が登場している。それが、かなりの視聴率をあげたというので、中央テレビでも、『日本一の変り者』というタイトルで、似たような番組を始めた。二番せんじというより四番せんじくらいだから、視聴率の方も、あんまり芳しくないようである。

だが、単純に数字だけを考えれば、視聴率五パーセントでも、五百万人が見たことになる。投書が事実なら、取りあげる価値はあった。

「誰か、四月二十三日の『日本一の変り者』を見たかい？」

と、田辺は、仲間に声をかけた。

「四月二十三日というと、火曜日だね。火曜日の夜だと、たいていSHテレビの『ビックリ人生』を見ちゃうなあ。『日本一の変り者』というのは、確か同じ時間帯だったよ」

と、鈴木がいった。

『ビックリ人生』も、同じ種類の番組だが、こちらの方が先輩で、視聴率も、はるかに高かった。

田辺も、残念ながら、四月二十三日の『日本一の変り者』は見ていなかった。

「誰かいないかね？」

と、田辺が、もう一度、きくと、一番年の若い渡辺が、

「おれ見たよ。前半だけだけどね」

と、いった。

「その中に、女だてらに車引きというのがあったかい？」

「ああ、あったよ。人力車を引く女が出て来たな」

「どんな女だった？」

「それが、若くて、なかなか美人でね。最初出て来たときは、タレントの卵みたいに見えたね」

「それで？」

「名前は忘れたが、F県のS市の二十四歳の女性でね」

「S市といえば、有名な温泉町だな？」

「そうなんだ。芸者もいるんで、以前は、何台も人力車があったが、今は一台だけになってしまった。その一台を引っぱっていた爺さんも、リューマチにかかってやめてしまったんだが、その若い女性が、人力車に興味を持って、爺さんに借りて、働いているというわけさ。高校時代に陸上競技をやっていたんで、何とか客を乗せて引っぱれるといっていたよ」

「それがインチキだという投書が来ているよ」

田辺は、手紙を渡辺に放り投げた。渡辺は、さっと眼を通してから、首をかしげて、

「インチキというのは、どういうことなのかな」

「君は、インチキには見えなかったかね？」

「人力車を引っぱるにしては、美人すぎるとは思ったがね。だが、彼女の働きぶりを写したフィルムも見せたからね」

「どんなフィルムだ？」

「どんなって、彼女が人力車を引っぱってるフィルムさ。芸者をちゃんと乗っけてね」

「ふーむ」

田辺は、難しい顔になった。投書が嘘だと思ったからではない。この投書者も、当然、四月二十三日の放送は見ている筈だと思ったからである。見た上で、なお、インチキだというのだろうか。

2

中央テレビは、新宿にある。『日本一の変り者』担当の松尾ディレクターに会ったが、田辺は、あまりいい顔では、迎えられなかった。

雑誌『テレビ時代（エイジ）』が、批判的すぎるからである。

田辺は、構わずに、投書の手紙を松尾に見せた。

松尾は、煙草をくわえたまま、その手紙に眼を通したが、首をすくめて、テーブルの上に投げ出した。

「君は、こんな投書を、まともに取りあげる気で、やって来たんじゃないんだろうね？」

「担当ディレクターの意見を聞きに来たんですよ」

「意見たって、こんなデタラメな投書に、意見も何もないよ」

「すると、四月二十三日の放送に出た早川八重子という女性は、本当に人力車を引いて商売をしていたわけですか？」

「その通りだよ。テレビは、新聞なんかと違って、ちゃんと映像が映るんだ。ゴマカしようがないよ。彼女の場合も、ちゃんと、働いているところをフィルムに撮ってきて映したんだ。イ

ンチキだなんていわれるのは心外だね」

「そうだとすると、この投書の主は、何故、こんな手紙を書いて来たんでしょうかね？」

「そんなことは僕は知らん。どうやら、彼女と同じ町の人間らしいから、彼女にふられでもして、その腹イセに、こんな投書をして来たんじゃないかねえ。彼女は、なかなか美人で、男好きがするからね。さもなきゃあ、うちの番組への妨害じゃないかな。『日本一の変り者』も、おかげで、ジリジリと視聴率があがってきて、他の局の脅威になっている筈だからね」

松尾は、ちょっと胸をそらせてみせた。

「じゃあ、ＶＴＲを見せて貰えますか？」

と、田辺がきくと、松尾は、「いいよ」とあっさり肯いた。

三階で、四月二十三日放送分のＶＴＲを見せて貰った。

問題の早川八重子という女性は、二人目に登場してきた。

スラリと背の高い、なかなかの美人で、ミニがよく似合い。渡辺がいったように、一見タレントの感じである。

人力車を引いているとわかると、会場に、「へえ」というようなどよめきが生れたところをみると、誰の眼にも、そんな女性には見えなかったのだろう。

Ｆ県のＳ市へ行って撮って来たフィルムも映された。ミニとはガラリと変った昔のままの車

夫の恰好をした早川八重子が映っている。芸者が乗り、ホロをおろしてから走り出すところも、ちゃんと映っていた。そして、スタジオで、彼女は、司会者の質問に答えて、人力車を引こうとした動機や、苦心談をしゃべった。古いものへの興味が動機で、難しいが、高校時代、陸上競技の選手だったことが役立ったと、笑いながら、早川八重子は、しゃべっている。解答者の一人が、S市へ行ったら、ぜひ、乗せて貰いたいといったところで、次の人物の登場となった。

田辺は、VTRをとめて貰った。

「これで納得がいったろう」

と、松尾が、笑いながらいった。

「映像は、事実しか伝えないんだよ。まあ、そんなデタラメな投書は、没にすることだね」

「ブラウン管に映ったものが、全て真実だというのは、テレビ関係者の作った勝手な神話じゃありませんか？」

と、例によって、田辺は、皮肉をいった。

テレビの危機が云々されだしたといっても、関係者のテレビというメディアに対する信仰は根強いし、それを批判する者は、毛嫌いされる。

案の定、松尾は、苦い顔になった。

「君は、このフィルムを見ても、まだ、投書が事実だと思っているのかね？」

「わかりませんよ。ただ、疑問は、とことん突きつめて調べてみたいと思っているだけのことですよ。それが、読者に対する僕たちの義務ですからね」

「とことん調べるといって、これ以上、何を調べるというんだ？　われわれが撮ってきたフィルムがインチキだなんていうんじゃあるまいね？」

「そんなことはいっていませんよ。僕は、ただ、この投書の主が、何故、あの登場人物についてだけ、これほど強いことを書いて来たのか、それを知りたいと思っているだけですよ。或は、松尾さんのいうように、早川八重子という女性にふられた腹イセに投書したのかもしれませんが、それならそれで、事実かどうか確めてみたいのですよ」

「そんなところだよ。匿名にしているのが、デタラメの証拠じゃないか、そうだろう。自分の方が正しいのなら、ちゃんと名前を書いてくる筈じゃないかね？」

「匿名にしてきた理由も、調べてみるつもりです」

と、田辺はいった。売り言葉に買い言葉の感じがないでもなかった。

3

田辺は、F県のS市に、早川八重子を訪ねてみることにした。

S市は、北関東にあって、最近、人口が三万を越えて、町から市に昇格したところである。昔から、川に沿って開けた温泉街が、市の中心になっていた。

田辺は、車で、S市に着くと、旅館に入って、女中に、早川八重子のことをきいてみた。中年の、人の好さそうな女中は、「お客さんもですか」と、クスクス笑った。

「あのテレビ以来、ここに来るお客さんは、みんなあの娘さんのことをお聞きになりますよ」

「どこに行ったら会えるかな？」

「松崎屋という芸者屋にいらっしゃれば、お会いになれますよ。そこのお嬢さんですから」

「芸者屋の娘さんなのか？」

「そうですよ。だから、あんなことを考えたんでしょうね」

女は、松崎屋という芸者屋までの道順を教えてくれた。

外に出ると、もう夕闇が立ち籠めていて、両側に旅館の並んだ道を、はなやかに化粧した芸者が、二人、三人と、歩いて来る姿が眼に入った。

こんなところへ、早川八重子の引いた人力車が来てくれれば、訪ねて行く手間がはぶけるのだがと、田辺は思ったが、彼女の人力車は、一向に現われなかった。

松崎屋は、歴史の古い店という感じで、がっしりした造りの建物だった。入る前に、店の左右を見廻したが、テレビで見た人力車の姿はなかった。

格子戸をあけて案内を乞うと、五十歳くらいの女が出て来た。田辺が、雑誌の名前を刷り込んだ名刺を差し出して、早川八重子さんに会いたい旨を告げると、女は、くだけた調子で、

「まあ、あがって下さいな」

と、田辺を、座敷に招じ入れてから、

「あいにくと、娘は留守なんですよ」

と、いった。どうやら、早川八重子の母親らしかった。

田辺は、出されたお茶を口に運んでから、

「どこへ行かれたんですか？」

と、きいた。

「東京へ行きましたよ」

と、母親は、いくらか得意そうにいった。

「東京へ、何しに行かれたんですか？　東京の会社に就職でもしたというわけですか？」

「就職といえば、就職ですけどねえ」

と、母親は、ニコニコ笑った。

「娘が、あの番組に出て以来、本格的にテレビに出てみないかというお話が、舞い込みましてねえ。あんまり熱心なものだから、娘も、出かけて行ったんですよ」

「本格的というと、ドラマにでも出演なさるんですか？」
「ええ。まあねえ。あれで、歌を習っていたこともありますし、高校時代は、演劇サークルに入ってましたから、きっと、タレントとしても、成功すると思うんですけどねえ」
「話があったのは、何というテレビ局からですか？」
「勿論、中央テレビからですよ」
母親は、勿論、という言葉に力を籠めていった。
「いつ、上京されたんですか？」
「一昨日ですよ」
「一昨日？」
田辺は、首をひねった。中央テレビの松尾ディレクターに会ったのは、昨日である。中央テレビの誘いで、早川八重子が上京したのなら、松尾は、何故、それを口にしなかったのだろうか。もっとも、他の番組のディレクターが、彼女に口をかけたのなら、松尾が知らないことも、十分にあり得るのだが。
「中央テレビの何という人から、話があって上京されたんですか？」
「さあ。娘が、よく電話で打ち合せていましたけど、覚えておりませんわ。娘に電話すれば、すぐわかりますけど」

「東京での住所は、わかりますか？」
「ついさっき、娘からハガキが届きましたから」
と、母親は、タンスの引出しから、ハガキを出して来て、田辺に見せた。
住所は、東京中野のマンションになっていた。ハガキに書いてあることは、簡単なものだった。

〈無事、東京に着いて、このマンションに落ち着きました。
部屋代は、月三万五千円です。テレビ局に行ってみる積りです。
上手くやるから心配しないで下さい。
八重子〉

書いてあったのは、それだけである。他に書くことがなかったというようにも思え、タレントとしての自分の将来に、自信満々のようにも思えた。
田辺は、そのハガキにあった住所を、自分の手帳に写しとってから、礼をいって母親に返した。
母親は、娘がテレビに出たら、ほめてやって下さいと、田辺に何度も頼んだ。

田辺は、人力車のことに、話題を移した。
「お嬢さんが、人力車に興味を持つようになったのは、いつ頃からですか？」
「こういう家に育ったもんですから、子供の時から、芸者とか人力車には、興味を持っていたようですよ」
「それで、実際に、人力車を引いたというのは、いつからなんです？」
「それなんですけどねえ」と、母親は、クスッと、笑って、
「母親のあたしが、うかつなことに、娘が人力車を引いているのに、全然、気がつかなかったんですよ。テレビ局の方がいらっしゃって、はじめて知ったんです」
「何故、黙っていたんでしょうね？」
「やっぱり、何となく羞しかったんじゃありませんか」
「その人力車は、この温泉街にあるそうですね？」
「ええ。この近くの徳之助爺さんが引いてたんですけどね。身体を悪くして引けなくなったものだから、うちの娘が、面白半分に引いていたらしいんですよ」
母親は、ニコニコ笑っている。田辺は、その老人に会ってみることにして、松崎屋を出た。
老人の家は、すぐわかった。家の横の細い路地に、人力車が置いてあったからである。
小さな家だった。昔は、イキな掛声が聞こえたのだろうが、今は、ひっそりと静まり返って

いた。

声をかけてみたが、すぐには、返事はなかった。二度、三度と呼んでいるうちに、入口の戸があいて、初老に近い女が顔をのぞかせた。小柄な女で、疲れた顔をしていた。

「徳之助さんに会いたいんですが」

と、田辺がいうと、女は、疲れたというように肩をすくめてから、

「うちの人は、奥で寝てますよ」

「病気だそうですね？」

「ええ」

「話せませんか？」

「ちょっと、口もよく動かなくなってますからねえ」

女は、また、肩をすくめた。

「早川八重子という娘さんを知っていますか？」

「ええ。松崎屋さんのお嬢さんでしょう。知ってますよ」

「彼女が、おたくの人力車を借りたことがありますね？」

「ええ」

「その時の事情を話してくれませんか？」

「事情なんて、別にありませんよ。松崎屋のお嬢さんが、ひょっこり見えて、あの人力車を貸してくれっておっしゃったから、どうぞって申し上げただけですよ」
「それは、いつのことですか？」
「一カ月くらい前だったと思いますよ」
「すると、それから、ずっと、彼女は、ここで人力車を引いていたわけですか？」
「いいえ。そのときは、一日でおやめになりましたよ。いくら、高校時代に運動をやってたって、素人の、それも娘さんには、無理ですからねえ」
女は、顔を手でこすり、小さく笑った。

4

「しかし、最近、彼女が人力車を引くところを、テレビ局が、撮影して行った筈なんですが？」
「ええ。テレビ局の方が来ましたよ。あたしんところにも、人力車をお貸ししたんで、お礼をくれましたけど」
「車夫の衣裳を、早川八重子に貸しましたね？」

「いいえ」
「貸さなかったんですか？」
「ええ。うちの人の着物なんて、もうボロボロですからねえ。松崎屋のお嬢さんに着せられませんよ」
「じゃあ、彼女は、誰から衣裳を借りたんでしょうか？」
「知りませんよ。そういうことは。あたしのところは、人力車を貸しただけなんですから」
「中央テレビの番組は見ましたか？」
「いいえ。あたしんところには、テレビなんかありませんからね」
女は、また首をすくめた。
田辺が、他の質問をしようとしたとき、奥で、人のうめく声が聞こえた。女は、いらだたしそうに、頭をガリガリと掻いてから、
「うちの人が呼んでますからね」
と、疲れた声でいい、奥へ入って行った。
田辺は、旅館に戻った。風呂に入って、部屋に帰ってくると、お茶を運んでおいてくれた女中が、
「芸者さんでも、お呼びしましょうか？」

と、田辺にきいた。

いらないと、断わろうしてから、田辺は、

「四月二十三日のテレビに出た芸者なら、呼んで貰いたいな」

と、いった。女中は、

「それなら、松崎屋の志津江さんですよ」

と、名前を教えてくれ、電話をかけてくれた。

志津江という芸者が来たのは、一時間ほどしてからだった。

テレビでは、大柄に見えたのだが、実際に会ってみると、意外に小柄な女だった。

田辺は、女中に酒を運んで貰ってから、

「君をテレビで見たよ」

と、志津江にいった。彼女が、笑ったところをみると、他の客にも、同じことをいわれたのだろう。

「テレビ局の人が、君に人力車に乗ってくれって頼んだのかい？」

田辺がきくと、志津江は、彼に酌をしてから、

「あたしが、松崎屋にいる芸者の中で、一番目方が軽いだろうって、モデルになってくれって、頼まれたんですよ」

と、クスクス笑った。田辺は、相手の痩せた身体を見廻してから、
「それでも、素人の早川八重子さんに、よく人力車が引けたねえ。人間を乗せて走るなんて、ちょっとやそっとじゃ、出来ないことなんだろう？」
「本当のこと、教えましょうか？」
志津江は、急に小声になって、田辺を見た。いたずらっぽい顔になっている。「ああ」と、田辺が肯くと、
「あれ、カラの人力車なんですよ」
「でも、君が乗るところが、テレビに映っていたけどね」
「ええ。でも、そこでカメラをとめて、あとは、カラの車を、お嬢さんが引いたんですよ。素人のお嬢さんに、人の乗った人力車が、すいすい引ける筈がないじゃありませんか。あたしを乗せて、とまっているところは、ちゃんと、撮りましたけどね。それだって、お嬢さんは、フラフラしてたんですよ」
「じゃあ、この温泉街で、早川八重子さんの引く人力車に乗った芸者や観光客はいないということかね？」
「いないでしょう。だって、人を乗せたんじゃ、引けないもの」
「じゃあ、何故、テレビが撮りに来たんだろう？」

「あたしも知りませんよ。ただ、あのお嬢さんは、変ったことが好きで、前に、徳之助爺さんの人力車を借りて、引いて歩いたことがあるんですよ。古い、いいものを保存するんだとか何とかいって。それが、テレビ局に伝わったんじゃないかしら」
「その時も、人は乗せなかったんだろう？」
「当り前ですよ。女の人が、それも生れてはじめて人力車を引っ張ったのに、人を乗せられる筈がないじゃありませんか」
芸者は、また、クスクスと笑ったが、あのテレビ放送のおかげで、この温泉街に来る客が増えたともいった。
「でも、たいていのお客さんが、テレビで見た女の人力車に乗りたいって、旅館にいうそうですよ。お客さんも、それで、いらっしゃったんじゃないですか？」
「乗りたくても、彼女は、東京へ行っちまったそうじゃないか」
「それで面白い話があるんですよ。市長さんや、旅館組合の組合長さんが、ここの名物になるというんで、お嬢さんに、一日一回でいいから、人力車を引っ張って、通りを走ってくれって頼みに来たんですよ」
「ふーん」
「ところが、お嬢さんの方は、そんな気が全然ないから、東京へ行ってしまう。あとは、テン

ヤワンヤ。美人の女車夫がいるっていうんで、お客が増えたんですものね、それで、ここじゃあ、今、人力車を引いてくれる若い女性を募集中。組合長さんが、十万円の月給を払うんですって」

「成程ね」

と、田辺も笑った。

十二時に、芸者を帰すと、田辺は、布団に腹這いになり、煙草をくわえて、考え込んだ。

早川八重子は、どうやら、作られた変り者らしく思えてきた。

作ったのは、ディレクターの松尾だろうか。人力車夫の衣裳だって、テレビ局なら、簡単に間に合う筈である。

（だが、何故、そんな無理までして、番組を作ったのか？）

それがわからなかった。

投書の主は、探しようがないが、想像がつかないこともなかった。芸者の志津江が、あのテレビ放送以来、客が増えたといったからである。

この近くには、他にも温泉がいくつかある。客をここに取られた温泉の人間が、恐らく投書の主だろうと、田辺は思った。正義のために告発したいのなら、匿名にはしないだろう。

そこまで考えてから、田辺は、煙草を枕元の灰皿でもみ消して眠りについた。

5

翌日、田辺は、東京に帰ると、その足で、中野にあるマンションに廻ってみた。
新中野マンションというのが、早川八重子のハガキにあった住所だった。駅の北口に、新しく建てられた十一階建ての賃貸マンションだった。
入口の横にある管理人室で、
「早川八重子という人が、ここに部屋を借りている筈なんだが？」
と、きくと、チョビひげを生やした中年の管理人は、怯えたような表情になって、
「早川八重子さんにご用なんですか？」
と、変に甲高い声を出した。田辺が、眉をしかめて、「そうだよ」と、いったとき、急に背後から、
「失礼ですが」
と、声をかけられた。
男が二人立っていた。田辺が、「え？」という眼をすると、片方の男が、黒い警察手帖を、彼の眼の前に突きつけた。

「早川八重子さんに、ご用だそうですね？」
「彼女に何かあったんですか？」
「こちらの質問に、先に答えて頂きたいですな」
と、ふたりの刑事は、不機嫌な声を出した。田辺は、首をすくめた。
「彼女に会いたくて、来たんですよ」
「彼女とは、どういう関係ですか？」
「別に、何の関係もありませんよ」
「関係のない人間が、何故、訪ねて来たんです？」
刑事は、眼をとがらせた。
田辺は、苦笑して、名刺を相手に渡した。
「彼女は、四月二十三日のテレビに出演したんです。女で人力車を引いている風変りな人間ということでね。それで、取材に来ただけのことですよ」
S市に行って調べたことは、わざといわなかった。二人の刑事は、「ほう」という顔で田辺を見た。
「すると、彼女のことは、中央テレビへ行って聞けば、わかるということですね？」
「そうですね。松尾というディレクターが、この番組の担当ですから、彼がよく知っていると

思いますよ。ところで、今度は、僕の質問に答えて下さい。彼女に何があったんですか？」
「五階の部屋で、殺されていたんですよ」
もう一人の刑事が、乾いた声でいってから、小さな咳払いをした。
田辺の顔色も変った。これでは、彼女は、死ぬために上京したようなものではないか。
「それで、誰に殺されたんですか？」
「それを、今、調べているんですよ」
と、二人の刑事は、苦笑してから、マンションを出て行った。恐らく、中央テレビへ行くのだろう。
田辺は、管理人をふり返った。
「一体どういうことだったのかな？」
「わたしが、死んでるのを発見したんですよ」
と、管理人は、不安と得意さの入り混じったような顔で田辺にいった。
「昨日、早川さんが、早く電話をつけたいっていってたんで、今日、電話の周旋屋を紹介しようと思って、五階へ上ったんです。そうしたら、ドアが開いてるのに、返事がない。変だなと思って、部屋をのぞいたら、彼女が死んでいたんですよ。首を締められて」
管理人は、両手を、自分の首に当てがって見せた。

「何時頃、殺されたのかな？」
「刑事さんは、恐らく、昨夜のうちに殺されたんだろうと話してましたよ」
「昨夜、誰か彼女を訪ねて来たのかね？」
「同じことを刑事さんにも聞かれましたがねえ。このマンションには、裏にも入口があるんで、そこから入ってくると、わたしには、わからないんですよ」
「五階だったね？」
「五〇六号室ですよ」
「見せて貰えないかな？」
「駄目ですよ。警察がちゃんと張り番をしてますから」
と、管理人はいった。
田辺は、諦めてマンションを出ると、四谷にある『テレビ時代（エイジ）』社に顔を出した。もう昼すぎで、みんな出社していたが、田辺の報告に、顔を見合せた。
渡辺が、素早くテレビのスイッチを入れた。まだ、昼の演芸をやっていたが、すぐ、一時のニュースになった。
早川八重子が殺されたというニュースもブラウン管にのったが、それは、ひどくそっけないものだった。警察が、犯人について、まだ何もつかんでいないということなのだろう。

「ところで、誰が、何のために、早川八重子を殺したのかな？」
と鈴木が、首をひねった。
田辺は、「それも興味があるが」と、みんなの顔を見廻した。
「彼女と中央テレビとの関係の方が、僕には興味があるんだ。今もいったように、早川八重子は、人を乗せて、人力車を引いたことは一度もない。四月二十三日放映のフィルムも、トリックがあった。投書にあるように、インチキといえば、インチキだ。それにもかかわらず、何故、中央テレビが放送したんだろうか？」
「二つ考えられるね」と、渡辺が、落着いた声でいった。
「一つは、松尾が、視聴率をあげるために、最初からデッチあげる気だったということだ。変り者なんてそういるもんじゃない。松尾にとって一番怖いのは、タネ切れになることだし、後発番組だから、生半可な変り者じゃあ、視聴率はあげられない。そんなわけで、苦しまぎれに、嘘を承知でデッチあげたのかもしれない」
「もう一つは？」
「彼女は、一カ月前に、面白半分に、カラの人力車を引っぱっている。その話が、松尾に伝わって、彼が飛びついたんじゃないかということなんだ。ところが、現地に行ってみると、話が違う。が、今更、予定は変更できないし、新しい変り者を探す時間もない。それに、美人の車

引きとなれば値うちもある。そんなことで、後に引けずに強引にデッチあげてしまったんじゃないかということなんだがね」

「そのどちらなのか、調べてみようじゃないか。それと、早川八重子は、中央テレビに出演を頼まれて上京したことになっている。それがどういうことなのかも調べたいな」

「僕が、中央テレビに当たってみよう」

と、渡辺が立ち上った。「君も行ってくれ」と、田辺は、鈴木にも、渡辺に同行するように頼んでから、自分は、警察の捜査状況を調べに行くことにした。

捜査本部は、中野署に設けられていた。新聞記者らしい男たちが、薄暗い廊下をウロウロと歩き廻っていた。

田辺は、中野のマンションで会った刑事の一人を見つけて声をかけた。

小太りの刑事は、田辺を覚えていて、「あなたですか」と、微笑した。

「中央テレビの松尾ディレクターに会われましたか？」

田辺がきくと、刑事は、「ええ」と肯いた。

「おかげで、早川八重子のことがよくわかりましたよ」

「松尾さんは、何といっていました？」

「びっくりしていましたよ。彼女が上京しているのも、知らなかったようですね」

「松尾ディレクターが、彼女を殺したということは、考えられませんか？」
と、田辺がきくと、刑事は、顎に手をやって、「あの人がね」と、いった。
「何故、松尾さんが、早川八重子を殺したかもしれないと思うんです？」
「別に理由はありませんが、上京した彼女が松尾さんに会ったに違いないと思うからですよ」
「成程ね。しかし、松尾さんは、犯人じゃありませんよ」
「アリバイがあったんですか？」
「そうです。早川八重子が殺されたのは、昨夜の十一時前後です。これはもう記者さんに発表しましたがね。その時間に、松尾さんは、新宿の『紅中（ホンチュン）』というマージャン屋で、友だちとマージャンをやっていたのですよ」
「それは、確かなんですか？」
「友人も、店の主人も、証言してくれましたよ。昨日は、九時から十二時過ぎまで、マージャンをやっていたと。だから、松尾さんは、犯人じゃありませんよ」
「そうですか」
田辺は、ちょっと、失望した表情になった。別に、松尾に恨みがあるわけではなかったが、早川八重子の死に、松尾が関係しているような気がしていたからである。

6

田辺が、社に戻ってからしばらくして、渡辺と鈴木も帰ってきた。
「面白いことがわかったよ」
と、渡辺は、田辺の顔を見るなり、大きな声を出した。
「中央テレビで、何か聞き込んだのか？」
「いや。テレビ局の人間は、松尾ディレクターも含めて、われわれの想像を、断乎として否定したよ。四月二十三日の放送には、針の先ほども、インチキはないとね」
「じゃあ、誰が、面白い話を聞かせてくれたんだ？」
「あの番組に参加していたシナリオライターだよ。ドラマのシナリオを書くのと違って、詰らない仕事なんで、二日前に番組からおりた。その男に会って来たんだ」
「それで？」
「早川八重子の件を、最初に、中央テレビに持ち込んだのが誰かわかったよ。一体、誰だと思う？」
「僕が知っている筈はないだろう」

「高木良太郎だよ」
「誰だって？」
「あの番組のスポンサーF化学の宣伝部長さ」
「あの男か」
と、田辺は、ニヤッと笑った。テレビ局では、悪名高い男である。F化学は、連続ドラマのスポンサーにもなっているが、宣伝部長の高木は、自分の知っている人間を、ドラマに使えと圧力をかけてくるので有名だった。テレビ局泣かせ、ディレクター泣かせなのである。
「シナリオライターは、どういってるんだね？」
「彼は、S市へ下見に行った。そこで、二つのことを彼は知った。一つは、あんたが、S市で調べたことだよ。彼女がインチキだってことさ。だが、彼は、そんなことでやり切れなくなったわけじゃない。女車夫をデッチあげることぐらい平気だった。そんなことぐらいで、良心を痛めていたら、あの世界で生きていけないと笑っていたよ。彼が、いやになったのは、もう一つのことなんだ」
「どんなことだ？」
「彼は、S市で、というより、松崎屋という芸者置屋で、高木良太郎の名前を聞いたんだよ。平たくいえば、早川八重子が、高木と関係のある女だとわかったんで、いやけがさしたという

んだな」

「早川八重子は、高木の女だったのか」

田辺は、苦笑してから、

「すると、彼女が、ドラマに出るといっていたのも、全くのデタラメじゃなかったんだな」

「恐らく、高木は、F化学がスポンサーになっているドラマに出してやるとでもいったんだろうね。例によって」

「月曜日の夜九時からやっている『わが愛は海に似て』というやつか」

田辺は、中央テレビのその連続ドラマを思い出していた。あまり人気のない番組だった筈である。

「ちょっとわからなくなってきたな」

と、田辺は、腕を組み、難しい顔になった。

「何が？」

と、鈴木がきいた。

「僕は、早川八重子を殺したのは、松尾じゃないかと思っていたんだ。彼が、視聴率をあげるために、女車夫をデッチあげた。それをわれわれが突つきはじめたんで、彼女を消してしまったんじゃないかとね。警察はアリバイがあるといったが、僕は信じなかった。だが、高木良太

郎の女だったとすると、わからなくなってきたね。それを知っていて、松尾が殺す筈がないからな」

「高木にも、動機はないんじゃないか。今までの例から見て、テレビはスポンサーに弱い。高木が強引に押せば、早川八重子は、連続ドラマの端役ぐらいには出られたろうからね」

「そうだな」

と、田辺は、眉を寄せたが、腕時計を見て立ち上った。

「ちょっと、マージャン屋をのぞいてくるよ」

7

『紅中』というマージャン屋は、新宿歌舞伎町にあった。中央テレビからは、歩いても二十分足らずの距離である。

田辺が、のぞいたのは、夜の十時少し前だったが、どの卓も客で一杯で、煙草の煙が立ちこめ、ラーメンや焼めしのドンブリや皿が重ねておいてあった。

田辺が、突っ立って、店の中を見廻すと、奥の卓に、松尾がいるのに気がついた。田辺が、その卓に近づいて、声をかけると、松尾は、つもって来たパイを、そのまま捨てて、

「君か」
と、気のない声を出した。
リーチをかけていたタレント風の若い女が、
「それ、当たり。タンヤオ、ピンフ、リーチのドラドラだから満貫ネ」
と、嬉しそうにいった。松尾は、点棒を払いながら、
「君のおかげで振り込んだよ」
と、田辺を睨んだ。田辺は苦笑した。
「昨夜も、ここでマージャンをやられたそうですね」
「ああ。やったよ」
「誰とおやりになったんですか？」
「何故、そんなことを、君にいわなきゃならないのかね」
松尾は、不機嫌にいい、手荒く、パイをかきまぜた。
田辺は、店番をしている女のところへ足を運んだ。四十歳くらいの女である。
「松尾さんは、よく来るのかい？」
と、きくと、女は、「ええ」と肯いてから、
「お客さんは、警察の方ですか？」

「さっき、刑事が聞きに来たんだろう？」
「ええ」
「じゃあ、その時と同じことを話してくれないかな」
田辺は、小さくたたんだ千円札を、女の手に押しつけた。女は、ニヤッと笑ってから、
「松尾さんは、九時頃お見えになって、お帰りになったのは、十二時頃でしたよ。よくお見えになるんですよ」
「何人で来たのかね？」
「五人でお見えでした」
「そうすると、一人がいつも抜けていたわけだ。松尾さんが抜けている場合もあったわけだろう？」
「ええ」
「警察にも、そのことは話したのかね？」
「ええ。話しましたよ」
女は肯く。田辺は、警察が、それなのに何故、松尾にアリバイがあると確信したのかわからなかった。
五人打ちなら、一人は、いつでも抜け出せるではないか。

田辺が首をひねったとき、「僕のことを聞いているらしいね」と、いつの間にか、傍に来ていた松尾が、皮肉な眼つきで、田辺を見た。

松尾は、女に向って、「煙草をくれ」といってから、田辺に、

「君は、僕が早川八重子を殺したと思っているらしいが、ちゃんとアリバイがある。警察の認めたアリバイがね」

「しかし、昨日は、五人打ちのマージャンをやってたんでしょう？　あなたが抜け出すことも出来たわけです」

「だが、僕は、犯行時刻には、ここでマージャンをやっていたんだよ」

「どうして、それが証明できたんですか？」

「僕が十一時に大三元をやったからだよ」

「あなたが役満であがったのが、どうして十一時だと証明できるんです？」

「この店ではね。役満であがると証明書を書いてくれるんだよ。あとで自慢できるようにね」

と、松尾が笑うと、店の女も、「お客さんへのサービスにやっているんですよ」といった。

松尾が、その証明書というのを見せてくれた。カードになっていて、こう書いてあった。

〈四月三十日午後十一時五分

東三局（親）

役満（大三元）
松尾一彦様
右証明致します。
「これで納得したかね？」
と、松尾は、ニヤッと笑い、女から煙草を受け取って、奥のテーブルに戻って行った。
〈『紅中』主人〉

8

田辺は、翌日、社に出ると、マージャンの名人を自称している鈴木に、
「大三元という役満は、自由に作れるものかね？」
と、きいてみた。鈴木は、パチンと指先を鳴らしてから、
「普通にやってたら、なかなか出来るものじゃないさ。だが、インチキをやれば作りたいときに作れるよ。まあ、僕ぐらい上手になればだがね」
「積込みというやつか？」
「そうだ。だから、一人でやるんなら、サイコロを振る親のときが、一番やりやすいね。誰かやったのか？」

「松尾ディレクターが、大三元をやったんだ」

田辺は、『紅中』で聞いて来たことを、鈴木に話した。

「それで、午後十一時五分に、偶然、大三元が出来てあがったというのが、どうも信じられないんだ。それが、松尾のアリバイになっているんだからね」

「そりゃあ、恐らく、松尾がインチキをやったんだ。松尾という男は、大学時代に、賭けマージャンで学費から生活費までまかなっていたと聞いたことがあるからね」

「だが、何故、インチキまでして、その時間に大三元をあがったんだろうか？」

「だから、アリバイ作りだろう。君だって、そう思うんだろう？」

「確かに、アリバイ作りだろうとは、思うんだ。だがね、松尾が大三元をやり、それをマージャン屋の主人が証明書を書いたということは、松尾が、十一時五分に、『紅中』にいたということだ。そうすると、本当に、彼は早川八重子を殺せないことになってしまう」

「店の主人を騙すか、金をやるかして、ニセの証明書を書かせたということはないのかな？」

「それはないね。そんな感じじゃなかったよ」

「じゃあ、松尾が、誰かに早川八重子を殺させた。殺す時間がわかっていたんで、自分のアリバイを作ったというんじゃないかね？」

「殺し屋を傭ったというのかい？」

田辺は、苦笑した。日本にも、殺し屋はいるかもしれないが、どうも現実離れしている。結局、松尾が、何故、昨夜の犯行時刻に大三元をあがって、アリバイを作ったのかわからなかった。ただ単にアリバイを作るだけのことなら、他にもっと簡単で、確実な方法がある筈である。

午後になって、中央テレビに様子を見に行っていた渡辺が、意外なニュースを持って、戻って来た。

F化学がスポンサーになっていた連続ドラマ『わが愛は海に似て』が、近く打切りになるというのである。

「すでにあと三回分が撮ってあるんで、それを放映して終りになるらしい」

と、渡辺がいった。

「そのあと、同じスポンサーで、何をやるんだろう」

「いや。F化学は、完全におりるそうだ。業績不振でね。だから、F化学がスポンサーの番組は、例の『日本一の変り者』一本になるらしい」

「ふーん」

と、田辺は、鼻を鳴らした。が、急に、眼を光らせた。

「そうだとすると、話は変ってくるぞ」

「何がだ？」

「いいかい。早川八重子は、高木良太郎の女で、彼に、ドラマに出してやるといわれて、上京した節がある。ところが、F化学は、ドラマのスポンサーからおりてしまった。となると、高木は、彼女との約束を守れなくなったわけだ」

「成程ね」と、渡辺も、声を弾ませた。

「彼女に約束を迫られて、やり切れなくなった高木が、殺したというわけか」

「いや。約束を迫られたぐらいでは、殺すことまではしないと思うんだ。だが、早川八重子は、芸者置屋の娘だ。世間智にたけていたんじゃないかな。高木に頼んでもラチがあかないとわかると――」

「スポンサーに直接頼むか――？」

「それだよ。早川八重子は、F化学の社長に直接頼んでみると、高木にいったんじゃないだろうか。そんなことをされたら、宣伝部長の地位を利用して、いろいろと、うまいことをやって来たことが、バレてしまう。だから高木良太郎は、早川八重子を殺したんじゃないだろうか？」

「あり得ることだよ」

「この想像が当たっているかどうか、高木良太郎に会ってみるのも悪くないな」

9

F化学の本社は、日本橋にあった。宣伝部長の高木とは、田辺も、テレビ局で何度か会っていた。

傲慢(ごうまん)だが、愛想のいい男でもある。受付で名前をいうと、すぐ、三階の応接室に通された。五分と待たせずに、高木が入って来た。五十歳近い筈だが、派手な背広にネクタイなので、若く見える。

「やあ、やあ」

と、手をあげて入ってくると、「そのうちに、一緒に一杯やりたいね」と、笑いながらいった。

田辺は、わざと、堅い表情を作った。

「早川八重子さんという人を、ご存じだと思いますが？」

単刀直入に、彼がきくと、高木は、一瞬、当惑した表情になってから、

「早川八重子ねえ」

「ご存じない筈はありませんよ。あなたが、強引に、中央テレビの『日本一の変り者』に出さ

せた女性ですからね」
「ああ、あの女か」
と、高木は、とぼけて、ニヤッと笑った。
「確かに、私が推薦したが、それは、若い女が人力車を引くというのが、面白かったからだよ。強引になんていうのは、君の誤解だよ。私は、虎の威を借りる狐のようなマネは、一度もしたことがないからね」
「彼女が上京して来て、中野のマンションで殺されたのも、ご存じでしょうね？」
「殺された？」
高木は、大げさな驚き方をした。
「勿論、私は初耳だよ。彼女が上京していたなんてことも、知らなかったくらいなんだからね」
「おかしいですね。あなたの姿を、中野のマンションの近くで見たという人がいるんですがね。事件のあった日に」
田辺が、カマをかけると、高木は、一瞬、顔色を変えたが、すぐ、平静に戻って、
「困るね、そんな噂は。彼女が殺されたのはいつだって？」
「四月三十日の午後十一時前後です」

「四月三十日ねえ」
高木は、ポケットから手帖を取り出して、パラパラとめくっていたが、顔をあげて、ニッコリと笑った。
「助かったよ。四月三十日のその時間には、ちゃんとアリバイがあるよ」
「どんなアリバイですか？」
「マージャンをやっていたんだよ。新宿でね。番組担当の、君もよく知っている松尾君と一緒にね」
「何ですって？」
今度は、田辺の方が、驚く番だった。
「店の名前は『紅中』ですか？」
「そうだよ。確か九時から十二時近くまでやっていた。だから、ちゃんとアリバイがあるわけでね」
「しかし、そのマージャンは、五人打ちだった筈ですよ。一人はんぱだから、抜けようと思えば抜けられた筈です」
「まあ、そうだがね。ところで、松尾君のアリバイは成立したのかね？　彼だって、早川八重子を知っている筈だよ」

「松尾さんは、アリバイが成立しましたよ。十一時五分に、親で大三元をあがって、店の主人が証明書を出しているからです」
「成程ね。それなら、私のアリバイも成立するわけだ」
「何故です？」
「松尾君のその大三元に振り込んだのが私だからさ。親の役満で四万八千点。泣く泣く払ったよ」
「――――」
田辺は、そうだったのかと思った。松尾が、インチキまでして大三元をやったのは、自分のアリバイを作るためというより、間接的に、高木のアリバイを証明するためだったのか。
「三巡目に、白をポンしたと思ったら、もうテンパイしているんだ。さすがの私も、簡単に振り込んじまったよ。おかげで、あの日は十万点以上負けたね」
「勿論、賭けてやってるんでしょう？」
「点一円だよ」
「すると、十万円のマイナスですか」
「そうだよ。ちょっと痛いがね。まあ、勝つときもあるんだから仕方がないよ」
あははは と、高木は、大きな声で笑った。

「他の三人は、どんな人たちですか？」
田辺がきくと、高木は、「ええと」と考えてから、
「一人は、松尾君の下で働いている若い男だ。名前は倉光君といったかな。あとの二人はタレントの水谷博と、若杉ユリだった。君も顔は知っているだろう」
「知っていますよ」
と、田辺は、肯いた。

10

田辺は、中央テレビに、もう一度、松尾を訪ねた。
松尾は、またかという顔をした。
「早川八重子のことなら、もう話すことはないよ」
「今度は、F化学の高木宣伝部長のことで来たんですよ」
と、田辺が切り出すと、松尾は、警戒するような眼になった。
「どんなことだね？」
「高木さんと、殺された早川八重子の関係は知っています。だから、高木さんには、彼女を殺

す動機がある。犯人ではないかと考えて会ってみたら、きちんとしたアリバイがあるというのですよ。四月三十日に、あなたとマージャンをして、例の大三元に振り込んだというんです。おかげで、十万点も負けたと」

「それなら、高木さんのいう通りだよ。あの日に、僕の大三元に振り込んだのは、彼だった」

「何故、そんな嘘をつくんです？」

「嘘だって？」

松尾の顔が、赤くなった。

「何故、嘘だというんだ？　信じないのなら、あの時、一緒にやった連中に聞いてみたまえ。みんな、僕の大三元に振り込んだのは、高木さんだという筈だ」

「そりゃあ、いうでしょうね。だが、僕は嘘だと思いますよ」

「何故だ？」

「いいですか。高木さんは、大事なスポンサーの宣伝部長でしょう。しかも、あなたの番組のスポンサーだ。不況ムードで、ドラマのスポンサーをおりてしまった今、F化学を、『日本一の変り者』につなぎとめておくことは、あなたにとって、至上命令の筈ですよ。それなのに、あなたは、高木さんとマージャンをやって、親の役満を振り込ませたあげく十万点もとってしまったんですか？　金額にして十万円、普通なら、接待マージャンとして、相手に勝たせなき

ゃならない筈じゃありませんか？」
「それはだね。高木さんという人は、正々堂々とした勝負の好きな人なんだよ」
「そんなことをいったら、高木さんを知っている人は、笑いますよ。だから、僕は、こう考えたんです。四月三十日のマージャンは、十万円払ってもなおプラスになるようなものを、高木さんに与えたに違いないと。だから、今日会ったときも、彼は、まるで、マージャンで勝ったみたいに、ご機嫌がよかったんだろうと」
「まるで、刑事みたいな口をきくじゃないか。え？」
「恐らく、警察も、僕と同じことを話しに来ると思いますよ」
「だから、どうだというんだね？」
「仲間中で、インチキマージャンをやったところで罪にはならないでしょうね。だが、人殺しの犯人に、アリバイを作ってやるためにインチキマージャンであがったとすると、これは、殺人の共犯者ということになるんじゃありませんか」
「――――」
「あなたが、高木さんのために、アリバイ作りをしてやる気持は、よくわかりますよ。一緒にマージャンをやった他の三人も、恐らく、あなたと同じ理由で、高木さんが、大三元に振り込んだと証言するでしょうね。倉光さんはあなたの部下で、一緒に『日本一の変り者』をやって

いるスタッフだし、タレントの水谷博と若杉ユリは、確かF化学のコマーシャルに出ていたことがありますからね。それに、自分の振り込んだ役満を、高木さんが払ってくれたんだから、それは、本当は自分が振り込んだなんていう筈がない。しかし、殺人事件の共犯になるとわかったら、どうでしょうかね。あなたが、高木さんのアリバイを主張している間に、他の三人が、警察に全てを話したら、ひどくまずい立場に立たされることになるんじゃありませんか？」

「――――」

「僕は、とにかく、警察に話すし、雑誌に書きますよ」

田辺がいったとき、堅い松尾の顔が、急にゆがんだ。

「何もかも書くのか？」

「ええ」

「君は、自分が何をしようとしているのかわかっているのか？」

「何がです？」

田辺がきき返すと、松尾は、小さく舌打ちをした。

「君だって、テレビのおかげで食っている人間の筈だ。それなのに、君は、テレビと大衆の間にある信頼をぶち毀そうとするのかね？」

「どんな信頼ですか？」

「大衆は、ブラウン管に映ったものは真実だと、素朴に信じている。君は神話だというだろうが、テレビのためには、その神話が必要なんだ。何の才能もないくせに、野心だけは人並以上だった詰らない女のために、それをぶち毀すのか」

松尾の声は、悲鳴に近かった。田辺は、苦笑し、あわれむように、松尾を見た。

「その詰らない女の早川八重子だって、あなたたちの作りあげた神話を、素朴に信じていた大衆の一人なんじゃありませんか」

一九七二年六月「小説サンデー毎日」

危険なダイヤル

1

ガラスのドアには、「秋葉京介事務所」としか書かれていない。

彼のことを知らない人間が見たら、何の仕事をしているのか皆目、見当がつかないだろう。

三十五歳の秋葉は、別に奇をてらって、こんな看板を出したわけでもないし、勿論、エナメルを節約したわけでもない。

「秋葉京介探偵事務所」と書いたら、結婚調査だとか、亭主や細君の浮気を調べてくれといった退屈きわまる仕事が舞い込むに違いないし、探偵事務所の看板をかかげた以上、それを断わるわけにはいかないからである。

私立探偵が免許制のアメリカでは、拳銃携行も許されるし、刑事事件でも飛び込んでいけるが、日本では、そのどちらも許されていない。だから、せいぜい、結婚調査や素行調査ぐらいしか出来ないわけだが、秋葉は、そんな退屈な仕事をやる気はなかった。

秋葉が欲しいのは、冒険だった。といって、三十歳を過ぎた彼が、過激派学生の真似もできない。残された道は、危険な事件の中に自分を放り込むしかなかった。

だから、事務所を設けたのだが、得体の知れない事務所に、事件を持ち込んでくる物好きは、

最初は、勿論、一人もいなかった。

それが、友人が巻き込まれた事件を見事に解決してから、口から口へ伝わり、少しずつ仕事が持ち込まれるようになった。危険だが、警察に頼めない事件の解決をである。その事件が危険であればあるほど、秋葉は、その一瞬に生甲斐が感じられるのだ。今の時代は、彼にとって、退屈以外何ものでもない。何をしてもむなしい気がする。革命も、掛声だけは華やかだが、一向に実現しそうにない。また、革命が起きたところで、今より一層、強い倦怠の時代がやって来るような気もする。だから、革命の時には、そのさなかに死ぬことが、一番幸福だろうと、秋葉は考えていた。

だから、今は、危険の中に自分を置くことが、秋葉にとって、生甲斐なのだ。それは、錯覚かもしれないが、いってみれば、この世は全て錯覚かもしれないのだ。

秋葉は、身長一七五センチ、七二キロ。ありふれた体格だ。普段は、いつも、眠たげな怠惰な眼をしている。それは、ポーズではなく、本当に退屈しているのだ。

今日も、秋葉は、事務所のソファーに寝そべり、煙草の煙を天井に向って吹き上げながら、眠たげな眼をしていた。何もない部屋である。机と電話と、ソファと、それに、冬の今は、ガスストーブが赤く燃えているだけだ。

キャビネットもなければ、テレビもない。

煙草の灰が床に落ちたとき、電話が鳴った。

一瞬、眠たげだった秋葉の眼がキラリと光った。が、起き上り受話器をとる動作はゆっくりとしたものだった。別に気取っているわけではない。すぐ切れる電話なら、間違いか、いたずらか、さもなければ詰らない事件だからだ。大きな事件なら、向うは、いつまでも鳴らし続ける筈だと読んでいるからである。

「秋葉だが」

と、彼はゆっくりといった。

「秋葉京介さんだね」

念を押すような男の声が聞こえた。

含み声なのは、送話口にハンカチでもかぶせているらしい。古い手だが、一向にすたれないところをみると、簡単な割りに効果があるのだろう。

「ああ、そうだが」

「あんたに仕事を頼みたい」

「内容は？」

「仕事といえばわかっているじゃないか。殺しだよ。人間を一人殺して貰いたいんだ」

2

秋葉の頭に浮んだのは、驚きや当惑より、苦笑だった。

相手は、どうやら、秋葉を殺し屋と間違えているようだ。秋葉のことが、口から口へ伝えられていくうちに、殺し屋と受け取った男がいたらしい。

（面白い）

と、秋葉は思った。一人の男が、今、誰かを殺したがっている。一寸したスリルだ。

「あんたの名前を聞きたいといってもいう筈はないね。それで一体誰を殺せばいいんだ？」

「あんた宛に手紙を出した。今日あたり着く筈だ。それに全て書いてある。手付金として十万円の金も入れておいた。一週間以内にやってくれ。成功したら、百万払う」

「成功したと、どこへ報告すればいいんだろう」

「報告する必要はない。有名人だから、死ねば、必ず新聞に出る。それが何よりの証拠になる。じゃあ、頼んだぜ。一週間以内だ」

相手は言いたいだけのことをいって、電話を切ってしまった。

秋葉は、煙草の吸殻を、パイナップルの空罐に投げ捨て、腕時計に眼をやった。三時半。郵

便物の配達はだいたい三時の筈だ。彼は事務所を出ると、このビルの入口にある郵便受けのところまで降りて行った。

電気代の請求用紙と一緒に、分厚い封筒が入っていた。

部屋に戻ると、請求用紙の方は、机の上に放り出し、封筒の方に注目した。宛名は、邦文タイプで打ってある。多分、筆跡を知られたくないからだろう。勿論、差出人の名前はない。消印が、東京中央郵便局になっているのは、その近くに住んでいるというより、住所を探られないために、わざわざ、東京駅近くまで行ったと考えた方がよさそうだ。

秋葉は、ソファに腰を下し、ハサミで封を切った。

便箋一枚、写真一枚、それに二つに折った一万円札が十枚、彼の掌に落ちて来た。

真新しい札ではないが、十万円を、普通の封筒の中に入れて出すとは、なかなか思い切ったことをする男だ。法律では禁止されているから、配達の途中で失くなっても文句はいえない。それを知って入れたのは、金を唸るほど持っているということなのか。

もっとも、小切手や現金書留にしたら、自分の尻尾をつかまれる恐れがあると考えたかもしれない。

写真は、名刺大のもので、若い女性の上半身が写っていた。二十二、三歳だろうか。きれいな眼をした、なかなかの美人だ。ノースリーブの花模様のワンピース姿なのは、夏にでも、撮

ったのだろう。バックは、どこかの公園らしく、花壇が見える。

秋葉は、写真を机に置き、便箋に目を移した。そこにも、邦文タイプで、彼女の簡単な略歴が並べてあった。

佐久間理恵(二三歳)一六三センチ五〇キロ　渋谷区笹塚七丁目　白亜レジデンス503

三田村石油秘書課勤務

自宅の電話番号(378)××××

書いてあったのは(正確には、タイプされていたのは、というべきだが)それだけだった。

秋葉を殺し屋と間違えた男は、余分なことを書き加えて、自分の身元の割れるのを用心したのかもしれない。それとも、

殺し屋を請負うには、これだけで十分と考えたのか。

秋葉は、改めて、女の写真を見た。美人だ。それも、整い過ぎて、冷たい感じのするタイプではなく、大きな眼や、やや厚めの唇に男を魅きつける可愛らしさがある。それに、背もすらりと高いとすれば、黙っていても、男たちは寄って来るだろう。

(殺しを頼んだ動機は、情事のもつれか?)

だが、それなら、ライバルの男の方を殺してくれと頼むのが本筋であろう。

秋葉は、これを、警察に打ちあける気はなかった。警察は余り好きではなかったし、これま

での事件で、ブタ箱に放り込まれたことも、二度や三度ではなかったからだ。罪名は全て、公務執行妨害。依頼された事件だが、刑事事件に発展しても、秋葉は、解決を約束した以上、手を引かないから、どうしても警察と摩擦が起きるからである。

だから、秋葉は、依頼者からは、頼もしい男だといわれる。しかし、危険な男だといわれていることも秋葉は知っていた。

依頼主が彼を裏切った場合、容赦しないからだ。さっきの電話の男が、秋葉を殺し屋と間違えたのは、危険な男という噂を取り違えたのだろう。

一一〇番しない理由は、もう一つある。それは、この封筒を持って行っても、警察は、殺しの依頼の話など信じないに決っているからだ。この便箋のどこにも、殺してくれとは書いてない。書いてあるのは、一人の若い女性の住所と勤務先、それに彼女の写真だけだ。結婚調査の依頼じゃないかと笑われるのがオチだろう。

（さて、どうするか？）

放っておく気は秋葉にはない。危険の匂いが、秋葉を緊張させ、それが、倦怠感を救ってくれるからだ。

秋葉は、新しい煙草を口にくわえて、事務所を出た。

3

タクシーを甲州街道の笹塚辺りでおり、少し入ったところにある八階建ての「白亜レジデンス」まで歩いて行った。名前の通り白亜の殿堂といった感じの洒落たマンションであり、普通のOLの住めるようなものではなかった。地下駐車場もついており、部屋は2DKから8DKらしいから、最低でも、四万円の部屋代はとられるだろう。

秋葉は、入口から入り、管理人室をノックした。顔を出したのは、四十五、六歳の中年の男である。糸のように細い眼は、優しげでもあり、狡猾そうでもあった。

秋葉は、相手の骨ばった手にたたんだ千円札を押しつけてから、「ここに佐久間理恵さんという女性が住んでいるね？」と念を押した。

「ええ。五階の三号室ですが、確か、まだ会社からお帰りじゃない筈ですよ」

「それはわかっている。彼女のことで聞きたいんだが、独りで住んでいるのかい？」

「ええ。一応は、お独りですよ」

中年の管理人は、ニヤッと笑って見せた。細い眼が、いよいよ細くなり、狡猾さが剝き出しになった。

「一応というのは男が時々やって来るということかね？　それとも今はやりの同棲でも？」
「一週間に二回くらい、すごい外車で男がやって来ますよ。年齢は四十歳くらい。どこかの社長か重役って感じですね。たいてい、夜の十時頃やって来て、朝早く帰って行きますよ」
「その男が、五〇三号室に入るのを見たのかね？」
「別に見るつもりはありませんでしたがね。あんな馬鹿でかい外車でやって来れば、嫌でも眼に入っちゃいますからね」
「その車の特徴や、ナンバーは？」
「ナンバーは覚えてませんが、うちの息子は中学一年生でカーキチでしてね。それは、フォードのムスタングマッハ1だといってましたよ。最新型の。ご存じですか？」
「ああ、知っている。スピードの出るいい車だ。それで、車の色は？」
「白ですよ。屋根だけ、黒のレザーでしてね」
「その四十男が、自分で運転して来るのかね？」
「ええ、独りですよ。やっぱり、女の所に来るのに、運転手を連れてくる馬鹿はいませんよ」
また、管理人は黄色い歯を見せて、ニヤッと笑った。
「彼女は、その男のことを、何と呼んでいたかわからないかな？」
「わたしね、立ち聞きはしませんよ」

「しかし、彼女が、その男を送り出すのを見たんだろう？　だから、君は、男の帰る時間を知っている」
「わかりましたよ。管理人というのは、朝の早い仕事でしてね。特にゴミ集めの日は、早くから、用意しとかなきゃならない。住人の中には、午前四時頃、ゴミを捨てに来る人もいますからね」
「その時、二人を見たろ」
「ええ、名残り惜しそうにしているところをね」
「それで、彼は、男を何と呼んでた？」
「名前はいってなかったけど、副社長さんと呼んでましたね」
「副社長か。今でも、週に二、三回は来るのかね？」
「それが、ここ一カ月ばかり、全然、来ないんですよ。他に、女でも作ったんじゃないですか。彼女の方も、来月になったら、ここを引越すといってますよ」
「来月まで、あと一週間だね？」
「ええ。今月分までの部屋代は払って頂いてますからね」
「その四十男の他に、彼女のところに来た男は？」
「いませんね。ただ、その男が来なくなってから、時々、妙な男が、五〇三号室を見ているのを目撃したことはありますよ」

「妙な男？」
「ええ、三度くらいだったかな。夜だったし、コートの襟を立てていたんで、人相は全然、わかりませんでしたがね。じっと、五〇三号室を見上げてるんですよ。道路の端で」
「何故、五〇三号室を見上げていたとわかる？」
「その部屋は五階の角で、そのときは、その部屋しか、まだ明りが点いていませんでしたからね」
「それを、彼女に話したのか？」
「ええ」
「彼女の反応は？」
「蒼い顔してましたよ。来月、引越すというのも、そのことが原因かもしれませんね。パトロンと気まずくなったらしいのも原因でしょうが」
「彼女は、どんな女性だね？」
「どんなって、若くて、美人ですよ」
「それはわかってる。知りたいのは性格だ」
「愛想のいい娘さんですよ。貰い物なんかあると、うちの息子にくれたりしましてね」
「若くて、美人で、愛想がいいか――」
そんな娘の命が、何故、狙われるのか。

4

秋葉は、いったん事務所に戻った。ソファに腰を下したとたんに、電話が鳴った。受話器を取ると、あの男の含み声が聞こえた。

「わざわざ、彼女のマンションまで行って、管理人に何を聞いたんだ？」

「尾行してたのか？」

「まあね。十万円も前金を払ったんだから、あんたが、きちんとやってくれるかどうか見守っていたいからね。殺しの準備段階として下調べに行ったのなら、歓迎だが――」

「だが、何だね？」

「若い美人だっていうんで仏心でも起こされると困るからな」

「何故、自分で始末しない？」

「あんたは、殺し屋だろ？　金が儲かるんだから文句はないだろう」

「そして、そっちは、自分の手を汚さずに済むというわけか」

「この世は、持ちつ持たれつというわけさ」

「もし、おれが、途中で嫌気がさしたら？」

「その時の用心は、ちゃんとしてあるよ」
男は、電話の向うで、クックッと小さく笑った。
「だから、下手な真似はしないことだな。こっちは、彼女だけ、一週間以内に死んでくれればいいんだ。あんたの死体まで見たくはない」
「それは、警告かね？」
「とんでもない。しっかりやってくれという激励だよ」
ガチャンと、電話は切れた。ちゃんと用心はしてあるというのは、秋葉の他にも、何人かに、彼女の始末を頼んであるというのか。秋葉が、殺し屋でないと気付いた時には、そいつらが、彼女と一緒に、彼をも消そうとするだろう。
（面白い）
と、秋葉は思った。危険が大きければ大きいほど、彼は、生きているという充実感を覚えるのだ。群集の中を、ぼんやり歩いている時、秋葉は、自分が生きているという実感を持てない。だが、鋭い空気を引き裂く音を残して、耳元を弾丸がかすめる時、秋葉は、自分が、今、生きている実感を持てるのだ。
秋葉は、近くの中華料理店から夕食を取り寄せて食べてから、白亜レジデンスの五〇三号室のダイヤルを回した。しばらく待たされてから、若い女の声が電話に出た。少し甘い感じのす

るアルトだった。

「僕の名前は秋葉京介だ。フォードムスタングに乗って、君に会いに来ていた男のことで、ぜひ、話したいことがある」

何の前置きの言葉もなく、いきなりいうと、相手は、言葉に詰ったように、一、二分、黙ってしまった。その間に、秋葉は、受話器を耳に当てたまま、片手を伸ばして煙草を取って口にくわえた。火をつけたとき、やっと相手の言葉が電話に戻ってきた。

「何故、あたしに？」

「理由は会ってから話す。明日の昼休みに昼食でもどうかな。君と食事をしろと、お金をくれた奇特な人間がいるんでね」

「本当に大事な話なの？」

「ああ。聞いて損はない筈だ」

「わかったわ。うちの会社の近くに、ステーキの美味い店があるの。名前は『白い城』そこに十二時十分までに行ってるわ。一時まで昼休みだから」

「OK」

「でも、あたしは、あなたの顔も知らないんだけど」

「その点は大丈夫だ。僕が、君の顔を知っている。じゃあ、明日、十二時十分に」

受話器を置くと、秋葉は、新聞の株式欄に眼を通した。彼女が働いている三田村石油は、第一部には上場されていない。石油会社としては、中堅どころなのだろう。だが、面白いことに、中東戦争の後遺症や、産油国（ＯＰＥＣ）などの値上げ攻勢がたたって、一部に上場されている石油会社の株が一様に下っているのに、二部に上場されている三田村石油の株だけが、大幅に上っていた。理由はわからない。

秋葉は、ある事件を通して知り合った証券会社の友人に電話してみた。

「君が株に手を出すとは思わなかったな」

と、友人は笑った。

「僕が買うわけじゃない。第二部に上場されている三田村石油のことを聞きたいんだ。他の石油会社の株が軒並み下っているのに、何故、三田村石油だけ上っているんだ？」

「君もなかなかいい所に眼をつけるじゃないか。三田村石油なら、まだ買いだよ」

「買占めか乗っ取りの情報でもあるのか？」

「その方の情報は、まだ入ってないが、中東戦争が始まったとたんに、他の石油株が、一斉に下げたのに、三田村だけは一挙に二〇円も上げ、今でも少しずつ上げ続けている。これだけいえばわかるだろう？」

「中東石油に関係がない会社なのか？」

「そうだよ。日本の石油は、大部分、中東から運んでいるが、三田村社長は、カリマンタンに眼をつけた。昔のボルネオで、太平洋戦争のとき、ここの石油に日本軍が眼をつけた所だ。インドネシア政府と合同で、ボーリングを始めたのが五年前、二年前に見事に新しい油田を開発した。他にも有望な油田が見つかったらしい。インドネシアは、今のところ政情が安定しているし、船で運ぶにしても、中東に比べて、はるかに近いからコストも安くなる」

「成程な」

「ところで、三田村石油の社長が、一カ月前に飛行機事故で死んだのは、当然、知っているだろう？」

「死んだ？　どこかで見た名前と思っていたんだが、新聞に出ていたんだろ」

「三田村大造というのは、五十を過ぎても行動的な男でね。自分でセスナを飛ばすのが好きだった。一カ月前に、彼の操縦していたセスナが、多摩川の河原に墜落炎上して、死亡した。エンジントラブルとか、操縦ミスとかいわれたものだよ」

「面白い話を有難う」

「また危険な事件に首を突込んでいるのか？」

「危険かどうか、まだわからん。危険な方が面白いがね」

5

翌日、小雨の中を、秋葉は、虎の門の近くにあるステーキハウスに出かけた。「ホワイト・シャトー」と、英語とフランス語のチャンポンの店名がついているのも、現代風俗の一つだろう。

その六階がレストランになっていて、窓際の席に、写真の女、佐久間理恵が腰を下していた。写真の顔よりいくらか大人びて見えた。

秋葉は、向い合って席に着くと、「やあ」と、彼には珍しい笑顔を見せた。

「あなたが、電話を下さった人？」

「そうだ」

と、肯いてから、秋葉は、注文を聞きに来たウエートレスに、「この人と同じものを」と頼んだ。

「食事をしながら、ゆっくり話したい」

「でも、何のことか、あたしには、さっぱりわからないんだけれど」

「あんたの笑顔は、さぞ魅力的だろうね」

「え？」

「僕と君とは、間違いなく見張られている。だから、これから僕の話すことが、どんなに突拍子のないことでも、平気な顔をして、出来れば笑って貰いたいということだよ」

秋葉は、運ばれて来た分厚いステーキに、ゆっくりナイフを入れながら、低い声でいった。彼女は首をかしげている。無理もないだろう。秋葉は初対面なのだから。秋葉は、構わずに、話を続けた。

「誰か妙な人間がいて、僕を殺し屋と間違えて金を送って来た。君を殺してくれというんだ」

「――――」

一瞬、彼女のフォークが宙で止まった。

「笑って」と、秋葉は、小さい声でいった。

「僕は危険は好きだが、殺し屋じゃない。むしろ逆の人間といってもいい。できれば君を助けたい。だから、何故、君のような若い女を殺したい人間がいるのか、それを知りたいんだ」

「あたしには、全然、見当もつかないけど」

「君は、副社長の二号なんだろう？」

「二号じゃありません。あたしたちは愛し合っているわ」

「じゃあ、愛人でもいいさ。だが、一カ月前から、君の愛する人は、あのマンションに来なく

なったようだね」
「それは、社長が飛行機事故で亡くなって、あの人が社長になり、急に忙しくなったから。それだけのことよ」
「例のセスナ事故か。しかし、いくら副社長といっても、四十過ぎの男だろう？」
「四十五」
「君は、二十代の若さで、それに美人だ。何故、そんな中年男が好きになったんだ？」
「最初は、同情だったわ」
「ほう、同情ね」
「あの人、一応は副社長ということになってましたけど、会社の実権は、お兄さんが、ひとりで持っていらっしゃった。あたしは、社長秘書をやっていたから、そういうことはよくわかったの。あの人とすれば、毎日、面白くなかったと思うわ。そんなことで同情して」
「同情が、愛情に変ったというわけか？」
「そうかもしれない」
「君は、あの人といっているけど、本当の名前は？」
「三田村忠雄」
「勿論、奥さんはいるんだろうね？」

「いいえ、女遊びはしていたけど、奥さんはいない人よ」
「その彼が、社長の飛行機事故で、今や社長の椅子についた。君も上手くいけば、社長夫人になれるというわけか？」
「あたしには、そんな野心はないわ。あの人を慰めてあげただけで満足。今度、念願の社長になれたんだから、あたしの慰めも、もう要らないから、身を退こうと考えているくらいだわ」
「そいつは殊勝な心掛けだね。近頃、珍しい美談というべきだな。もっとも、男から見てだが」
「嘘じゃないわ。だから、あのマンションからも、今月中に引き払おうと思ってるの。あの人は、いつまで住んでいてもいいっていってくれてるけど、社長になれば、忙しいのはわかっているし――」
「前の社長が、セスナで死んだ時のことは覚えているかね？」
「ええ。はっきり覚えてるわ。日曜日で、あの人が、昼からマンションに来てたわ。夕方、何気なくテレビのスイッチを入れたら、社長が、事故で死んだと、いきなり出たのよ。自分でも、血の気のひくのがわかったわ」
「その時の三田村忠雄の反応は？」
「社長の弟ですもの。すぐ、車を飛ばして現場へ駈けつけて行ったわ。あたしも同行したかっ

たけど、そうするわけにもいかず、電気もつけず、しばらく、部屋の中で、じーっとしていたのを覚えているわ」

「あのセスナ事故が、仕組まれたものだという噂を聞いたことはなかったかね？」

「事件の直後は、いろいろな噂があったわ。うちの社長は、やり手で敵が多かったから。でも、結局、あの事故は、エンジントラブルか、操縦ミスということになったわ」

「君の好きな三田村忠雄が仕組んだとは思わなかったかね？」

「全然、だって、兄弟じゃありませんか」

「だが、会社の実権を兄に握られて、毎日、うつうつとして楽しまなかったと、君もいった筈だ。四十五歳にもなってそんな状態だったら、ひょっとして、社長の椅子を狙ったかもしれん」

「馬鹿なことはいわないで！」

ガチャンと、皿とフォークがぶつかって音を立てた。しかし、秋葉は、平然と、食べ終り、煙草をくわえた。

「ところで、君自身のことだが、確かに殺されるような覚えはないかね？」

「ないわ」

「しかし、君は、今でも社長秘書をやっているんだろう？」

「ええ」

「しかも、現社長とは、愛人関係でもあった。上手くいけば、社長夫人にもなれる立場にいる。とすれば、君が気付かなくても、いろいろと、ねたまれたり、邪魔者扱いされたりすることは、当然あり得るね。一例をあげれば、三田村石油の社長になった三田村忠雄の夫人の椅子を狙っている女がいるとすると、その女にとって、君の存在は邪魔な筈だ」

「あたしは、今もいったように、社長夫人になろうなんて野心は持っていません」

「君はそうでも、相手は、そうは考えないかもしれないね」

6

彼女に名刺を渡して、小雨の中を事務所に戻ると、一時間ほどして、電話が鳴った。秋葉は、苦笑して受話器をつかんだ。案の定、例の男の含み声だった。

「直接本人に会うなんて、どういう気なんだ？」

男は、答めるようないい方をした。

「おれは、殺す相手のことを、徹底的に調べる主義でね」

「まあ、いいだろう。とにかく、君は、今日で二日間空費した。あと五日間の中に、佐久間理

恵の死亡記事が新聞に出るようにするんだ。前金は払ったし――」
「監視の目も光ってるか」
「君が裏切ったら、彼女だけでなく、君の死亡記事も、新聞にのることになるんだ」
「何故、あと五日間に拘るんだ？」
「今月末で、彼女は、あのマンションを出る。そうしたら、殺しにくくなるからだ」
「もっともらしい理由だな。もう一つ、何故、彼女を消したいんだ？」
「そんなことは、君の知らなくていいことだ。下手に嗅ぎ廻ったりせず、頼んだことだけやってくれればいいんだ。そうすれば、君も無事だし、成功報酬として百万円を送ってやるよ」
「そいつは有難いね」
秋葉の言葉の途中で、相手は、電話を切ってしまった。
秋葉は、窓の外に眼をやった。この辺りもビルが林立している。そのどこかの窓から、相手の男は、こちらを監視しているかもしれない。それに、相手、ひとりでもなさそうだ。が、恐怖感はわいて来ない。むしろ、面白くなりそうだという予感が、秋葉を興奮させる。
たった一人のＯＬを殺す。それだけでないものを、秋葉は、敏感に感じとったからだ。だからこそ、向うも、殺し屋と間違えた秋葉に、前金を払ってまで、殺しを頼んだのだろう。
（飛行機事故と石油戦争、それに社長と愛人か）

事件になりそうなものが揃い過ぎている。セスナが飛べる所といえば、東京なら、調布飛行場だろう。

秋葉は、まだ小雨の降る中を、タクシーを拾い、調布飛行場に向って走らせた。彼は、途中で、うしろを見たりはしなかった。自分の行動が監視されているのはわかっているし、その結果、向うが、どんな行動に出てくるかにも興味があったからだ。秋葉が殺し屋じゃないと気付けば、相手は、電話で予告した通り、彼女と彼の二人を消しにかかってくるだろう。その時こそ、本当の危険が襲いかかってくるわけだが、それもまた面白い。

調布インターチェンジの北にある調布飛行場は、小雨に煙り、さまざまな色に塗られた民間の軽飛行機が、肩を寄せ合うように並んでいた。

ヒーターの利いた車からおりると猛烈に寒い。秋葉は、コートの襟を立て、近くにあったプレハブ造りの事務所に飛び込んだ。

皮ジャンパー姿の中年男が、ひとりで、石油ストーブにあたっていた。壁の黒板には、飛行スケジュールのようなものが書いてある。

「あんた、誰だい？」

男は、うさん臭そうに、秋葉を見た。

「一カ月前の飛行機事故について聞きたくてね」

秋葉は、勝手に空いている椅子に腰を下した。
「新聞記者さんか？」
「似たようなものだ。一カ月前に、三田村大造という石油会社の社長が、セスナで事故を起こして死んだね？　覚えているかい？」
「覚えているとも。その時は、やたらに質問されたからね」
「あんたの仕事は？」
「ここで、操縦を教えている」
「三田村大造も、あんたの生徒だったわけか？」
「形の上ではね。だが、あの人は、もうベテランだったよ。一週間に一度は乗っていたからね。だから、あの日だって、安心して、単独飛行をやらせたんだ」
「だが事故が起きた」
「ああ。視界良好、風速は二メートルの微風。事故の起きる条件なんか何もなかったのにね」
「専門家のあんたが見て、何故、墜ちたと思う？」
「わからんね。操縦ミスと書いた新聞もあったが、あの人ほどのベテランが、そんなヘマをやる筈がないし、セスナは安定のいい飛行機だからね」
「じゃあ、エンジントラブル？」

「エンジンは前日の土曜日にチェックしたよ。一つだけ、おれが気になったのは、墜落した河原の近くの人が、ドカンという爆発音を聞いたといっているんだ」
「じゃあ、時限爆弾を仕掛けられた可能性もあるわけだな？」
「しかし、証拠はない。エンジン部分は、こっぱみじんになっていたし、爆発音を聞いたという人は一人しかいなかったからね」
「だが、面白い話だ。社長のセスナは、誰にでも、すぐわかったかね？」
「名前がついていたからね。マキ号だ」
「変な名前だなあ」
「奥さんの名前が真樹子で、それをつけたということだったね。何でも、奥さんもすごい金持ちの娘で、あのセスナは、奥さんのプレゼントだったって話だよ」
「三田村社長の弟を知っているかね？　年齢は四十五歳。フォードムスタングに乗っている男だ」
「知っているよ。弟さんも、奥さんも、時々、ここへ来たし、三田村さんは、家族を乗せて、飛ぶことがよくあったからね」
「事故のあった日に、家族はここへ来たかね？」
「さあ、おれは、あの時飛行場の隅っこの方で、卵たちを教えてたからわからんね」

「彼の飛行機が飛び立った正確な時間は？」

「午前十一時。いつも、あの社長さんは、その時間に飛び立って、二時間ばかり飛行して帰ってくる。あの日は、三時間たっても、四時間たっても帰って来ないんで心配してたら、午後四時過ぎに、多摩川の河原に墜落しているのが見つかったんだよ」

（午前十一時か）

秋葉は、ステーキハウスで、佐久間理恵から聞いた言葉を思い出した。彼女は、事件の日、愛人の副社長が十二時に来たといった。しかも、あの白亜レジデンスは、甲州街道に近く、この飛行場から車を飛ばせば、一時間とかからない筈だ。

会社の実権を握っている兄、四十五歳になっても、名目だけの副社長の椅子で、うつうつと楽しまず、若いＯＬとの情事で気をまぎらわせていた弟、ふと、自分を押えつけて来た兄を殺し、会社の実権を握りたいという野心に燃えたとしても不思議はない。そして、計画どおり社長の椅子についた彼は、自分と長くつき合っていた女を消しにかかった。理由はわからない。自分のことを知り過ぎているからか、それとも、一緒に寝ているとき、ついうっかり兄を殺すことを話してしまったか。そんなところだろう。

秋葉は、墜落したセスナと同じ型の飛行機を見せて貰った。座席は四つ。エンジンカバーを外すと、かなり空間があることがわかった。これなら、エンジン部内にでも、座席の後部にで

も、時限爆弾は仕掛けられるだろうし、時計仕掛でセコンドの音がしていても、エンジンの音で、気付かなかったろう。

中年の教官に礼を述べ、相変らず降り続く氷雨(ひさめ)の中を、秋葉が事務所に戻ったのは、夕暮が濃くなってからだった。

ドアを開け、明りのスイッチを手探りで押そうとした瞬間、いきなり、後頭部をしたたかに殴りつけられた。

7

一七五センチの彼の身体がよろめく。秋葉は、自分から、わざと、ダイビングするように床に転がり、部屋の隅まで滑っていって、倒れたまま、じっと動かずに、眼だけドアのところに向けた。それは、襲われた動物が、仮死をよそおうのに似ていた。暗さに眼が慣れるにつれて、ドアのところに、黒い人影が見えてきたが、その影は、ふいに、ドアの外に消え、足音が遠去かって行った。

秋葉は、ゆっくりと立ち上がり、殴られた首筋を撫でながら明りをつけた。殴ったのは手らしく血は出ていないが、ズキズキするのは、相手に空手の心得でもあるのか。

電話が鳴った。秋葉は、受話器をつかむ。
「今のは警告だ」
と、例の男の含み声が聞こえた。
「ご苦労なことだな。息が弾んでるじゃないか。このビルから逃げ出して、近くの公衆電話からでも掛けてるのかね」
「余計なことをいうな。今月一杯の仕事だということを忘れるな。それから、調布飛行場なんかへ行けといった覚えはないぞ。殺し屋が殺されるような妙なことにならないように注意するんだな」
それだけいうと、相手は、勝手に電話を切ってしまった。秋葉は、思わずニヤリとした。この雨の中を、調布飛行場まで尾行して、警告したということは、何か向うにかくしたい証拠があるからに違いないからだ。秋葉は、冷蔵庫の上に投げ出してあった西洋梨を噛りながら、相手が、今月末までと限定する理由を考えてみた。佐久間理恵が、今月末であのマンションを引越すからだと、相手はいったが、勿論、秋葉は信じていなかった。
秋葉は、彼女のダイヤルを回した。また、いくらか甘い感じの声が聞こえた。
「今日会った秋葉京介だが、一つだけ頼みたいことがある」
「どんなこと？」

「君の副社長、いや今は社長か。彼に一度会いたいんだがね」
「無理よ」
「君から頼んでくれれば、何とかなる筈だ」
「今月一杯は駄目だわ。関西に出張なさっているから」
「関西に、何しに？」
「大阪に、サンオイルカンパニーという会社があるのよ」
「知っている。石油会社としては、大メーカーだ。アメリカ系資本の」
「そこの社長に招待されたのよ」
「用件は？」
「一応は新社長を歓迎したいということだけど、合併の話だと思うわ。前の社長の時から、向うは、合併の話を、時々、持ちかけて来ていたから」
「今の社長は、それに乗り気なのか？」
「いいえ。亡くなった社長も、今の社長も反対の筈よ。合併になれば、資本力が段違いだから、うちの会社なんか、向うに呑み込まれてしまうし、向うが欲しいのは、カリマンタンの採掘権だったこともわかってるし――」
「そういえば、サンオイルカンパニーの方は中東石油一本で、今、苦しい立場だな。それなの

に、何故、社長は、のこのこ大阪まで出かけて行ったんだ？」
「サンオイルの社長は、うちの大株主だからだと思うわ。三〇パーセントぐらい持ってるんじゃないかしら」
「果して、それだけの理由かな？」
「どういうこと？」
「いや、こっちのことだ」
秋葉は社長の泊っているホテルの名前を聞いてから、電話を切り、喰いかけの梨を、屑籠に放り込んだ。
（アリバイ作りではないのか）
すぐ秋葉の頭に来たのは、そのことだった。佐久間理恵が殺されれば、一番最初に疑われるのは、彼女を囲っていた現社長の三田村忠雄だ。サンオイルカンパニーの社長に招待されて、大阪にいる間に、彼女が消せれば、完全なアリバイが成立する。電話の男は、多分、三田村忠雄の忠実な番犬だろう。彼が、今月末までに、やたらに日時に拘るのは、そのために決っている。三田村忠雄が東京に帰って来てからでは、完全なアリバイがなくなるからだ。他に考えようはない。
（だんだん面白くなる）

と、秋葉は、不敵に笑った。こんな時が一番楽しい時だ。そして、一番危険な時でもある。

翌日、階下の郵便受けには、タイプ印刷された封筒が入っていて、「あと四日。約束を忘れるな」と書かれた便箋が入っていた。勿論それも邦文タイプだ。

苦笑しながら事務所にあがると、電話が鳴っていた。また、あの男からの殺しの催促かと思ったが、証券会社の友人からだった。

「例の三田村石油の株がまた上っているぞ。買い時だと思ってね。冒険なんかやめて、金儲けをやったらどうだ」

「昨日の夕刊で、また五円上ったのは知ってるよ」

「いや、今日も、また上っている。中東問題の余波としても、上り過ぎると思ったら、どうやら、誰かが買い占めをやっているらしい」

「誰だい？」

「わからん。だが、一人だけちゃんと名前をいって買っている男がいる。三田村石油の営業部長だ。もっとも、彼は社長の命令で、買い支えているんだがね」

「必死になって、乗っ取られるのを防いでいるというわけか」

「もっとも、彼は、そういうことは秘密にして欲しいといっている。変な噂が流れるのが怖いんだろう。だから、その営業部長も、肩書のない、個人の資格で買っている。表向きはね」

「買い占めをやっているのは、サンオイルカンパニーだよ。多分」
「あの大資本が？」
「まず間違いないな。もっとも、おれには関係がないが、君へのお礼だ」
「いや。有難う。あの大資本が乗り出しているとなると、当分、三田村石油は上り続けるな」
「君が買って儲けるんだな」
それだけいって、電話を切ると、秋葉は、大阪へ行くことにした。佐久間理恵を殺させたくない。そのためには、まず、現社長の三田村忠雄に、じかにぶつかってみることだと考えたからである。このままでいけば、相手は、彼女と秋葉の二人を消しにかかるだろう。
秋葉は、その日の中に、新幹線に乗り、午後四時には新大阪に着いていた。
ニューロイヤル大阪ホテルに、三田村忠雄は、丁度、サンオイルカンパニーの社長との会合から戻って来ていた。
秋葉は、フロントで、六〇一二号室の三田村忠雄に、サンオイルカンパニーの弁護士だと伝えてくれといい、ロビーのソファーに腰を下した。
しばらくして、四十歳位で、痩せて背の高い男が降りて来て、フロントの指さす秋葉の方を見た。銀縁の眼鏡がいくらか嫌味だが、紺のダブルが長身に似合っている。その男は、怪訝そうな顔で、秋葉の前に腰を下すと、

「私が三田村だが、あなたのような弁護士が、サンオイルカンパニーの吉村社長の弁護士にいるとは知らなかったが」
「弁護士というのは嘘ですよ。そういわないと会ってくれないと思いましてね」
「君は一体誰だ？　何の用だ？」
「名前は秋葉京介。佐久間理恵という若い女のことで、わざわざ東京からやって来た男です」
「佐久間理恵のことで？」
「もし、彼女が殺されたら、僕は、あなたが、大阪にいるアリバイを作っておいて、ひそかに東京に舞い戻ったと警察に証言しますよ。それは覚悟して貰いたいと思いましてね」
「彼女が殺される？　君の言ってることは、何のことか、さっぱりわからんね」
三田村忠雄は、眉を寄せた。秋葉は、この狸が、と内心思いながら、顔だけは、ニヤッと笑って見せた。
「とにかく、彼女が死んだら、僕は、あんたが殺したと偽証する。それを覚悟して貰いたいですね」
「まるで、私が、彼女を殺したみたいないい方だが」
「違うんですかと聞いても、まともな返事はなさらんでしょうが、僕は、しつっこい人間でしてね。一人の人間を救うためなら、どんな卑劣な手でも使う。偽証でもなんでもね」

「君は、何か誤解しているようだが、私がここへ来たのは――」
「サンオイルカンパニーの社長と、合併の話で呼ばれたからでしょう？」
「そうだ。すぐにも帰京したいんだが、いろいろと引き止められるし、今月末といってもあと四日だが、最後の返事をしてくれといわれているんでね」
「それが同時にアリバイ作りにもなる」
「どうも、君の言うことはよくわからんが、明日、ゴルフでもやりながら、ゆっくり話し合おうじゃないか。彼女のことなら、私も気になるからね」
「いいでしょう」
「午前中は、吉村社長と会う約束なので、午後二時からにしよう。このホテルの経営しているコースが裏にあるから、ここで待っていてくれ給え」

8

翌日の午後二時かっきりに、三田村忠雄はロビーに姿を現わし、秋葉を誘って、ホテルから歩いて五、六分の林間コースに出た。服装も、クラブも借りものである。
「君は、彼女と、どんな関係かね？」

三田村は、ボールをティーアップしながら、秋葉に話しかけた。
「別に何の関係もありませんがね」
「ふーん」
三田村は、鼻を鳴らしてから、第一打を打った。風は冷たいが、晴れ渡っていて気持がよかった。秋葉も黙って、ドライバーを持った。二人ともだいたい技倆は同じくらいで、池越えで、二五〇ヤードばかり飛んだ。
秋葉は、並んで歩きながら、相手の様子を窺った。が、別に動揺した色も見せていない。相当な狸だなと思いながら、並んで、池にかかった狭い木の橋を渡り始めたときである。
突然、冬の静寂な空気を引き裂いて、銃声がとどろいた。
右隣りを歩いていた三田村が、「うッ」と唸き声をあげて、橋の上によろめいて腰をついた。
秋葉も、とっさに身体をかがめ、右手の丘に眼を走らせた。
三田村は、腰をついたまま、右手を押え、うめき声を上げている。上膊部の辺りから血が流れ、白いセーターを、朱く染めているのが見えた。
二発目は飛んで来なかった。五十メートルばかり後についていたキャディは、呆然として橋のたもとの所で立ちすくんでいる。
「大丈夫ですか？」

秋葉は、ハンカチで、相手の傷口を押えてやりながらきいた。
「大丈夫だ。かすっただけだ。犯人は？」
「もう、とっくに逃げちまったでしょうね。あの丘の向うは道路になっている筈ですから。それに、これは、あんたを狙ったんじゃなくて、狙いは僕ですよ。それも、警告で撃ったんです」
「警告？」
三田村は、右腕を押えて、のろのろと立ち上った。かすっただけというのは本当らしく、血は、もう、止まっているようだった。さすがに蒼い顔をしていたが、動作は落着いていた。
「これじゃあ、もうスイング出来ん。誘っといて悪いが、ホテルに帰らせて貰うよ」
「賛成ですね。僕も、こんな見晴らしのいい場所で、もう一度、警告されるのは、嬉しくありませんからね」
二人は、ホテルに帰り、秋葉は、自分の部屋に入った。
ベッドに近い電話が鳴り「東京からです」と、交換手が言ったのは、三十分ぐらいしてからだった。例の男の含み声だった。
「何故、そんな所にいるんだ？　おれが頼んだのは、東京に住んでいる女だぞ」
「わかってるよ。だが、おれは、一寸野次馬精神が旺盛なんだ。それにしても、わざわざここ

までやって来て警告するのはご苦労さんだが、やるなら、もっと上手にやるんだな」
「何のことだ？」
「呆けなさんな。発砲するのは自由だが、君の親玉を怪我させることはないだろう。あんな粗末な腕じゃ、おれに頼む筈だ」
「一体、何をいってるんだ？」
「撃つときは慎重にやれということさ」
言いたいことだけ言って、電話を切ってしまった。が、切ってから、秋葉の顔色が変った。あわててもう一度、受話器を取り、交換手に聞いたが、東京からに間違いないという。秋葉は、じっと腕時計に眼をやった。ゴルフ場で狙撃されてから、まだ一時間しかたっていない。例の電話の男が犯人なら、一時間後に東京にいることは、物理的に不可能だ。飛行機を使うにしても、ここから伊丹の飛行場へ行くまでに、二十分はかかってしまうだろう。すると他にも仲間がいることになるが、そうなら、何故、あんな驚いたような電話になったのか。
（ひょっとすると、おれは大変な間違いをしているのかもしれない）
秋葉は、部屋を飛び出すと、三田村忠雄の泊っている六〇一二号室に向って、廊下を走った。
三田村は、右腕に包帯をし、パイプをくわえて、書類に眼を通しているところだった。
「あなたに聞きたいことがある」

秋葉は、立ったまま、まっすぐに相手を見た。
「何だね？」
「前の社長を、飛行機事故に見せかけて殺したのは、あなたか？」
「兄を？　冗談じゃない」
「じゃあ、これは単なる事故だと？」
「いや。私は、兄の死に疑問を持って警察に再調査を頼んだ」
「先廻りして、疑いを解く方法をとったのかもしれない」
「ノーだ。あの時、警察も新聞も、エンジントラブルか、操縦ミスということで片付けていた。だが、私は信じられなくて、調査を頼んだんだが、結局、うやむやになってしまったがね」
「あなたは、サンオイルとの合併に賛成なんですか？」
「いや、兄も反対だったし、私も反対だ。それは、今日、吉村社長に会った時も、お話ししておいた」
「反対なのに、何故、大阪に来て、一週間もいるんですか？」
「それは、さっきも話した通り、相手は大株主だからね。それに、私は、この際、吉村さんの持っている三〇パーセントのうちの株を買い戻させて貰おうと思っているんだ。中東があんな具合で、うちの社のカリマンタン開発が注目され出したから、なかなか手放してはくれないだ

ろうがね」
「あんたは、自社株をどの位、持っているんです？」
「三二パーセント。私の、というより兄から譲られた形のものだがね」
「あなたが死んだら、三田村石油はどうなります？」
「さあ、どうなるかな。私はひとり者だし、死んだ兄に子はないからね」
「未亡人は？」
「義姉は病弱だし、会社の仕事には、興味のない人だ」
「すると、大株主のサンオイルカンパニーが乗り込んでくることも考えられますね」
「君は、何がいいたいんだ？」
「あなたが、こっちへ来ている間、営業部長が、株を買い集めているそうですね？」
「よく知ってるな。どうしても、過半数を持っていたいのでね。業績が上っている今、会社の基礎を盤石なものにしておきたいんだ」
「営業部長個人の名前で、買い集めていますね？」
「ああ、私の名前で集めれば、すぐ噂がたって、乗っ取り屋が介入してくる恐れがあるからね」
「それは、営業部長の進言ですか？」

「そうだ、私も賛成した」
「ところで、佐久間理恵のことに話を移しますが、彼女をどう思っているんです？」
「何故、そんなことを、君にいわなきゃいかんのかね？」
「理由はいえませんが、誰かの命がかかっていると思うからです。単なるセックスの相手ですか？」
「最初は、そうだった。だが、そうはいかなくなった。それは――」
「彼女が妊娠した？」
「何故、知っている？」
「今、直感的に閃いたんです」
「今、三カ月だ」
三田村は、低い声でいった。
「後女は、堕すといった。が、私は、産めといった。まあ、私としたら、不器用なプロポーズの積りだったんだがね」
「あんたは、今でも、お兄さんの死が、単なる事故や操縦ミスじゃないと思っていますか？」
「ああ。兄に、セスナに乗せて貰ったことがあったが、操縦は慎重だったし、少しでも、エンジンの音がおかしいと、すぐ飛行場へ引き返した。そんな慎重な兄が操縦ミスを犯す筈がない

からね」
「そのことを、警察の他に、誰かに話しましたか？」
「彼女にだけは話したよ」
「そうですか――」
秋葉は、急に、部屋の中を、熊のように歩き廻り始めた。三田村が、椅子に腰を下したまま、怪訝そうに見上げて、
「一体どうしたんだ？　さっきは、彼女が死んだら私をどうかすると脅したり――」
「さっきの事件は、警察にいいましたか？」
「一応知らせておいたよ。君が来る少し前に刑事が二人来て、事情を聞いて帰ったところだ」
「それはよかった。警察がうろついてくれれば、向うも、一寸、手を出さなくなるでしょう」
「あれは、君を狙ったんじゃないのか？　君は確かにそういった筈だ」
「そうしておきましょう。ところで、サンオイルカンパニーは、アメリカ系資本だから、在日米軍にも、石油を供給しているんでしょうね？」
「そういう話だ」
「それなら、米軍から銃を手に入れるのも楽ということになる――」
「何だって？」

「いや、独り言です。あなたが、最終的な返事をするのは、三日後でしたね？」
「そうだ。答はノーと決っているがね」
その言葉の途中で、秋葉は廊下に出て、自分の部屋に向って歩き出していた。
（陰謀か）
と、秋葉は、蛍光灯の光る廊下を歩きながら呟いた。
（このおれが、それに引っかかるところだった）

9

翌日、秋葉は、東京に戻ると、忙しく、東京の街を歩き廻った。
まず、三田村石油に電話をし、それから、あるマンションに出かけ、上野に廻ると、どんな鍵でも作ってみせるというオヤジに、鍵型を渡して頼んだ。
その鍵が出来るまでの間、証券会社の友人に電話し、三田村石油の株の動きを聞いた。思った通り、依然として上り続けているが、三田村石油の営業部長が、個人の名前で、買い集めているという。
「おれも便乗して、二日で十万ばかり儲けさせて貰ったよ」

と、友人はご機嫌な声でいった。

鍵が出来ると、秋葉は、前のマンションに引き返し、いったん事務所に戻った。郵便受けを見たが、例の封筒は入っていなかった。暗くなるまでソファに横になっていたが、例の電話も掛って来なかった。

(どうやら、思った通りだ)

と、コンクリートが剝き出しの天井を見上げて、秋葉は、小さく笑った。しかし、その笑いは、会心のものではなかった。昨日まで、完全に、ある人間のトリックに引っかかってしまっていたからだ。腹が立つ。が、怒るに怒れないところがあるから、秋葉は、笑うより仕方がない。

秋葉は、少し眠った。

彼は、どんな時でも夢を見ない。眼覚めた時、外も、事務所の中も暗くなっていた

窓を開けると、寒い凍りつくような冷たい風が吹き込んで来た。どうやら、今年になって一番の寒さのようだ。

秋葉は、顔をしかめながら、テープレコーダーを組み込んだFMラジオを下げて事務所を出た。

電車に乗り、ある駅でおり、今日きたマンションの近くの小さな公園のベンチに腰を下した。

三十坪ぐらいの小さな公園の上に、この寒さでは、アベックの姿もない。秋葉は、コートの襟を立て、煙草に火をつけた。今夜は、多分、夜通し、こうしていなければならないだろう。風が出て来て、無人のブランコを、ガタガタゆする。それが、一層、彼に寒さを感じさせた。

（今度は、南洋諸島あたりの仕事をやりたいものだな）

秋葉は、二本目の煙草に火をつける。寒さは苦手だった。気のせいだろうか、煙草の火がついている時だけは、温かく感じられた。

彼の足元に、煙草の吸殻が多くなり、それにつれて、冬の夜が、少しずつのろのろと明けていった。一度、警邏の警官が来たが、その時は、公園内のトイレにかくれ、またすぐベンチに戻った。ここにいることが必要だったからである。

朝が来ると、秋葉は、白い息を吐きながら立ち上がり、公園を出ると、疲れた顔で、自分の事務所に戻った。

ウイスキーをたらした熱いコーヒーを一杯のみ、そのあと、冷蔵庫を開け、昨日盗み出したものが、トランクに入ったまま、そこにあるのを確かめてから、ソファに横になると、泥のように眠りこけた。

途中で例の電話で起こされることもなく昼過ぎまで眠り続けた。そのあと昼食をとり、三時に郵便受けを見に階下におりてみたが、タイプ印刷された封筒は入っていなかった。期限まで

あと二日になったのに、催促の電話も鳴らない。秋葉の予期した通りだった。彼の推理が当ったのだ。

夜七時過ぎに、秋葉は、テープレコーダーを持って事務所を出た。相変らず寒い。吐く息が白くなる。

秋葉は、管理人室で在宅を確めてから、そのマンションの階段をあがっていった。正確にいえば、公庫分譲住宅というべきなのだろうが、秋葉には、鉄とコンクリートで出来た高層住宅は全て同じに見える。

「高見沢」と書かれたドアをノックし、顔を出した四十五、六の男を、押し込むように、秋葉も部屋に入った。

小柄な相手の男は、秋葉に押されてよろけながら、血相を変えて、彼を睨んだ。

「何だ！　君は」

「秋葉京介。あんたは、三田村石油の営業部長、高見沢喬一郎だろう？」

「それがどうした？　私は、お前みたいな男は知らん」

「こっちも、初対面でね。細君や子供は？」

「用があって、故郷に帰ってる。それがどうした？」

「道理で、昨日、あんたの留守中に入った時も、誰もいないと思った。あんたのためにも、そ

の方がよかったがね」
「泥棒か？　きさまは」
「泥棒が、ドアをノックして入るかね？」
「じゃあ、何だ？」
「忘れ物を取りに来たのさ」
秋葉は、相手を無視して、さっさと、電話のある居間に入って行った。呆気に取られていた相手は、急に、傍にあった、ステンレス製の柄の長い靴ベラをつかんで振りあげた。気配でふり向いた秋葉が、ニヤッと笑った。「そんなものじゃあ、人間は殺せないねえ」
その一言で、相手は、気勢をそがれたように、のろのろと、振りあげた靴ベラを下におろした。
秋葉は、電話の置いてあるテーブルの下から、マッチ箱大の小さな黒いケースを取り出して、相手に見せた。
「忘れ物はこれさ。おれは、こういうオモチャは嫌いなんだが、相手が、あんたみたいな人間じゃあ、使うより仕方がなかった。表面上は、勤続二十年。非のうちどころのない生真面目なサラリーマンだからな」
「そいつは――？」

「今はやりの盗聴器だよ。昨日の昼間、ここに仕掛けて、昨夜は、徹夜で、君の電話を録音させて貰った。おかげで、一寸、カゼを引いたがね」

秋葉の言葉で、高見沢の顔色が変った。が、秋葉は、それを完全に無視して、小型の盗聴器をポケットに放り込み、煙草をくわえて、無表情に相手を見た。

「夜中に、あんたが、大阪のサンオイルカンパニーの社長に電話した言葉を、この前の公園で、録音させて貰ったよ。三田村石油の株をやっと二〇パーセント以上、買い集めたと報告していた言葉をね」

「金が欲しいのか？　それなら――」

「金は、もう貰ってある」

「誰からだ？」

「それは、あんたには関係ない」

「私をどうする積りだ？」

「さあ、どうするかな。三田村石油生え抜きのあんたが会社を裏切った。その気持、わからないじゃないからね。男という奴は、ふと野心に燃える時があるものだからな。あんたが、自分の個人名義で三田村石油の株を集めた。それが二〇パーセントを越せば、サンオイル社長の持株と合わせて、株主総会を牛耳って、今の社長を追い出せる。あんたは、その功績として、何

を約束されたんだ？　社長の椅子か？　いや、社長は、サンオイルから送り込まれてくるだろうから、君はせいぜい副社長だな。それでも、営業部長で終るよりマシというわけか」

「君が何といおうと、私の集めた株は、私の個人名義になっている。私がどうしようと私の自由だ」

「しかし、その金は、君を信用した三田村忠雄が出したものだろう。サンオイル側は、合併の相談という名目で、三田村忠雄を一週間大阪に釘付けにしておいて、その間に、裏切り者の君が、大わらわで株を集めていたというわけだ。乗っ取り屋の介入を防ぐために、君の個人名義で株を集めておくというのは上手い言葉だったな。三田村忠雄は、すっかり君の言葉を信用していたからね」

秋葉はいったん、言葉を切り、相変らずの冷静な眼で初老のサラリーマンを見た。

「多分、あんたは、昨日までに、見通しをつけて、サンオイル側に連絡する筈だった――」

「何故、そこまで知っているんだ？」

驚愕の色が、高見沢の眼に表われた。それは、怯えの色でもあった。

「一寸した推理だよ。君からの報告がなく、三田村忠雄が、重ねて合併を拒否したので、サンオイル側は、昨日、非常手段に出た。君が昨日、見通しが立ったと報告していれば、銃を使うような馬鹿なマネはしなかった筈だからな」

「何といおうと、私の株で、われわれは勝ったんだ。次の株主総会で私は副社長になる！」

高見沢は大声でいい、居間の本棚に向って突進した。本棚の下段の扉を大きく開けた。が、そこで、彼は呆然と立ちつくしてしまった。秋葉は彼の背に向って、冷ややかに、

「君が集めた株は、おれの冷蔵庫の中だよ」

「盗んだな！」

「君が盗んだようにね。もう一つ、セスナに細工して、前の社長を墜死させたのも多分、君だろう。中年を過ぎて、急に野心に燃えると、男は見境がつかなくなるものだからな」

「証拠があるか！」

「ないさ。だが、ここに、君が、自分の会社を裏切った証拠のテープがある。君を社会的に葬るのは楽だよ」

「私にどうしろというんだ？」

高見沢は、急に、がっくりと肩を落した。もともと、野心に見合うだけの度胸のない男だったのだ。それが普通だろうが。

「やって貰いたいことが二つある。第一は、すぐ辞職願いを出すんだな。懲戒免職になって、ブタ箱行きよりマシだろう。理由は、株集めで疲れ切ったでもいい。三田村社長は、君に感謝して、現在以上の退職金を出すだろう。それで第二の人生を始めるんだな。第二は、君はサン

オイルカンパニーに電話して、計画は失敗し、このままでは、刑事事件にサンオイルを巻き込みかねないというんだ。それを救う道は、三田村石油の株を一刻も早く手放して、無関係であることを立証するよりないとね。それが嫌なら、このテープを公開するより仕方がない。そうなれば、退職金も貰えず、臭い飯を喰うことになるがね」

「わかったよ」

五十歳の営業部長は、急に、十歳も年とったような声を出し、大阪のダイヤルを回した。一週間前には、彼に出世を約束する筈だったダイヤルをである。

10

月が変った日の夕方、少し酔って、秋葉が事務所に戻ると、佐久間理恵と、もう一人、若い男が、ソファに腰を下して、彼を待っていた。

「あたしの弟で、S大学へ行っている昇一です」

彼女は、例のいくらか甘い感じのするアルトでいった。秋葉は、二人の前を通り過ぎ、机に腰を下して煙草をくわえた。

「それで、姉弟で、僕をペテンにかけた言いわけに来たというわけかね」

「悪いとは思ったんですけど、他に方法がなくて」
「成程ね」
「あの人から、前社長は殺されたに違いないと聞かされました。そこへ、サンオイルのような大きな会社が、うちを系列下へ入れようと動き始めたんです。弟から、今の企業間の競争は生きるか死ぬかだと聞かされて、大阪へ行ったあの人が心配になって来ました。中東問題で、サンオイルは、どうしても、うちを併呑したがっていたからです。でも、女のあたしには、どうしたらいいかわかりませんでした。警察に行っても、事件が起きていないのだからと取り扱ってくれないし、大きな探偵社は、相手がサンオイルと知ると、すぐ断ってしまうんです。市場調査なんかのお得意だというので。そうかといって、小さな探偵社は、信用おけませんし」
「それで、僕に白羽の矢が」
「ええ。あなたという人は、危険なことが好きで、頼んだことは、必ずやり遂げて下さる人だと聞きました。でも、気に入らないと動いて下さらないというし、漠然と、社長を守ってくれというだけで、引き受けて下さるかどうかわからなくて」
「それで、僕が姉に知慧をつけたんです」
と、大学生だという弟がいった。
「あなたを、殺し屋と間違えたふりをして、姉を殺してくれと金を送りつけました。あなたは、

きっと、興味を持って、姉のことや、その周囲の人間を調べるに違いない。僕は、調べるなといえばいうほど逆に、やっきになって調べると計算したんです」
「君は、大学で心理学でもやっているのかね？」
「専攻は犯罪心理学です」
「やれやれ」
「そして、姉と関係のあった三田村忠雄氏を疑い、大阪まで行くだろうと思いました。あなたが、彼のまわりを調べ廻ってくれれば、それだけで、サンオイル側も、手を出すのを控えるだろう。上手くいけば、前社長を殺した犯人を見つけて下さるかもしれない。そう考えたんです。上手くいったようにみえたんですが、大阪のゴルフ場で、社長さんが狙撃されたときは、蒼くなりました」
「君みたいな若僧に、まんまと引っかかったのは生れて始めてだよ。しかし、姉さんが、あまりにも、会社の内部事情まで、簡単に話してくれるので、最初から少しはおかしいと思ったがね」
「あたしが悪いんです」
と、彼女がいった。
「あなたのおかげで、あの人が無事に帰って来て感謝しています。ただ、営業部長の高見沢さ

んが、急に辞めたり、あんなにうちの会社を、系列下に置きたがっていたサンオイルが、急に、うちの会社の株を手放したり、わからないことが続いているんです。秋葉さんは、その理由を知っていらっしゃるんじゃありませんか？」

「僕は、会社内部のことには興味はない」

「そうですか。じゃあ、約束の百万円を受け取って下さい。約束ですから」

「それは、君を殺したら貰う約束の金だから貰えないな。危険は好きだが、人を殺す趣味はない。それに、君を殺すことは、二人の人間を殺すことになる」

秋葉の言葉で、彼女の顔が赧くなった。

「ただし――」と、秋葉は、ひょいと机から床に降りて、姉弟を見た。

「一つだけ要求がある」

「何でしょう」

「まず、二人に立って貰おうか」

「――」

姉弟は、不安気な表情で、ソファから立ち上った。

秋葉は、煙草をくわえたまま、ゆっくりと二人に近づき、いきなり、弟の方を思い切り殴りつけた。背の高い弟の身体は、ドアのところまで吹き飛び、派手な音を立てた。姉の佐久間理

恵が悲鳴をあげた。

秋葉は、のろのろと立ち上る弟の方に向って、ニヤッと笑いかけた。

「この間殴られたお返しだ。このくらいの力があれば、本物の殺し屋になれるかもしれんな」

一九七四年一月「小説サンデー毎日」

解説

中島河太郎（なかじまかわたろう）
（文芸評論家）

西村京太郎氏は昭和三十八年に、「オール讀物」推理小説新人賞を受賞し、翌年、書下ろし長篇『四つの終止符』を刊行した。翌四十年には『天使の傷痕』により、第十一回江戸川乱歩賞を受賞している。

いずれもヒューマニズムにもとづいた社会性を帯びた作風であった。デビュー当初の地味で堅実な作品からは、今日のベストセラー作家はとても予想できなかった。

たいていの作家はそうむやみに作風が変わるとは思えないが、著者の場合はまったく当たらなかった。デビュー当初の二長篇のあとに書かれた『D機関情報』はスパイ小説であり、そのあとには未来小説が控えていた。

それから海洋を舞台にしたサスペンス小説や謎解き小説を手がけるかと思うと、そのかたわらクイーン、ポワロ、メグレ、明智小五郎といった推理小説史上の名探偵を一堂に集めて、推理を競わせるパロディ・シリーズで、読者をあっといわせている。

西村氏はその後も奇抜な謎を提供して、読者を驚かせ、しかも見事な解決を与えてくれた。こまかいトリックを弄するというより、大胆でスピーディな展開によるサスペンス小説ですぐれた成果を挙げている。

このようにどんな作風でも消化して、自家薬籠中のものにできる才能は、推理作家としては稀有であろう。初期の作品の二、三を読んで、将来を卜することのできなかったのは、まったく迂闊であった。

昭和五十三年の『寝台特急殺人事件』にはじまったトラベル・ミステリーは、三十冊を越えて、なお継続中である。先に著者の作風の多様多彩に驚いたのだが、乗り物という狭い領域だけでも、これほど豊富な収穫を示した作家は珍しい。氏の長篇は八十作に及んでいるが、決して長篇だけに力を傾注しているわけではなかった。中短篇も二百篇に近いし、そのうちの五篇を選んだのが本書である。

「第二の標的」は新宿から出る私鉄の終電風景で幕を開ける。終電車の車両で発見された死体の主は商事会社の社員だが、真面目で仕事第一、非の打ちどころがなく、怨まれる筋合いがない。犯人は財布にも手をつけていないから物とりとも思われない。

動機が皆目つかめない犯行ほど始末に終えないものはない。被害者と同じ電車に乗り合わせ

た女性は、犯人を目撃していないにもかかわらず、警察では彼女を目撃者に仕立てて、犯人に罠をかけようとした。ところが見事に裏をかかれて彼女が殺されたのだから大失態である。

容疑者の自殺で事件のけりをつけようとする上司に、納得できない刑事が二人いる。一人は十津川で、その後トラベル・ミステリーで活躍する警部と同姓である。十津川省三は四十八年の『赤い帆船』に登場したとき警部補だから、五十年に書かれた本篇で刑事というのはおかしいが、それは同名異人で「十津川という名前が昔から好きだった」ので、ここにも顔を出したのだろう。

ともかく汚名を雪がなければならない二人の刑事は、全くちがった角度から考え直すことにした。そして動機のない物が犯人の場合が一つあると思いつき、こんどは自分たちが罠をかけて溜飲を下げようとする。狡智な犯人に対して発想の転換で窮地を切り抜ける着眼が利いている。

「謎の組写真」はカメラ雑誌の受賞作品が、発表前にネガごと盗難にあった謎を追いかける。題材は白鬚橋、橋のこちら側と向こう側とでは、そこに住む人々の生き方が違って見えるところが撮影者の興味をそそったからである。

とられた写真が捨てられていたのを発見され、雑誌に載ったが、一枚だけすり替えられていることに気づいた。その写真家は、新雑誌のグラビア用にと南太平洋の島々に取材旅行を頼ま

れたが、帰国してみると雑誌社も編集者も消えていた。そのうえ、カメラ雑誌の編集長まで殺されて、写真家は混迷の淵に立たされる。

ただ一つだけ突破口がある。なぜ一枚だけすり替えられたか、それを解く鍵は人物の異動にあったから、撮影日に何事があったかを調べた。彼の熱意が少しずつ報いられたが、それを断乎として遮るのはアリバイの壁である。

写真を楯にとった防壁なら、写真家の面目にかけても打破しなければならない。カメラによるアリバイ作りでは、松本清張氏や土屋隆夫氏にもあるが、ここで写真家はレジャー写真なのに、なぜ白黒で撮ったかをまず疑って、新しいトリックを案出している。

一枚の写真にたまたま写されたために、新たな殺人劇が起こったのは痛ましい限りだが、悪業が悪業を生むという鉄則は昔も今も変わりそうもない。

「アクシデンタル・シャイブ」には、生粋の海の男たちが登場する。二十五歳から四十歳までの四人、職業も性格も違うが、海とヨットが大好きという点では共通していた。

全日本ヨットレースで、かれらの不恰好な艇がかえって有利となって、二位までせりあがったとき、波間に浮かぶ人を見つけた。「海が好きな人間なら、誰だってレースより人間を助ける道を選ぶ」のがかれらの信条だった。

だがその信条は裏切られた。かれらの一人は不審な死を遂げ、救助した男は姿をくらまして

いる。二人ともつけていたライフ・ジャケットの謎から、次第にたぐり出した、卑劣な陰謀の輪廓がつかめても、証拠がない以上、司直は動いてくれない。

呆れはてた真相に到着したところで、手も足も出せないのは歯がゆい限りだが、最後の競走のサスペンスも、またもや海の男のヒューマニズムで締めくくられている。どこまでひとがいいのかと、冒険小説ばやりの現代では飽きたらないかもしれないが、さわやかな結末にはちがいない。

「神話の殺人」はテレビ界が舞台である。

「日本一の変り者」という番組に出た人力車を引く女性というのはインチキだときめつけた投書があった。受け取ったテレビ批評誌の編集長は真実を確かめに出向いて、投書の出たらめでなかったことが分かったが、肝腎の女性は死体となって発見された。

テレビ関係者が一喜一憂する視聴率というものが、どんなに活殺自在の威力をもつものか、想像に余るものがあるだろう。その数字を高めるためには、権謀術数はもとより、殺人すら犯しかねないほどの加熱ぶりである。

匿名の投書が導火線となって殺人事件へと発展してしまったが、大衆はブラウン管に映ったものは真実だと信じているから、その神話は必要だというディレクターのことばが印象的である。

「危険なダイヤル」は探偵務所を開業している秋葉の紹介にはじまる。警察に頼めない事件の解決を依頼されるのが彼の生き甲斐である。危険であればあるほどいいのだが、頼まれたのは殺人であった。殺す相手は若い女性である。

依頼者の請求は時日を限ったうえに、秋葉の行動を逐一監視してうるさく注文をつける。秋葉は殺す相手に堂々と会って、依頼者のおどしを憚らず、かえってその隠された意図をつかもうとする。

その小気味よい行動ととぎすまされた頭脳で、事件の概要をつかみながら、なお盲点があって一杯喰わされる結末はなかなか心憎い。

短篇を通して、著者のストーリー・テラーの冴えた技巧を知るには恰好の一巻である。



光文社文庫

推理傑作集
セカンド・ターゲット
第二の標的

著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）

昭和60年9月15日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　凸版印刷

発行所　株式会社 光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942)2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1985
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70227-9　Printed in Japan

お願い　光文社文庫をお読みになって、どんな感想をもたれましたか。「読後の感想」を編集部あてにお送りください。

また、このほか光文社文庫では、どんな本を読まれましたか。今後、どんな本をお読みになりたいですか。どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。

光文社文庫編集部



書下ろし傑作小説 勢ぞろい！

光文社文庫創刊1周年記念

青春の神話	森村誠一	●書下ろし・長編スーパーミステリー
謀略の滑走路	大藪春彦	●書下ろし・長編ハードアクション小説
鎌倉薪能殺人事件	斎藤栄	●書下ろし・長編推理小説
暗黒の狩人	勝目梓	●書下ろし・長編スーパーバイオレンス小説
卑弥呼塚殺人事件	島田一男	●書下ろし・長編推理小説
妖魔陣	菊地秀行	●書下ろし・長編超伝奇バイオレンス小説
確率2/2の死	島田荘司	●書下ろし・長編推理小説
死霊鉱山	草野唯雄	●書下ろし・長編恐怖推理小説
007を追え孔雀警視	志茂田景樹	●書下ろし・長編ユーモア推理小説
帝王コブラ	門田泰明	●書下ろし・長編スーパー・ハードアクション
天城峠殺人事件	内田康夫	●書下ろし・長編推理小説
怒りのヘリック	田中光二	●書下ろし・長編SF冒険小説

書下ろし&オリジナル 勢ぞろい!

光文社文庫創刊1周年記念



はるひワンダー愛(ラブ)	辻　真先(まさき)	●書下ろし・長編ユーモアSF小説
逃げ出した死体	山村正夫	●書下ろし・長編ユーモアミステリー
眠れぬ夜の悪魔	青柳友子(あおやぎともこ)	●書下ろし・長編推理小説
CFガール	喜多嶋隆(きたじまたかし)	●書下ろし・長編新感覚小説
あっちゃんの推理ポケット	田中雅美(まさみ)	●書下ろし・長編推理小説
H殺人事件	清水義範(よしのり)	●書下ろし・長編ユーモア推理小説
太陽の汗	神林長平(かんばやしちょうへい)	●書下ろし・長編近未来SF小説
ロンドン警視庁特派捜査官	J・メルヴィル 高見浩・訳	●書下ろし・長編推理小説
遅れて来た客	赤川次郎	●モダン・ホラー傑作集・オリジナル
第二(セカンド)の標的(ターゲット)	西村京太郎	●推理傑作集・オリジナル
その子は目撃者	夏樹静子	●推理傑作集・オリジナル